
国盗物語

深谷みどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

国盗物語

【Nコード】

N1861V

【作者名】

深谷みどり

【あらすじ】

「尊き紫衣の魔道士たる、キラ・エーリンどの。あなたにお願いしたい件があり、参上いたしました」

金髪の美青年がそう云ってひざまずいたとき、キラは心の中で舌打ちした。これで仕事はクビだ。せっかく最高位の魔道士であることを隠して働いていたのに――。平穏な願望のために努力している少女と、不穏な事情のために彼女を巻き込む青年が登場するファンタジーです。

実は最高位の魔道士なんです。

そもそも雇用人だからと云って、空腹を我慢し過ぎた態度がまずかったのだ。

きゆるきゆる、とお腹が軽い音を立てる。思わず赤面すると、聞き捉えたらしい主人が軽く笑った。悪かったね。きゅっきゅと皿を磨く合間に、小さく言葉を投げかけてくる。

「ちようどいい頃合いだ。先にお昼に行っちゃいな」

はい、と口で応えながら、キーラは店内を見回した。午後の光が差し込んでいる室内には、濃褐色のテーブルが並んでいる。テーブルについているお客はほんのわずかだ。自分自身でも納得して、前身頃を覆うエプロンを外そうとしたとき、扉のベルが軽やかに鳴り響いた。

新たに入ってきたお客は、金髪の青年である。

とっさに主人を見て、判断を仰いだ。詫びるような眼差しに、笑って首を振る。お客を迎えるのはキーラの仕事だ。休憩時間が遅れたところで詫びてもらうような筋はない。

落ち着いた風情で、入り口に佇む青年に声をかける。青年を見ているお客の視線を感じた。かすかなざわめきも聞こえる。近づいてみて納得した。この港湾都市マーネにおいて、ちょっと珍しいくらいに優美な美青年だ。そんなことを考えていたから、反応が遅れた。

その優美な美青年は、ふわりと流れるような動作でキーラの脚元に跪いたのである。

咄然と口を開いた。ざわめきが大きくなる。だが青年の言葉を聞いた途端、キーラはさーっと血の気が下がっていく心地を覚えた。

「尊き紫衣の魔道士たる、キーラ・エーリンどの。あなたにお願いしたい件があり、参上いたしました」

紫衣の魔道士っ、と主人が悲鳴のような声を上げる。無理もない、紫衣の魔道士と云えば、世界に十三名しかいないといわれる最高位の魔法使いだ。さまざまな人が集まるマーネであっても稀少である。雇用人の一人がそうだと知らされ、平静でいられる人間は少ないだろう。

だがキーラは困ったように見える微笑みを浮かべた。この場はしらばっくれるに限る。

「何のことでしょう。お客さま、他のどなたかとお間違えなのでは？」

ところがこの青年は、にっこりと侮れぬ微笑を浮かべたまま、言葉が続けたのだ。

「間違えるはずありません。他でもない魔道士ギルドの長にうかがって参りました」

くそじじい。思わず漏らした罵声が、なによりも明らかな肯定となる。

ざわめきは種類を変える。おそろおそろ主人の様子をうかがい、キーラは舌打ちした。

我慢などせずさっさと休憩に行っていれば、職を失うこともなか

つ
たの
だ。

資格が職探しに役立ちますか？ (1)

はあ、と溜息が唇からこぼれる。

さあさあと背後では噴水が流れる音がする。さんさんと輝く陽射しにあって、流れる水の気配は心地よい。噴水の縁に腰掛けて、キーラは再び溜息をついた。憂鬱である。

(これで連続十四店ねー……)

何の数かと云えば、就職の面接を断られた飲食店の数である。最初に勤めていたカフェは隠していた資格を知られたその日の内にクビになった。かといって他の店に職を求めても同様である。どうやら噂が回ったらしい。困ったような顔で云われてしまう。

『悪いんだけど、さすがに紫衣の魔道士さまをうち程度で雇うわけにはいかないんだよ』

魔道士としてではなく、従業員として雇っていただきたいんです。キーラはそう強く主張した。だがどの店の主も渋るばかりである。理由はわかる。最近とみに増えてきた、この面倒事も、その断られる理由のひとつだろう――。

三度目の溜息をついて、億劫に顔を上げる。にやにやと笑う男が2人、キーラを見下ろしていた。恰好から判断するに、このマーネに集まる傭兵だろう。腕の防具が特別製であることはすぐにわかった。魔道士対策をした傭兵なのだ。静かに腹底に力を集め始めた。男たちは気づかない。魔道士としての才は、欠片ほどにもないらしい。無言のまま、キーラは男たちの防具に向けて力を解放させた。ぱりんとかすかな音が響く。

「おいおい、このお嬢ちゃんが最高位の魔法使いだって？」

「信じられねえよなあ。紫衣の魔道士と云えば、魔道士ギルドで最低十五年の修業を、」

揶揄の言葉を紡ぎながら、何気なく男たちは視線を落とす。防具が割れて地面に落ちていた。もはや修復しようがないほど、防具は赤錆びて劣化している。

男たちの顔色が青白く変化する。キーラは立ち上がった。身長差で男たちを見上げる態勢になる。だが堂々と腕を組み、目を細めて見上げれば、男たちは慌てたように後退し、足をもつれさせた。

これでも最高位の魔道士なのだ。心の中で呟いたキーラは、もはや男たちを構わず歩き始める。二、三步歩いて、走り出した。なんだかいたたまれない。安っぽい挑発を仕掛けてくる男たちに苛立ちを覚えるが、まともに受けて立っている自分も自分だ。

（だって、しかたないじゃないの！）

ああいう輩は、追い払っても追い払っても、まわりついてくる。ならば一度だけ相手をして、彼らのやる気を削げばいい。

しかしそれは、よくよく考えなくても、飲食店のいち店員にふさわしいあらしい方法ではなかった。力任せの退散方法しか思いつかない、だから雇ってもらえないのだ、と云う事実にはキーラは気づいていた。現状の原因は、結局、自分にあるのだ。

（修行不足、って、ことなのよねえ）

ゆっくりと速度を落とした足は、無意識のうちに、通い慣れた道を歩いていた。

煉瓦造りの道も、こまごまと並ぶ建物も変わらない。けれどだん

だんと潮の匂いが強くなる。落ち込んでいた気分が、わくわくと浮上し始める。通り過ぎていく人ももはやキーラには構わない。この通りを進む人は、誰もが自らの仕事に集中しているからだ。

港である。キーラは風に髪をたなびかせながら、マーネの心臓部分ともいえる場所に足を踏み入れていた。ぷんと潮が香り、すぐそこまで波が押し寄せ、船がぷちよぷちよ揺れている。唇がほころぶ。邪魔にならないよう、船着き場ではなく灯台に足を向けながら、完全に先ほどのまでの気鬱を忘れた。歩いているうちに、楽観的思考も芽生える。

（まあ、明日もあるものね）

マーネにはまだ飲食店が存在する。あるいは、紫衣の魔道士だからこそ、用心棒を兼ねた店員として雇おうとする飲食店もあるかもしれない。

ようやく持ち直した希望にもう一度微笑んだとき、キーラはその気配に気づいた。眉を寄せて、振り返る。隠れるつもりはないのだろう、金髪の青年は堂々と歩み寄っていた。金の髪で陽光が煌めき、優美な美貌に彩りを添える。剣を佩いているが、まさか一人なのだろうか。思考の片隅で考えながら、キーラは口を開いた。

資格が職探しに役立ちますか？ (2)

「そこで止まって」

冷ややかに云い放てば、青年はわりと素直に従う。まず余裕のある表情で海を眺めて、キーラに視線を戻して、やや薄い唇をほころばせる。

「海がお好きなんですか」

「ええ好きよ。一人で眺めていられるならもっと好き」

だからどこかに行ってしまったと続けたかったが、寸前でためらった。相手は元凶である。だから温情をかける必要などないのだが、キーラとて、保身の気持ちくらいは持ち合わせている。藪をつついて蛇を出す類の態度はとりたくない。

青年から視線を外してまわりを見る。そのあたりに、あの護衛役がいるのではないかと考えたのだ。だが用心してもそれらしい姿はない。青年がおかしそうに笑う。

「セルゲイは置いてきました。あなたとは相性が悪いようですから」
「まあ。仮にも一国の王子が、不用心ね。襲われたらどうするの？」

わざと大げさに嘆いてやっても、にこやかな青年の表情は崩れない。
い。

「そのときはあなたに護っていただきますよ。報酬は後払いで、ついでに、今回の依頼も受けていたかどうかと考えています」
(気をつけよう、うっかり発動な温情に)

心の中で標語を作りながら、キーラは改めて青年を眺めた。忘れもしない三日前、お昼過ぎの出現時から思っていたことだが、惚れ惚れするほど優美な美青年である。自分に跪く姿も、まるで物語なのではないかと錯覚するほど絵になっていた。なにをしてもさまになる品位がある。

だからと云って、まさか一国の王子だとは思ひもしなかったが。

——アダマンテーウス大陸の北に、ルークス、という王国がある。

いまの季節ならば、ちょうど過ごしやすい気候だろう。事実、避暑のために赴く貴族も多かったと聞いている。ただし、それは十年前までの話だ。現在、ルークス王国に入国は出来ない。原因不明の鎖国政策を実施しているからだ。他国からの使者を拒み、国境に兵士を配備しているとも、魔道による強力な結界を張っているとも聞く。

そのルークス王国から、十年前に逃れ出た王子アレクセイだと、青年は名乗った。

少々、信じがたい話である。青年が持つ紋章は確かにルークス王室の紋章であり、精緻な細工は贋作とは思えない。だが、王子とは王宮の奥で隠されているものではないだろうか。たくさん騎士に護られているものではないだろうか。いくらここが、自由都市とも呼ばれる場所であっても、仮にも一国の王子がほいほい気軽に歩くものだろうか。本人が希望したとしてもまわりが許さない。王子とはそういう存在ではないだろうか。

(でも、相手の気持ちをあえて読まない態度は、確かに王族っぽい

のよね)

いまでも、じっと見つめるキーラの視線に動じず、悠然と微笑んでさえている。

微笑みは何も読み取らせない仮面だ。青年の魂胆は今日も読み取れない。キーラは諦めて、代わりに、自分の要求を突き付けることにした。

「アレクセイ王子」

「どうぞ、アリョーシャと」

「ルークス王国の王子さま。先にも申し上げた通り、わたくしにはあなたの依頼を承る意思はございません。ご了承くださいませ」

何度も繰り返してきた言葉を、今日もまた、突き付けてやる。

自らをアレクセイ王子と名乗った青年は、故国に潜入するための手助けを依頼してきたのだ。不穏な気配を嗅ぎ取ったキーラは即座に断った。ところがアレクセイは諦めが悪い。何度断ってもキーラを訪れ、懲りずに依頼を繰り返すのだ。

今回もぬらりひょんと受け流すかと思われた彼は、今までと違って、ようやく表情を変えてくれた。端整な口元が少し引き締まって、キーラを眺める気色が変わった。探る意思を慎重に隠した眼差しでキーラを見つめてくる。

「そこまで依頼を拒まれる、事情をお聞きしてもよろしいですか」
「まあ、ようやく聞いて下さるのね」

いやみっぽく呟いて、キーラはアレクセイと真正面から向かい合う。印象的な新緑の瞳を見据えて、胸を張ってキーラは応えた。

資格が職探しに役立ちますか？ (3)

「あたしは飲食店で働きたいの。魔道士としての仕事なんか、してられないのよ」

「……あなた、紫衣の魔道士ですよね？」

困惑したように疑問を発した気持ちは、不本意ではあるが、キーラにも理解できる。

しかし声を大にして主張したい。確かにキーラは最高位の魔法使い、紫衣の魔道士である。だがそんな事実が、この胸にたぎる想いの妨げになってたまるか、と。

「では逆にお訊きするわ。紫衣の魔道士、という資格が、職探しに有効だと本気で思うの？」

資格、と、複雑そうに呟いたアレクセイは、「それはもちろん」と頷いた。嘆かわしい。キーラは溜息をついた。この青年は、他の人たちと同じように、何もわかっていない。本当に有効であるなら、現在のような状況になっているはずがないではないか。

「そんなはずないじゃない。そもそも魔道士とはどういう存在だと思ってるの」

「世界に働きかけ、常人には不可能な技を可能とする人々だ、と認識しています」

「そういうことじゃないの。魔道士とはね、つまりは半端なオタクなのよ」

きっぱり云いのけると、アレクセイは「オタク」と呟いて絶句した。

だがキーラはそう考えている。確かに不思議の技で戦うことが出来る。世界に対する深い知識も持ち合わせている。しかし戦士という意味なら魔道士は騎士たちには敵わないし、識者と云う意味なら魔道士は研究者には敵わない。半端な存在なのだ。

確かに魔道士をありがたがる風潮はある。戦士であり、識者でもある。

つまり、使い勝手がいい。

けれど堅実でつましい生活を送ろうと思えば、これほど使えない資格はない。普通の生活に戦士としての技能は必要ないし、得た知識も生活に役立つような知識ではない。つまりは最高位の魔道士という資格持ちでも、資格を持っているだけでは食べていけないのだ。

「だからあたしは、生活の糧を得る手段として、飲食店の店員を選んだのよ。将来は、カフェを開きたいの。美味しいお茶とお菓子を出すお店を開いて、このマネで平和に暮らす。そのためにはお金を貯めなくちゃいけないし、お茶を淹れる技能もお菓子を作る技能ももっと手にしなくちゃいけない。あなたの依頼なんて受けている暇はないの」

「おもしろいですね」

唐突な言葉にキーラはぱちくりと瞳を瞬かせた。くすりと笑んで、アレクセイは云う。

「ならばなぜ、あなたは紫衣の魔道士になったのですか？」

思わずキーラは言葉につまる。

なぜ、紫衣の魔道士になったのか。いまの主張を聞けばだれもが抱く、当然の疑問だろう。

脳裏に過去のひと幕がよぎる。だが襲いかかる感傷をきっぱり振り切って、キーラは人差し指を立てて真面目な表情で告げた。

「それはね、大人の事情と云うものよ」

アレクセイは苦笑を浮かべた。「なるほど」と呟いて、ようやく事情を理解してくれたらしい王子さまは、それでもやはり、諦めが悪かった。

「報酬なら弾みますよ」

「楽して稼ぐことを覚えたくないわ」

「依頼を達成された暁には、王宮のシェフに師事出来るよう、取り計らいます」

「思想の違いね。あたしは限られた人専用の料理人に教わるつもりはないし」

「箔もつきますよ？」

「勝負は実力で挑むものよ」

きばきばと応酬する。

ここで負けてなるものか。キーラは眼差しに気合を込めて、にこやかな仮面を取り戻したアレクセイに向かい合う。とにかく依頼を諦めさせるのだ。すでに噂はマーネに広がっているが、王子さえないなくなればいずれは噂も消えていくだろう。その頃を狙って、もう一度就職活動をする。そうしたら就職の可能性は高まるはずなのだ。

たとえば、そもそものはじまりに、わざとらしく職場で跪いて、紫衣の魔道士どの、とまわりに聞こえるような声で呼びかけてくるような、抜かりない人物が相手であっても。

なんとしてもキーラは、依頼を諦めさせなければならぬのだ。

資格が職探しに役立ちますか？ (4)

なおも言葉を返そうとして、キーラは『気づいた』。

口を閉じて、腹底に力を集める。アレクセイから視線を外し、あちこちに視線を飛ばす。

誰かが、自分たちを見ている。それもひどく嫌な感触だ。だが、その姿が見つからない。

眉をひそめたところ、いつの間にか、接近していたアレクセイが楽しげな口調で呟いた。

「嬉しくなるくらいのタイミングですね。まさか本当にあなたを巻き込んでくれるとは」

「あなたの敵なの！？」

思わず叫んで、しまった、と呻く。

(巻き込まれないように距離を置くつもりだったのに！)

いささか薄情な思考かもしれないが、紛れもなくキーラの本音だ。まさか本当に、このアレクセイを狙う厄介事に巻き込まれるとは、続いて考えた。

なにせこの港湾都市は、中立であるがゆえに、護りも徹底している。マーネの市長は自警団を結成し、高位魔道士に守護も依頼している。すなわち、物理的にも魔道的にも護りを強化している街なのだ。一国の王子たるアレクセイがふらふら出来る、本当の理由はこれである。

だからこそ、街の内側から芽生える騒動には少々弱い。

ゆらりと現れた人を認めて、キーラはそんな噂を思い出していた。現れたのは、先ほど彼女に絡んできた傭兵たちである。仕返しに来たのだとは思えなかった。なぜなら彼らの表情は茫洋としており、魔道によって操られている特徴を示していたのだ。

腹底に力を集めたまま、傭兵たちを見据えて、キーラは口を開く。

「なら、あなたが撃退すべきね」

「おや、護ってくれないんですか？」

楽しそうに応じるアレクセイを、じろりとキーラは横目で睨んだ。彼には余裕がある。

「護衛を置いてきたのは、あなたの判断でしょ。だったら自分で責任を取りなさい」

「つれないですね。まあ、おっしゃる通りです」

云いながら、アレクセイはスラリと剣をさやから抜いた。そのまま構える動作を眺めて、キーラは少しばかり目をみはる。とてもなめらかな、隙のない動きだった。明らかに戦い慣れている姿に、こういう王子さまなのよ、と眉をひそめる。

それに、と、アレクセイが構えている剣にも目を向けた。

いままで目を向けていなかったが、装飾性などかけらもない。さやも同様だ。どこまでも実用本位な造りに、戦士としての姿が透けて見える。それは沈着で頼りになる戦士だ。ならば力を解散させようか。キーラは迷う。だが結局はそのままに、進み出る彼を見守る。

正直に云えば、この場から逃れたいと願っている。

先ほども考えた。巻き込まれるのはごめんだ。なし崩し的に報酬を支払われるのも、依頼から逃れられなくなるのも。だが、いま、この瞬間に逃れることは無理である。

なぜならこの場には、空間を区切る結界がある。傭兵たちが現れたと同時に張り巡らされた結界はズいぶん念が入っており、キーラでも解くには時間がかかりそうだ。結界の内側にいるから、理の問題から破壊は出来ない。アレクセイが健闘するとはいえ（これは決定事項）、粘着気質な魔道士（これは偏見による私見）に操られた傭兵たちがその隙に襲い掛かってきてはたまらない。集めた力はそのまま、自衛のために使おう、と、対峙する三人をキーラは眺めた。

剣を抜いたアレクセイに対して、傭兵たちも剣を抜いている。さすがに普段の笑みを消したアレクセイは、じりじりと囲い込むように迫ってくる傭兵をうかがっている。一対二。普通に考えれば、アレクセイが不利だ。だが単純に物事は運ばないだろう、と、キーラは考えた。相手が複数であっても、一対一になるよう、配置を考えれば切り抜けられる。キーラが知る事実を、アレクセイが知らないはずがない。

均衡が、急に崩れた。傭兵たちがアレクセイに襲いかかる。

同時に動いた傭兵たちは、しかし、大味な動きを見せた。アレクセイがさっと飛び退る。ばらばらに態勢を崩した傭兵に対し、彼は容赦なく剣を振るった。思わず目をつむる。だが人の肉を断つ気配は伝わってこなかった。代わりに重い音が響く。目を開ける。アレクセイと傭兵は向かい合っていた。ただ、一人が地面に倒れている。血は飛び散っていない。ちらりとアレクセイがキーラを眺めて、ふと苦笑した。

「婦女子の前で血を流すわけにはいきませんから」

「お氣遣いくださり、どうもありがとうございます」

そんな状況ではないでしょう、という突っ込みをしたかったが、つい礼を云っていた。

だがそんな余裕は吹き飛ぶ。倒れていたはずの傭兵が、むくりと起き上がったのだ。アレクセイの攻撃は、打撲という形で現れていたらしい。不自然に動かない個所がある。だが痛みを感じている様子もなく、再びアレクセイに向かう。動じた様子もなく、アレクセイは迎え撃つ。この期に及んでも、彼は本当に助力を求めない。キーラは舌打ちした、自分に対してだ。

（なに、のんびり眺めているの！）

傭兵たちは、何者かに操られている人形だ。ならば操り主を探せばいい。

集めた力をうすく辺りに広げていく。蜘蛛の糸のように張り巡らせて、やがて、引っかかる箇所を捉えた。残った力をキリのように集中し、その方向に解放させる。炎の特性を与えた。たとえば火事になったとしても、ここは海のほとりだ。すぐに消し止められる。

何者の姿も見えない、そんな箇所に向かった力は、何ものかに散らされた。

ただ、姿を隠す魔道は、潰えたらしい。いままで見えなかった存在が、そこに、いた。

白髪に茶色い瞳の老人だ。象牙色のローブをまとった魔道士は、キーラを見据えて詠唱のために口を動かす。キーラは再び、力を集め始める。いま程度の力を散らすことが出来るのなら、もっと多くの力で攻撃してやる。それでも紫衣の魔道士だ。老人は集まる力に

攻撃力の高さを感じ取ったのだろう。傭兵の一人がこちらに向かって来た。集めかけた力をとっさにそちらに振るう。失敗だった。炎を蹴散らして、なおも傭兵は向かってくる。

「キーラ！」

表情を変えたアレクセイが叫ぶ。傭兵と切り結んだままだから、キーラを助けられない。迫ってきた傭兵は、大きく剣を振り上げる。キーラは無駄とわかりつつ、右腕を掲げて頭をかばっていた。

ぱりいいいん、と、碎ける音が高く、その場に響いた。

資格が職探しに役立ちますか？ (5)

しゅ、と、空を切り裂く音が響いた、気がした。

きん、と小さく張りつめた音が続く。傭兵のふりあげた剣がはじかれる。黒い影が、キーラと傭兵の間に滑り込んだ。広い背中が前に立つ。はっはっという荒い呼吸が口から洩れる。どくどくと鼓動が脈打っている。自分の前に立つ男の名前を、キーラは茫然と呟いた。

「セルゲイ」

「お待たせしました、殿下」

低い声が、アレクセイに向かう。キーラは見事に無視されてしまったが、それでも窮地を助けてくれたことに感謝した。黒髪黒瞳のセルゲイは、すでに抜いていた剣で傭兵をけん制する。視界の隅にはアレクセイが傭兵を打ち払う姿があった。だが傭兵は倒されても復活するだろう。このままではいつか力負けするのでは、と考えたキーラが再び力を集めた瞬間、淡々とした女の声が響いた。

「そこまでにして、侵入者」

聞き覚えのある声に緊張がほどける。やわらかな、別の女の音が続いた。

「そちらの方々を返していただきますわ。彼らには、あなたの操り人形とならねばならない理由はありませんものね」

くすくす、と軽やかな笑い含みの声が、魔道士ではなくキーラに話しかけてくる。

「失態だのう、キーラ？」

ぐっと言葉につまりながら、二重の意味でキーラは安堵した。

まずは単純に窮地を救われ助力を得られたことに對して、次いで彼女たち三人が現れたと云うことは市長もこの事態を察しているということに對してだ。

唐突に現れた三人娘こそ、市長の依頼によってマーネを魔道的に護る魔道士たちだ。まったく同じ顔をした娘たちは、それぞれ、カールーシャ、メグ、リュシシィと云う名を持つ。位こそキーラに劣るが、三つ子ならではの特殊能力を持ち合わせていた。互いの魔道を増幅させるその能力を用いれば、黄衣の魔道士を優に上回る。だからこそ解きにくい結界を一気に破壊し、セルゲイをキーラの元に送り込むことが出来たのだ。

いま、傭兵たちにはアレクセイとセルゲイが對峙し、操り主にはマーネの護りを担う三人の魔道士たちが對峙している。

ならば事態の収束は任せてもいいだろう。そう判断したキーラは力を解散させた。

真紅色のマントをまとったリュシシィが物云いたげにキーラを見つめる。だがかまうものか。確かにこのままでは紫衣の魔道士としては名折れだが、飲食店店員志望のキーラとしては気にするほどのことではない。さらに、いざというときに活躍できないキーラを認めて、アレクセイたちが依頼を諦めてくれれば、めでたしめでたしだ。

(まあ、後が怖いから、逃亡だけはしないでおくけれど)

さて、これで敵はどう出るか。

傭兵たちの動きは、明らかに鈍くなっている。操り主たる魔道士が、動揺している表れだ。アレクセイたちが傭兵たちを突き放し、たんぼぼ色のマントをまとったメグが傭兵たちに力を向ける。操り糸を切った。傭兵たちは今度こそ動かない。アレクセイもセルゲイも、もう傭兵を気にしない。キーラの攻撃によって姿を現した魔道士に向かっている。三人娘たちの残る一人、深い紺色のマントをまとったカールーシャが二人を援護していた。魔道士の攻撃はすべて弾かれる。このまま捕まえられるか、と思いきや。

「ええい、忌々しいっ」

魔道士はひとこと叫んで、首からペンダントを引きちぎった。

そのままペンダントを天に突きだし、大きく息を吸い込む。キーラには直感的に、魔道士がなにをしようとしているのか、理解できた。細かなことはすべて後回しにして、瞬時に右手に力を束ね、魔道士が掲げているペンダントにぶつけた。再び、力が拡散する。魔道士はわざわざキーラを見て、にやりと笑った。試みは成功した。キーラは、魔道士を見据える。次の瞬間、魔道士は大声を張りあげて、姿を消した。

資格が職探しに役立ちますか？ (6)

(さて、どうしよう？)

キーラは沈黙したまま、考え込み始めた。無意味に服を払って、間を作ってみる。

だがそんな短い時間で考えがまとまるはずはない。ちらりとアレクセイをうかがった。見事に視線が合う。セルゲイに話しかけられながらも、王子さまはキーラを見つめていたようだ。その眼差しには失望も落胆もない。ただ、キーラを見定めようとする眼差しだと感じた。ひやりとした感覚が背筋を走り抜ける。

(やっぱり、話さないほうがいいかも)

心の天秤が平穏な方向に傾く。さりげなさを心掛けてアレクセイから視線を外した。

「まんまと逃げられてしまったのう、キーラ」

ぐしっ、と肩に重みがかかった。リュシシイがもたれかかってきたのだ。楽しいに紡がれた言葉に溜息をついて、肩にかかった腕をぴんと人差し指ではじく。だがリュシシイはキーラの肩から退こうとはしなかった。

「そうね。あたしだけじゃなく、あなたたちも相手していたのに」「まったく、失態じゃ。アレクセイ王子、あやつは何者であったか、あなたはご存じか？」

当然というべきだろう、三人娘たちはアレクセイの素性も知って

いたらしい。気負わず訊ね、答えを待っている。沈黙していたカールーシャも、倒れている傭兵たちを治療しているメグも、同時に顔を上げて、アレクセイを眺めた。王子はすでに微笑を浮かべていた。

「敵ですよ。あいにく、今までに捕えたことはありませんから、それ以上は不明です」

やれやれ、と、キーラにもたれかかったまま、リュシシイが肩をすくめる。

まあ、答えが得られるとはリュシシイも考えていなかったらしい。ようやくキーラから離れ、治療に戻ったメグの隣に座りこむ。意識を取り戻したらしい、傭兵たちのうめき声が聞こえた。メグが顔を上げて、咎めるようにアレクセイを睨んだ。

「少々やり過ぎですわ。あなたならもう少し手加減出来たのではありませんの？」

「お控えただこう、守護者どの。そもそもそちらの魔道士どのが有能であれば、殿下が剣を振るうことにもならなかったのだ」

そう云ったセルゲイが、わざとらしくキーラを横目で眺める。

かなり感情が逆撫でされた。これだから気に食わないのだ。心の天秤は完全に傾き、このまま沈黙することに決めた。悪かったわね、と、わざとらしく告げて、背中を向ける。

よし、このままこの場を立ち去ればいい。いまは誰もが、キーラが傍観してただけだとみなしている。一般市民でありたいのだ。キーラはこれ以上関わらなければいい。

「ああ、待ってくださいキーラ」

（名前を呼び捨てしてもいいとは云っていないんだけど）

それでもしぶしぶ振り返った。アレクセイは微笑んでいる。

しまった、と顔色を変えた。ひやり、と先ほど過ぎた感覚を思い出したのだ。先ほどのアレクセイは、キーラを訝しんでいた。セルゲイを制して、キーラの元に歩み寄ってくる。

「危険な目にあわせて申し訳ありません。大丈夫でしたか？」

まっすぐに見つめてくるアレクセイから、顔をそむけてキーラは応えた。

「気にしないでいい。あたしは無事だし、痛い状況を見なくて済んだんだし、」

「————では、あなたが最後に放った魔法について教えていただけますか」

この場を何とかやり過ごそうとしたキーラは、ぎくりと動きを止めていた。

思わずアレクセイを振り返ろうとしたが、思い直してまず困惑する表情を作った。欺こう。即座に決めたが、動揺は抑えきれない。やっぱり、気づかれていたのだ。

だが放った魔道の正体を話せば、おそらく、キーラは巻き込まれてしまう。不穏な事情に。よりにもよって、一国の進退を左右する大きな事情から、逃れられなくなるのだ。

「あれは見事に拡散してしまったようじゃが？ おそらく、あのペンドラントは逃走用の転移魔道が組み込まれていたのじゃ。緊急時用だからこそ、防御魔道も組み込まれていた、と、そういうことではないかな」

首を傾げて、リュシシイが言葉をはさむ。メグも頷いた。

ただ、ずっと沈黙していたカールーシャが、キーラを眺めながら口を開いた。

「リュシー。キーラが、その仕組みに、気づかないはずがない」

その場にいた人々の視線が、一斉にキーラに集まった。まずい。困惑した表情を作りあげながら、ひくりとひきつる口元を抑えきれなかった。セルゲイが眉を寄せる。

「きさま、まさか」

「怖い顔をするものではないよセルゲイ。キーラはまだ、わたしたちの依頼に応じていない。だからこそ、ペンダントにぶつけた魔道が攻撃のための魔道ではなく、追跡のための魔道だと言うことを話さなければならぬ義理はどこにもないのだから」

とりなすようでいて、確実にキーラを追い詰めるアレクセイの言葉である。

ほう、と、溜息が響いた。呆れた様子を隠さないカールーシャが、口を開く。

「でもマーネ市民としては、わたしたちの問いかけに答えなければならぬ」

「でなければ、市民権は剥奪だのう」

目を細めて、リュシシイも言葉をはさむ。ぎよっとキーラは三人娘を振り返った。

「ちょっと！ 王子さまの言葉を軽々と信じたりしないでよ！」

悪あがきだと自覚している。だが一度始めたごまかしは最後まで続けるものだ。

でなければ、平穏な生活が。キーラの願望が！

すると、いつも優しいに微笑んでいるメグが、憂いを込めて首を傾げた。

「では、キーラ。あなたは本当に追跡魔道をかけていないと？」

当たり前じゃないの、と口を開こうとして、メグの眼差しに射抜かれた。心の底からキーラを信じようとする瞳だ。この場では唯一、向けられる純真な瞳と云ってもいい。

口を開き、閉じる。云おうとした言葉は頭の中から消去された。やがてキーラはうなだれながら、云いたくない言葉を唇から押し出した。

「……。……ごめんなさい、追跡魔道をかけました」

強い敗北感を覚える。ここで云い逃れられないところが敗因だとよくわかっていた。

資格が職探しに役立ちますか？ (7)

ぼわぼわした光が、キーラの歩む先に浮かんでいる。

まるで意思があるかのような動きを見せているが、決してそんなことはない。これはキーラの魔道によって出現した光だ。姿を消した魔道士を追跡するため、他の誰にもわかりやすい形で出現させた。キーラはちらりと隣に並ぶアレクセイをうかがう。この光を渡して帰宅しようとしたのに、探索に同行するよう、アレクセイに云いくるめられてしまった。

(まずい、気がする)

確かに、なし崩しの依頼受理、の流れにはまっている気がする。いまになってキーラは後悔しているのだ。魔道士の意図を理解したあの瞬間、キーラは追跡魔道などかけずに大人しく逃がしておけばよかったと。だが同時に、見逃すことなど出来ない自分も認めていた。

アレクセイを襲撃する際に、自分までも巻き込んだ相手なのだ。しっかりと捕縛しておかなければ、後日、キーラを捕えて利用しようとするかもしれない。――あのときにそこまで考えていたわけではないが――、だからあの瞬間の判断は間違っていない。はずなのだが、現状を振り返ると致命的に間違ったような感覚がもりあがっていた。

すでに時刻は夕方を過ぎている。陽光の最後の輝きが紅く広がっていた。

キーラはいま、アレクセイとセルゲイ、それに三人娘が編成した探索隊と共に近らかな丘陵地帯を乗馬して進んでいる。マーネから北西に位置するこの場所を、もう少し進んだところに、アルブスと呼ばれる場所があるのだ。

アルブスとは古い言葉で『白』を意味する。その名が示す通り、岩塩を産出する場所だ。

岩塩は食品としてだけではなく、彫刻素材やシャンデリア素材にも用いられるから、マーネから他の地域に輸出される。岩塩工場もあり警備もされているそのアルブスが、キーラの追跡魔道によって示された。思いがけない場所だ。だが魔道に揺らぎはない。ならば探索しよう、と主張したのはアレクセイだ。そうして彼はいま、ここにいる。

（変な王子さま）

「どうしました？」

視線に気づいたのだろう、アレクセイが話しかけてきた。セルゲイもちらりと視線を飛ばしてくる。いい加減、乗馬に疲れていたキーラは、何も考えずに口を開いた。

「変な王子さまだ、と思ったの」

するとたちまち、セルゲイの眼差しが険をはらむ。本当に、忠義者だ。キーラはうんざりと視線をそむけた。アレクセイは怒っていない。それどころか面白がるような眼差しで、無礼を咎めるより会話を選ぶ。

「どういう意味ですか？」

「どうしてあなた、探索隊に加わっているの」

王子さまなんだから、宿で報告を待ってればいいじゃない。
そんな私見をぶつけると、セルゲイの眉間にわずかなしわが寄る。
そのままアレクセイを眺めた様子を見るに、セルゲイも同意見であるようだ。あっさりとアレクセイは応える。

「理由は三つほどあります。お聞きになりたいですか」

「……そうね。目的地はまだ先のようだから」

面倒くさい人だなあとthinkしながら、キーラは眠気覚ましに提案を受け入れた。

王族とはこうした存在なのだろうか。紫衣の魔道士としては、珍しいほど、キーラは王族たちとの付き合いはない。だからキーラが抱く王族イメージとは、これまでに読んだ物語や伝えた噂から抱いたものだ。そのイメージから、アレクセイは外れ気味である。

「まずひとつめの理由ですが、他の一般人を巻き込むわけにはいかないからです。彼の目的はわたしです。わたしの『何』が目的なのか、それは不明ですが、行動理由はわたしであるに違いない。ならば宿で待機している間に、再び襲撃してくる可能性がある」
(立派じゃないの)

しっかり巻き込まれているキーラは、別に皮肉でもなんでもなく、素直にそう感じた。

戦う力を持っていない人々へ配慮したと云うことだ。それは好ましい姿勢である。

あるいは、キーラの同行を求めた理由はこのあたりにあるのかもしれない。あの魔道士がキーラを利用する可能性は、アレクセイだって考えたに違いないのだ。

「第二の理由は、彼の身柄をマーネに、ただ、引き渡すわけにはいかないと云うことです。ベルナルドどのは市長として彼の身柄拘束を決定した。必要な尋問を経て、相応の罰則を与えるつもりなのでしょう。が、魔道士の情報を入手したい我々にとってそれは困る」「ということはもう、取引は成立しているの?」

マーネからの『探索隊』を見回し、アレクセイに訊ねる。頷きを得て、納得した。

ここにはマーネ側の責任者はいない。つまり魔道士を捕え、マーネに連行するまでの尋問は、アレクセイの責任で行うのだろう。アレクセイが必要な情報を入手した後、魔道士はマーネ市長にゆだねられる。詳細を訊かずに、罰則だけ与えると云うことだ。倫理的には、大いに問題がある。だが必要な時もあるのかもしれない。

「そして、第三の理由は」

アレクセイはそこで言葉を切り、悪戯っぽく瞳を煌めかせる。

「単純に、人手不足だと云うことです」

「はあ?」

キーラは素っ頓狂な声を上げていた。耳を疑う。人手不足と云ったか、いま!

素直に驚きだ。仮にも一国の王子が、人材不足「だから」探索隊に同行するなどと。

しかしよくよく考えれば、キーラに対する勧誘のしつこさもそれで納得できる。

「だから、あたしを雇いたいのか?」

「紫衣の魔道士は、色なしの魔道士、百人に匹敵すると紹介されま

したから」

けろりとアレクセイは肯定した。

要するに、アレクセイの部下に、魔道士はいないのだ。おそらく最初は、普通に魔道士ギルドへ条件に合う魔道士の紹介を依頼したのだろう。するとギルドの長は、キーラ一人だけを紹介した。アレクセイの依頼内容を検討し、それが妥当だと判断したのだろう。

（くそじじい）

キーラの苛立ちは、長い白ひげを顎に生やしたギルドの長に向かう。目の前に長がいたら、襟元ひつつかんでがくがく揺さぶりたい心境だ。よりにもよって、そんな厄介な依頼を、自分に回すとは何を考えていやがるのだ。おかげで自分は職を失い、新しい就職口に困るばかりか、厄介事に巻き込まれる始末だ。帰宅したらアウイス便で抗議文を送ろう。

「でもわたしがあなたを雇いたい理由は、ギルドの長だけが理由ではないんですよ」

「なにそれ」

目をすがめて端的に問いかけると、アレクセイが苦笑する。

口を開いて何かを云おうとしたところで、先行していた探索隊が戻ってきた。

資格が職探しに役立ちますか？ (8) (前書き)

死体（＊動きません）が登場します。苦手な方は心構えをお願いしますね。

資格が職探しに役立ちますか？ (8)

あわただしく馬を降りて、キーラは探索隊が示す場所に向かう。アレクセイもセルゲイも、とうに先に行ってしまっている。薄情者、とぼやきたい気分だ。馬に不慣れなレイディにもう少し気を遣ってくれてもいいんじゃないの。

とはいえ、状況は理解できているから、文句を口に出して云うことはない。馬は探索隊のひとりに預けて、走り出す。向かう先は、アルブスのはずれにある小屋だ。

——戻ってきた探索隊が告げたのは、魔道士が死体で発見された、という事態だ。

発見したのはアルブスの住民だ。物置になっている小屋を訪れた際、床に倒れている魔道士を発見した、という次第である。どうやら魔道士は無断で小屋に入り込んだらしく、住民の誰もが魔道士を知らなかった。困惑しているところに、探索隊が到着したらしい。

現時点でわかっていることは、たったひとつ。

それは魔道士が単独行動をしていたわけではなくて、何者かと共に行動していたと云うことだ。もっと思考を進めて、キーラは苦味を覚える。そんな魔道士が死体で発見されたと云うことは、仲間によって口を封じられたと云うことではないか。すなわち、キーラがかけた追跡魔道が、そのような事態を招いたのではないか。まだ確信はないのに、疑惑はむくむくとふくらむ。いやな気分だ、とても。

開けっ放しになっている扉から、小屋の中を覗き込む。

セルゲイが屈みこみ、床に倒れた人間を調べている。アレクセイ

は立ち、顎に指をあてて考え込んでいる。他の人間は、小屋を探索しているところだ。遺留品を探しているのだろうが、いまのところ見つからないようだ。邪魔しないよう、扉近くから問いかける。

「なにか、わかった？」

アレクセイは考え込んだままだったが、ふっとセルゲイが顔をあげる。キーラを認めて眉をひそめた。身構える隙もなくこちらに歩み寄り、肩を掴んでくるとキーラを方向転換させる。背中を押されながら、キーラはセルゲイを見上げた。なにがなんだか、さっぱりわからない。

「ちょっと。なに？」

セルゲイはじろりとキーラを見下ろした。

「女性が見るものじゃない。外に出ている」

「は？」

思いがけない言葉に、顔をあげていた。セルゲイの精悍な顔が、苦味を湛えている。

まじまじと見つめて、ようやく彼の言葉を理解できた。つまり、気遣われているのだ。

心の底からキーラは困惑した。どういう反応を示すべきなんだろう。ありがとうと云うべきか、莫迦にしないでと怒るべきか。迷っているうちに、アレクセイまでも近づいてきた。ただしキーラを遠ざけるためではない。

「セルゲイ、待て。キーラにご協力いただこう」

するとセルゲイはたちまち顔をしかめた。護衛の反応にかまわず、アレクセイはキーラに向き直る。引き締まった表情をしており、キーラも気分を引き締めた。

「あなたにお願いがあります」

何についてのお願いなのか、云われる前からわかっていた。

「遺体の検分ね？」

いやだ、断る。逃げ回っていたこれまでを思い出せば、今回もそう云うべき場面だろう。

だがいまのキーラにはそれは云えなかった。キーラはアレクセイの仲間ではない。だから魔道士の死の原因を探る義務はない。けれど敵の魔道士に追跡魔道をかけた、その結果はちゃんと受け止めておきたいのだ。

このまま、自分の日常に戻るために。

アレクセイがうなずき、セルゲイがちらりと視線を飛ばしてくる。おかしなものだ、と、キーラは唇をゆるめそうになる。アレクセイは普段からあんなに自分を氣遣っているのに、セルゲイは普段からあんなに自分を邪険にしているのに。まるで逆になったような、対照的な反応がなんだか楽しい。

「視るわ」

ありがとうございます、と、アレクセイが身を引く。その前を通って、魔道士の死体近くで屈みこむ。軽く瞑目して、遺体に触れた。かすかな足音がして、セルゲイが傍に立つ。

「身体に斬り傷はなく、まわりに毒物はない。だが口から血を吐いて、絶命している」

「内部に死因はあるということね」

恐怖にゆがんだ死に顔をできるだけ見ないようにしながら、キーラはとんとん、と指で死体の各所に触れていく。指先から探る力を放出して、魔力の残滓を探す。より感覚を研ぎ澄ますために、再びまぶたを閉じた。静まり返った人間の身体に、かすかな揺らぎがある。今なお残る、魔道の滓だ。もっともわかりやすい残滓がある場所に指先を移動させて、ぱちりと目を開けた。魔道士の心臓付近だ。魔力は手から血管をたどり、心臓にたどり着いたようだ。どういう意味だろうと考えながら、魔道士の左指を観察する。

するとくつきり、指輪の跡が残っていた。

跡が残っているのに、指輪はない。魔道士が倒れている床の部分にも腕輪の残骸はない。あるいは持ち去られたのか。頭の中にある知識を検索する。該当する知識が見つかった。

「わかりましたか」

頃合を見計らって、アレクセイが声をかけてくる。死体の傍に屈みこんだまま、あいまいな表情を浮かべて、キーラは顔をあげた。

「自信はないんだけど」

「かまいません。どうぞ」

「魔力から作り出された指輪に、心臓を食い荒らされたんじゃないかな、と思う」

主従はそろって眉を寄せた。そういう魔道があったの、と言葉をはさんで。

「はるか昔の、統一帝国時代にね、仲間の裏切りを防ぐ指輪、というものがあったの。魔力で作った装飾具に、あるキーワードを設定する。それを唱えたら、装飾具は変化し、対象の身体に潜り込んで心臓を破壊する、という仕組みだったと思う」

「なるほど。では相手は、統一帝国時代の技術にくわしいということですね」

魔道士の死体を見下ろし、アレクセイは呟いた。キーラはまぶたを伏せる。明らかになった事实は、単純に心に重い。小さく長く、息を吐き出して、立ち上がる。そのまま扉に向かって歩き出しながら、云った。

「あいにく、それ以外はわからない。外にいるから、終わったら声をかけて」

そのまま外に出るキーラを留める者はいない。扉を閉めて空を見上げる。白い月がぼかりと浮かんでいた。

資格が職探しに役立ちますか？（9）

ひと口、飲み込んだ紅茶は、信じられないほど豊かな薫りを放っていた。

貴重な氷と共に透明なグラスに入っている、冷たい水出し紅茶なのだ。水出し紅茶というものは初めて飲む。薫りは温かな紅茶より格段に劣るはず。これまでそう考えていたキーラは、ひと口大の焼き菓子と共に提供されたこの紅茶を、最初、軽く見ていた。

ところが喉を潤そうとグラスを唇に近付けた瞬間から、自分の料簡が狭いことに気づいた。グラスに唇をつけた瞬間から、ふわりと立ち昇る果物に似た薫り。喉を通っていく涼やかな感触、――たまきにはぜひ水出し紅茶を提供しよう。暑い季節の限定メニューにしたら素敵ではないか。

また、焼き菓子も美味しい。木の実が入っていて、サクサクしている。特殊な乳製品を用いているのだろうか。これほどサクサクした感触はこれまでに味わったことはない。

（レシピ、教えてもらえないかなあ）

思わずそんなことを考えてしまった。

緊張感がないと云われればその通りだろう。いま、キーラがいるのは、マーネ市長の接客室だ。淡い生成りの壁紙に、焦げ茶色の家具、と云う組み合わせが上品である。部屋の中央に三人掛けのソファがふたつ、向かい合うように配置されていた。

そのひとつにキーラは座っている。アレクセイと共に、マーネ市

長を待っているのだ。セルゲイは扉付近で待機している。奇妙なトライアングル配置に落ち着かない。

（いやゝな配置よね）

なぜ自分がルークス王国の王子と共に座っているのだろう。キーラはグラスを持ったまま考える。おそらくこれから行われるのは、マーネ市長とルークス王国王子の話し合いだ。一般市民であるキーラが呼び出されるのはもちろん、こうして座らされることもおかしい。この際、セルゲイの隣に立たされても文句は云わない。いいや、そうしたい、ぜひに。

こつこつこつ、と、扉が叩かれた。

セルゲイが応え、扉を開いた。銀髪をまとめた壮年の男が現れる。マーネ市長、ベルナルドだ。仕立てのよい長衣に身を包み、灰色の瞳をまず、アレクセイに向けた。

「お待たせしましたな、申し訳ない」

「いいえ。無理を申しあげたのはこちらです。お気になさらず」

立ちあがったアレクセイが微笑みながら応える。ささいな譲り合いが発生して、皆がソファに座る。ここで改めて、違和感を強く抱いた。アレクセイと同様に、ベルナルドと正面から向かい合っているのだ。おかしい。明らかにどう考えても、これはおかしい！

いまからでも移動を提案しようか。そんなことまで考えていると、ベルナルドは微笑んでキーラに話しかけてきた。かつて守護を依頼されたこともあり、顔見知りなのだ。

「ひさしぶりだな、キーラ。なかなか会えないから心配していたが、

元氣そうだ」

「一般市民が気安く市長に会えるわけじゃない。でも、ありがとう」

なんだか妙な感覚だが、とりあえず心遣いには、素直に感謝を返しておく。隣でアレクセイが笑った。キーラとベルナルドを見比べて、会話に参加してくる。

「なるほど、お二人は既知の仲なのですね」

「彼女がマーネに引越して来た時からの付き合いになりますな。もう、四年になるでしょうか。ちょうど紫衣の魔道士になったばかりで、いま以上に頑固な娘でした」

楽しげに二人は笑う。キーラは眉を寄せた。なぜ自分が、二人の会話のダシにされなければならないのだろう。そう感じたのだが、沈黙したまま、紅茶を飲んだ。余計な口出しは、これ以上のダシになる展開を引き寄せるだけである。

どうやらその判断は正しかったようだ。まもなく二人は死亡した魔道士について話し始めた。すでに探索隊から報告を受け取っていたのだろう。ベルナルドの表情が引き締まる。

「灯台近くで姿を見失い、アルブスで遺体となって発見されるまで、わずか三時間弱。……いささか反応が早いですな」

「おそらくマーネの介入を避けるためでしょう。そもそも今回の襲撃は、実行者の暴走であった可能性もあります。操られていた傭兵たちは？」

「治療院にて治療中です。ただ、残念なことに操られていた間の記憶はない。キーラに絡んだことまでは覚えているものの、魔道士に会った記憶もないようですな。しかしあったとしても、今回の騒動

は亡くなった魔道士一人による単独行動でしょう」

「ただ、転移先であるアルブスには仲間がいた。そしておそらく、その仲間がキーラの追跡魔道に気づき、口を封じるために魔道士を殺害した。わたしはそのように考えています」

二人の会話を聞き、キーラは再び押し寄せてきた、後味の悪さを噛みしめる。

とはいえ、すでにアルブスで落ち込んだあとなのだ。もうひと口、紅茶を飲んで気持ちを落ち着かせた。本当に美味しい。機会があったら茶葉の生産地も訊こう。

会話に加わることはせず、一人でまったりしていると、セルゲイと視線が合った。

気配を消して控えている彼は、どこかキーラを咎めるように見つめてきた。まさか会話に加われ、と云いたいのだろうか。だが仲間でもない身で何を語れというのか。確かにこの場に呼ばれているが、それはキーラとして心外であるわけで――。

（待て）

どうして自分はこの場に呼ばれているのか。一応、先にも考えた疑問が、なぜだか不意に、妙な重みを伴って迫ってきた。そのときだ。ベルナルドがアレクセイに告げた。

「いまは何もお約束できない立場から率直に申し上げれば、さっさと次に目的地に旅立っていただきたいものですな。いつまでこちらに？」

さりとアレクセイは、きらびやかな笑顔を浮かべた。

「それはこちらにいらっしゃる、紫衣の魔道士どのご意向によるでしょうか。我々は何としても、目的のために彼女を雇用しなければなりませんから」

（これか——っ！）

ぴたりと硬直して、キーラは心の中で絶叫する。おそらくアレクセイは、この流れを読んでいたのだ。アルブスではあれ以上を求められなかったから、完全に油断していた。というより、敵方の情報が少しだけわかったじゃないか。敵を探索する方法もある程度、想像つくじゃないか。あれじゃだめか。あれだけじゃ足りないのか。

（まずい、まずい！）

頭の中ではひたすらぐるぐると、同じ言葉が回っている。ベルナルドの眼差しがこちらに向いた。灰色の瞳は、にこやかに笑っている。キーラの口元がひくついた。アレクセイと同種の笑みだと見た途端、直感できていた。

「キーラ。そういえばさきほど、ギルドの長からアウイス便が届いたのだよ」

「……じいさまからですか。そうですか」

（ギルドの登録を抹消してもらえないかなあ）

うつろに応えながら、キーラは逃避気味に考える。もはやいやな予感を覚えるばかりである。紅茶を飲もうとして、空のグラスに気づいた。

お代わり要求したらダメかな。さらに逃避しようとしていると、ベルナルドが長衣のかくしから手紙を取り出した。そのまま差し出され、まじまじと見つめた後、しぶしぶ受け取った。面白がるよう

なアレクセイの視線を、無性に苛立たしく感じた。ごわごわした手紙は、ギルドの長が愛用する特殊な紙だ。まちがいなく、本人からの手紙である。

（ああ、開きたくない）

いつそ後で読み返すと云って持ち帰り、家で焼却してやろうか。破れかぶれのひらめきが頭によぎったが、無駄なあがきである。ギルドの長は間違いなく、キーラの行動を察するだろう。再び、アウイス便を送ってくるだろう。それでもここで開くよりはましだと感じるのだ。二人の喰えない狸が、自分たちに都合のいい展開を待ち構えている場所よりは。

「わたしにも届いた。同じ内容かもしれないが、アレクセイ王子の件についてだ」

退路が断たれた。キーラはしぶしぶ、促されるままに、手紙を開く。一読して、力が抜けた指から、はらりと紙が舞い落ちる。

——開いた手紙には、こう書いてあった。

『わしに引退してほしくなければ、アレクセイ王子の依頼を受けるように』

キーラを後継者に指名している長からの、抗いようのない最終通達だった。

認められる条件として資格は有効でした。(1)

これが夢ならいいのに、と、キーラは考えた。

どこまでも澄んだ青空が頭上に広がり、潮の薫りをたっぷり含んだ風が、キーラの褐色の髪を撫でていく。乗り込んだ船は、最新型の快速船だ。ぴかぴかに磨かれた甲板に立ち、いつも見上げていた灯台や、見慣れた港街が遠ざかっていく様子を眺める。

これが、自宅にある心地よいベッドで見る、一夜の夢であるのならよかった。

だが残念なことに、これは現実だった。いま、キーラはマーネからアダマンテーウス大陸を北上していく帆船に乗船している。目的地は北方にあるルークス王国、すなわちアレクセイたちの故郷だ。つまりキーラはギルドの長の「要請」によって依頼を受けたのだ。

(ものは考えようよあたし)

手すりに両手を置いて、先ほどからキーラは自分に云い聞かせている。

(これはまったく見知らぬ場所の、お茶習慣やお菓子レシピを得る機会。ましてやルークス王国は、独特の茶器がある場所でもある。ひよっとしたらひとつやふたつ、茶器をゲットしてマーネに帰ってこられるかもしれないわ)

自分をだましている感覚は確かにあるのだが、そう考えてみると、まるで仕入れの旅に出ているような気分になる。すでに自分はカフ

エを経営しており、カフェのためにおいしい茶葉を求めて旅立っているのだ。噂に聞く東方の皇帝御用達の茶葉を入手しようか。それとも南方の王様が育てさせているというブールを飲んでみようか。贅沢な迷いを抱える、という、途方もない夢が広がっていく。

「ここにいたのか、魔道士どの」

ところがやはり、夢想は夢想でしかないのである。うつとりと想像を広げていたところに、セルゲイが声をかけてきたものだから、キーラは我に返ってしまった。どんよりと不可視の暗雲を漂わせ、歩み寄ってきたセルゲイを見返す。

「……なに？」

「殿下がおまえをお呼びだ。ついてこい」

（なにそれ。それでおとなしくついていくと思ってるの）

云うなり、さっさと背中を向けた男に、思い切りあかんべーをしてやる。すると通りすがりの船員に笑われた。振り返ったセルゲイがじっとキーラを見つめる。奇妙な見つめあいを強要されて、しぶしぶキーラは動き出した。セルゲイの後を追いかける。セルゲイも再び歩き出す。速い。長い脚を動かして、セルゲイは先を急いだ。キーラは小走りになる。

と、急に長い脚の速度が落ちた。まさか気を遣ってくれたのだろうか。真偽を確かめられないまま、セルゲイは奥まった場所にある船室の扉を叩いた。応えを得て、開ける。

ひとときわ立派な部屋が待ち構えているのか、と気構えたが、アレクセイが待つ船室はごく普通の装飾だった。少なくとも、先に案内されたキーラの部屋と変わらない。ただ、広い。居間があり、寝室

がある。入浴室もあるかもしれない。とにかく入室したらいちばんに突き当たる、居間の中央に置かれたテーブルに着いて、アレクセイは待っていた。彼一人かと思えば、見知らぬ顔がいる。老人と男と少年だ。

テーブルに地図を置いて何事かを話していたらしい四人は、それぞれの眼差しでキーラを見つめてくる。値踏みをしているのかと思えば、ずいぶん好意的な眼差しだ。特に、少年の眼差しにはきらきらした尊敬があり、キーラはこっそり不思議に思う。

「お呼び立てして申し訳ありませんキーラ。紹介したい者がおりまして」

ああ、と、キーラは軽くうなずいた。正直、アレクセイとあまり顔を合わせたくない。用事があるなら、さっさと終わらせて欲しかった。

「気にしないで。そちらにいる人たちが、その、紹介したい人？」

「ええ。他の船員たちもあなたに紹介されたがっていました。さしあたっては自己主張の激しい三人だけ招きました」

「云ってくれるじゃねえか。他の誰よりもおまえに自己主張云々を云われたくねえよ」

ひどくぞんざいな口調で言葉をはさんできた男は、短く刈り込んだ金髪と褐色の肌を持っていた。鍛えられた肉体の持ち主で、腰に大剣を佩いている。じろりとアレクセイを睨み、キーラに視線を移して、にかつと笑う。白い歯が妙にまぶしい。太陽のような笑みだ。

「俺はアーヴィングだ。傭兵団の団長をしている。よろしくな」

「よ、ろしく願います」

差し出された大きな手をおそろおそろ握りながら応える。ごつごつと固い、でも温かな手のひらだ。いつまでも手を離さないから困っている、ばかりと老人が男を殴った。

「いつまでキーラの手を握っておるのじゃっ。さっさとそこをどけっ」

「ひでえなあ、コーリヤ爺さんよ。殴るこたあ、ねえじゃねえか」

「ふん。殴っても改まらないおまえさん相手には当然の仕置きじゃ」

二人の何気ない会話を聞いて、キーラは目を見開いた。

(コーリヤ!?)

思わずアレクセイに視線を向ける。驚きの眼差しを受け止め、アレクセイはうなずいた。

「コーリヤ爺をご存じのようですね」

「『チーグル』を知らない人間なんて、いないと思うわ」

そう云い返して、改めて老人を見つめる。髪もひげも真っ白で、どちらかといえば小柄な老人だ。けれど、しなやかな鋭さと温かさがちょうどよく調和された容貌の持ち主でもある。妙に人を惹きつける老人は、キーラの視線を受けて照れたように笑った。

「お嬢ちゃんのような、若い娘さんに二つ名を知られるのは、少々恥ずかしいの」

「どうして? かっこいい二つ名じゃありませんか」

本気で応えると、老人はさらに照れた。

チーグルとは、ほぼ生ける伝説と化している傭兵の二つ名である。数々の戦場から必ず帰還してきた傭兵。味方には畏敬を、敵には戦慄を与えた。その剣技は卓越しており、傭兵だけではなく騎士にも称えられる存在だと云う。

キーラはアーヴィングにも視線を向けた。彼が団長をしている傭兵団の名前も、すでにわかった。チーグルを慕った傭兵たちが結成したという、『シエールイ・チーグル灰虎』だ。最強と名高い傭兵団である。キーラは首をかしげる。それほど傭兵団なら。

「『灰虎』なら、高位の魔道士とのつながりもあるでしょう」

なにせ、戦場に出るのが仕事だ。戦士の亜種である魔道士に対抗するため、高位魔道士と連携したこともあるはずである。そのつてをたどれば、わざわざキーラに依頼しなくても、と、いまだ往生際の悪いことを考えて、アレクセイを見る。

アレクセイは微笑んだ。例の、内側を悟らせない微笑みだ。

う、とたじろいでいると、沈黙していた少年が堪え切れないように口を開いた。栗色の髪に黒色の瞳を持つ美少年だ。身体つきは細いが、それでも立派な剣を佩いている。

「そんなことは気にしないでください。僕は、僕たちはあなたがいいんですからっ」

「ああ？」

思わず胡乱に、喉の奥から野太い声をあげた。

乙女として微妙な反応であったのだが、少年は気にした様子もな

く、言葉が続ける。

「うれしいなあ。最高位の紫衣の魔道士さんが、僕と同年代だなんて。僕、僕もチーグルのように世界最高峰の剣士になりたいんです」

がんばりましょうねっ、と云われ、思わず頬がひきつった。なんだこの生き物。

「彼はキリルです。『灰虎』では最年少の傭兵ですよ」
「え、」

うそ、と思わずつぶやくと、キリルはぶうと頬をふくらませる。どういう意味ですか、と騒ぎ始めるが、無理もないよね、とキーラは心の中でつぶやいた。子供じみた反応を見てしまったらますます信じられなくなる。だが、さすがに初対面の人間に云うことではない。微妙に気まずさを覚えていると、アレクセイはキリルを制した。ぴたりと静かになる。

「彼にはあなたの護衛をしてもらいます。仲良くしてくださいね」
「よろしくお願いしますっ」

気分を害したことも忘れたように、キリルはあっけらかんと云い放つ。よろしく、と、口先で返しながら、キーラは何となく先行きに不安を覚えた。頼りになるのだろうか、自分より弱そうに見えるのだけだ。

認められる条件として資格は有効でした。(2)

キーラが乗船している船は、傭兵集団『灰虎』の生活の場だ。

かつて某国からコーリヤが、戦勲として与えられたらしい。剛毅な話だ、とキーラは感心した。マーネの港は商船がたくさん出入りしていたが、個人所有の船は見たことがない。

だからさまざまな衝撃が収まった後は、キリルを引き連れて探検した。咎める者はいない。むしろ戸惑うくらい、好意的に接してもらっている。なぜだろ、と首をかしげると、あたりまえですよ、と、キリルがきっぱり断言した。

「なんといっても、キーラさんは紫衣の魔道士なんですから！」

どうしようもない違和感を覚えて、キーラは口を開いた。

「キリル。もしかしてあなた、最近『灰虎』に入団した人？」

「えっ。はい、まだ一か月くらいしかたっていないませんが……。どうしてですか？」

なんとなく、と、答えながら、キリルとまわりの微妙なズレに納得した。『灰虎』の団員がキーラに好意的なのは、おそらく紫衣の魔道士だからではないだろう。

感覚的な意見だからうまく云えないが、団員たちがキーラを見つめる眼差しは高位の魔道士に対するものではないのである。もっと心の内側に入れた存在に向けるような、例えるなら親が子を見守るような、温かみを帯びた眼差しなのだ。だからキーラは困惑してい

る。そのような眼差しを向けられる心当たりはさっぱりない。

と、思っていたのだが、思いがけないつながりを夕食の席でコーリヤ爺から知らされた。

「じいさまのことをご存じなんですか？」

テーブルの奥、コーリヤとアレクセイに挟まれる形で座らされ、居心地の悪い想いを味わっていたキーラは、驚きの声をあげた。コーリヤとギルド長が知己だと聞かされたのだ。

「じいさま。……いいのう、うら若い乙女にそう呼んでもらえるとは」

うつとりしたようにつぶやくコーリヤに、内心引いていると、アレクセイが口をはさむ。

「コーリヤ爺。キーラが困惑してますよ」

するとコーリヤは、いかんいかん、と、軽く頭を叩いた。

「つい思わず。そう、魔道士ギルドの長はな、わしとは同郷なのじゃ。ゆえにの、よく戦場を共にしておったし、気心も知れている。知己というより、昔馴染みというべきかの。だからこそ、あやつに引き取られたおまえさんも、ちいこい頃から知っておるよ」

こんなに、とコーリヤは右手で膝の高さを示した。すると、テーブルに集まりだした団員たちが、「俺も」「俺も！」と口々に主張する。

キーラはぽかんと口を開けた。まったく記憶にない。これだけ体格のいい男たちと会ったのなら、少しは記憶に残ってもおかしくないのだが、さっぱりである。

「まあ、わしらはいつもギルド長室から、おまえさんを見下ろすばかりだったからのお。いろいろ覚えておるよ。魔道の実習授業で魔力を暴走させたり、おとなしい男子生徒を泣かせたり、近所の下着泥棒を捕まえるため特殊訓練を」

「忘れてください」

忘れかかっていた過去のあれこれに、アレクセイを真似た笑顔できばっと口をはさんだ。必死な想いを感じ取ってくれたのか、コーリヤは話題を変える。そういえば、と、身体を乗り出してわくわくしたように話しかけてくる。

「そういえば、お金は貯まったかの？ マーネに店を開くつもりだと聞いて、そのときからわしは楽しみにしておったのじゃが」

まあ、と、驚きの声をあげた。

（なんていいひと！）

エセ笑顔が本物の笑顔に変わる。これほどまっすぐにキーラの夢を楽しみにしてくれる人など初めて見た。まあまあです、と応えながら、夢について語る心構えを用意した。聞いてくれ、聞いてくれ。これまで紫衣の魔道士だと知る人に将来計画を語ったことはない。だれもが口をそろえて、「魔道士でいいじゃない」というのだ。物足りないのである。

隣でアレクセイが、おや、と声をあげた。酒を注がれた器から唇

を離す。

「キーラの希望をご存じだったのですか」

「むろんじゃ。あやつは渋い顔をしておったが、わしはそれもよいと思ったよ。キーラが考えて希望したのじゃ。ならば文句を云ってもしかたあるまい」

「じいさまがそう思ってくれたらいいんですけどね」

溜息交じりに口をはさんだ。ギルドの長がキーラを後継者に指名している理由は、まだ年若い、定職にも就いていない紫衣の魔道士だからだ。他の紫衣の魔道士にはギルドより優先すべきものがある。ところがキーラにはない。いまはそう、みなされているのだ。

（カフェを開きたい、と云っているのに）

まあ、人生のほとんどを魔道士として過ごした長には受け入れにくい要望なのだろう。

それにずいぶん譲歩してくれたほうだ。長はキーラを後継者に指名しつつ、希望を黙認してしてくれる。今回のような件もまれにあるが、マーネで働くことを認めてくれているのだ。だからキーラとしてはその先を願わずにはいられない。ギルドの長が元気でいるうちに、後継者候補が他に現れるようにと。

認められる条件として資格は有効でした。(3)

とん、とホカホカと湯気が立つ料理皿が置かれた。キーラは目を見開いた。船の食事とは思えないほど、豪勢な料理である。とんとんとん、と次々と料理皿を並べて、その男は笑った。四角い顔にごひげを生やした厳つい容貌の男だが、アップリケの付いたエプロンを身に着けている。微妙なセンスだ。おかげで視線の向き先に困る。

「今日はキーラちゃん歓迎のごちそうさ！ たっぷり食べてくんな」

ありがとうございます、と、心の底からお礼を云いながら、ぐると料理皿を見た。初めて見る料理も並んでいる。ちよつと戸惑っている、アレクセイが説明を入れてくれた。

「こちらはイヴァシー・パド・マリナーダムです。小魚を炒め揚げ、酢で煮たものですよ」

「それはロビオ。豆をやわらかくゆでたものに、香味を混ぜた木の実を和えています」

「ああ、ジャルコーエはおいしいですよ。夏野菜を切って、鍋で蒸し焼きにしたものです」

と、このようにまめまめしく教えてくれるものだから、キーラはなんだか申し訳なく思えてきた。相手は意に染まぬ依頼に引き込んだ元凶（まだ根に持っている）だが、忘れかけてもいたが、一国の王子さまなのだ。一介の小娘に対して、このように気を遣わねばならぬ義理はない。口の中の食べ物をもとまず飲み込んで、キーラはアレクセイを見た。

「説明、ありがとう。でもちゃんと食べてる？ 人にかまけてばかりはだめだよ」

もはや夕食の席は、宴会モードに突入している。

男たちは陽気に盛り上がり、時折、「キーラちゃんのために！」などという雄叫びが聞こえてくるが、そちらには適当に相手をしておいた。コーリヤは穏やかに男たちを見守っているようだが、実は誰よりも健啖だ。すすいすい小皿に料理をとって、ひよいひよい口の中に放り込んでいる。老人だからと云って食が細くなるわけではないらしい。

「食べてますよ。なんといっても懐かしい味ですからね」

「懐かしい？」

「ルークスの料理なんです。ここに来ただけはまだ子供でしたから、あまり食が進まなかったんですよ。するとヴォルフが気を遣って、これらの料理を用意してくれたんです」

違和感を覚えた。シイーという名のスープを飲んで、キーラはアレクセイに問いかけた。

「ということは、あなた、昔からこの傭兵団と一緒にだったの？」

そういえば云っていませんでしたか、と、思い当たった表情でキーラを見つめてきた。

「十年前に、国から逃れたときからね。彼らは父王に雇われた傭兵ですから」

長い付き合いなのだ。道理でアーヴィングをはじめとする団員たちに遠慮がないわけである。あるいは、アレクセイが王子さまらし

くないのも、それが理由かもしれない。

ふと思い当たって、キーラは盛り上がっている男たちを見た。黒髪黒瞳のセルゲイはいない。喧騒が苦手なタイプなのかと思いながら、ひらめいた言葉を口にする。

「じゃあ、セルゲイも昔からいっしょなの？」

「ええ。この十年間、ずっと。ほとんど友人ですね」

「の、わりには、ずいぶんカタイ態度だと思うんだけど？」

「気を張っているからですよ。あれでも三人でいた時には碎けていました」

「三人？」

不思議に思っただけで繰り返すと、アレクセイは口端を持ち上げた。

珍しい反応だ。いつものように誤魔化している微笑でもなく、かといって嬉しいからこみあげてきた微笑でもない。少しの寂しさを漂わせた、この場を取り持ったための微笑だ。

どうやら答えにくいことを訊ねてしまったらしい。キーラがちよっと迷っていると、アレクセイは気づいて、微笑みの種類を変える。今度はわかりやすい苦笑だ。

「失礼。わたしとセルゲイとミハイル、の、三人ですよ。……ミハイルはもういません」

（あー……）

ようやく理由を察して、キーラは少し、口ごもった。三人目の人物、ミハイルとやらは、もう亡くなっているのだ。いまこの瞬間の空気に適する言葉が閃かなくて、飲み物が入ったグラスを、ちんとアレクセイのグラスにぶつける。互いに無言でグラスを傾けて、

料理をつついた。ヨージキという穀物が入った肉団子を口に入れると、さわやかな風味が広がった。にんまりと頬がゆるむ。アップリケエプロンを着けたヴォルフが再び料理を運んできたものだから、キーラは思わず声をかけていた。

「すごくおいしいです。料理、お上手なんですネ」

空いた皿を集めたヴォルフは、キーラの賛辞に嬉しそうに笑った。

「そう云ってもらえると嬉しいねえ。ときどき、傭兵家業を引退して店を開こうかと思うこともあるよ。ま、こいつらが引き留めてくるから、考え直すけどさ」

「俺ら、がっちり胃袋つかまれてるもーん」

「いまさらヴォルフ以外のやつが作る料理なんぞ、食べねえよっ」

団員たちが主張すれば、ヴォルフはふん、と鼻で笑う。

「なっさけねえな、てめえら。それだからいつまで経っても娼館どまりなんだよ」

「あっ。同じ穴のムジナの際でよくもっ」

「しかたねえだろおおっ。胃袋は正直なんだよ胃袋はっ。くそっ、ヴォルフが女だったら、」

「うわあああっ。おめえ、禁断のひとことを云うんじゃねえっ」

にぎやかなことである。キーラは笑いながら、さらに食べる。おいしい。

そういえば最近、ほとんど一人で食事していたのだ。だから忘れかかっていたかもしれない、たくさんの人数で食べる食事が、ひどくおいしいものであることを。

宴会モードに突入したまま、夕食は深夜まで続けられた。

認められる条件として資格は有効でした。 (4)

(た、食べ過ぎたわ……)

口元を抑えながら、キーラはぐったり、寝台に横たわっていた。さすさと逆の手でお腹を撫でているが、そんな行為で満腹感が変わるわけがない。ひたすら待ちの態勢で、圧迫感が消えるよう、深呼吸を繰り返す。しょせん気休めだとわかっていた。

与えられた部屋は、思ったより明るい印象の部屋である。家具は少なく、二段になっている寝台と、衣装を収める箱がふたつ、あるだけだ。本来は二人用なのだろうが、キーラが唯一の女性だということで気を遣ってくれたのだろう。おかげでずいぶんのびのびできる。上衣をとりさったラフな格好で寝転がっていられるのは素直にありがたい。

時間はすでに深夜を回っている。いつもなら眠りに就いている時間だが、この満腹感のおかげで、眠りはなかなか訪れない。いっそ、少し運動したらよいのではないかと、閃いたのは、結構な時間が過ぎたころだ。部屋の外がしんと静まったころである。むくりと起き上がった、キーラは少し考えた。はたして勝手に出歩いてよいものか。

(大丈夫、よね?)

船の中を少し歩くだけで、どこにも後ろめたい理由はない。

それでも初めての場所だから、ためらいがあった。だがこれまでに団員たちが見せた、温かな反応が背中を押す。大丈夫だろう、と、振り切って、寝台から立ち上がった。

必ず鍵をかけること。しつこく念を押された扉を開けて、そっと廊下に忍び出る。ほとんど真っ暗な空間で、ゆらゆらと揺れるろうそくの光が頼りだ。もう皆は眠っているのだろうから、できるだけ足音を立てないように気を付ける。甲板を目指して歩き始めた。

ちなみに、護衛のキリルは夕食の席で酔いつぶれていた。新人であり、酒にも弱い彼は団員たちのからかいの種であるらしい。ほんのり赤い顔をしてしあわせそうに眠るキリルをヴォルフが軽々と担ぎ上げて、部屋に運んでいた。アレクセイが苦笑していたが、まあ、あんなに盛り上がったのだ、今日くらいは許容範囲に入れてもいいだろう。

歩くにつれて、少し冷たい風を感じ始めた。外に近いから空気も動いているのだ。思いがけずそれが気持ちよくて、キーラは歩く足を速めた。だんだん、視界が明るくなる。

ついに上甲板に着いた時、満天の星空を見上げて、キーラはしばらく沈黙していた。

衝動に駆られて、ふつとろうそくの明かりを消す。ひたひたと歩いて、船縁に向かう。ぎりぎり海を感じられる場所で空と海を共に眺めた。鼻に届く潮の薫り、髪を撫でる風の気配。しばらくそのままでいたが、ふと閃いて、ごろりと甲板に寝転がる。すると満天の星がまるで降ってくるようだった。圧倒的な感動がある。そよそよと、時折、潮交じりの風が吹く。このまま眠ってしまったら気持ちいいだろうな、と考えていると、かすかに物音が聞こえた。寝転がったまま、頭を動かす。

「————セルゲイは本当に、心配性だ」

不意にはつきり聞こえた声は、アレクセイのものだった。

視線を動かすと、操舵室からアレクセイとセルゲイが出てくるころだった。二人はまだキーラに気づいていない。起き上がって声をかけたほうがいいだろうか。咎められたりはしないだろうか。迷っているうちに、セルゲイが口を開く。

「おまえが楽観的すぎるんだ。状況が状況なのに、なぜそこまで呑気に構えられる？」

（ふうん）

キーラは驚いた。たしかに、アレクセイと二人きりだとセルゲイの態度は砕けるようだ。今までに見た『忠義の護衛』から、ずいぶん遠い姿である。このまま二人の会話を聞いてみたい気分になったが、このまま盗み聞きしているのはまずいだろう。手を支えに起きあがろうとしたとき、アレクセイの楽しげな声が響いた。

「状況が状況だからね。なすべき目的は明確で、そのための力もそろえた。ただ、やるべきことをしたらいい。おまえのように深刻にならなければならぬ理由がどこにある？」

（え？）

耳を疑った。驚きは先ほどよりも大きいかもしれない。

アレクセイが丁寧な口調を崩している。云ってみれば、ただそれだけだ。

だが、それだけなのに、アレクセイの印象がずいぶん変わっている。優美で腹黒な印象が強かったのに、いまはまるで違う。手を支えに起き上がろうとして、そのまま動きを止めてしまったのは、やばいという感覚がよぎったからだ。いま、アレクセイは王子としての仮面を脱いでいる。そんな気がした。

「……もし、失敗したら？」

「死ぬだけさ」

セルゲイの慎重な問いかけに、あつさり端的に答え、アレクセイは足を止めた。こちらに気づいたのかと思えば、そのままセルゲイを振り返った。

「わかりきっていることだろ。それともおれに否定してほしかったのかな？　だがあいにくと、そういう甘えは許容できない性質たちなん
でね」

「おまえだけの問題じゃない。コーリヤやアーヴィングたち、あの娘も巻き込むんだぞ」

今度こそ、完全にキーラは固まる。ついに自分の名前が出てきた。いよいよ気まずい。いまからでも声をあげようかとも思ったが、自己主張するにはかなり出遅れた感がある。

それにしても、失敗したら死ぬとは物騒だ。なにより自分も巻き込む前提で話さないでほしい。キーラは依頼を終わらせた後は、高額依頼料をぶんどって、さくさくマーネに戻るのだ。猛烈に異議を申し上げたい気持ちでいっぱいになっていると、

「だから、考え続ける」

きっぱりとした響きで、アレクセイが云い放った。

どこまでも力強く、芯の通った声音だった。

「あらゆる危機を考え、回避するための手段を講じておく。……最初から、悲壮な気持ちで巻き込むとは思っていない。コーリヤも

アーヴィングもキーラも、おれはそもそもだれも死なせるつもりはない。すべてが終わったら、あるべきところにちゃんと帰してやる。当たり前のことだろう」

いっそ、清々しいといってもいい、決意表明だった。

キーラは、なにも云えない。アレクセイの声にはどこにも気負いもなく、思っていることをそのまま口に出しているのだと伝わってくる。

かすかな笑い声が響いた。セルゲイが笑ったのだろうか。

「そうしておまえは、王になっていくんだな」

「そうさ」

応えるアレクセイの声は、なぜか、かすれるような声だった。

二人は船室に降りていく。最後まで寝転がっているキーラに気づかないままだ。

完全に二人の気配が消えたころ、むくりと起き上がって呟いた。

「信じられない」

かすかに眉をしかめて、唇をへの字にゆがめる。

「あの二人、戦士のくせに、あたしに最後まで気づかないままだったわ！」

一人でツツコミを入れて、ついに衝動に負けた。息を吐き出す。ほどけるように微笑みを浮かべながら、満天の星を見あげる。声には出さず、ゆっくり唇だけを動かした。

（莫迦なんだから）

キーラは空を見上げたまま、大きく呼吸した。胸に満ちる大気が心地よかった。

認められる条件として資格は有効でした。(5)

「てええええいっ」

気合を入れて、キーラは甲板をこする。手に持っている実の下で、じよりじよりと砂が音を立てる。木材の甲板が削れていくのだ。まだ朝も早い時間だから、空気はまだひんやりしている。甲板磨きでほてってきた頬に、冷たい空気は気持ちいい。ちよつと風を感じてぼーっとしていると、まわりで真面目にこすっている団員たちが目に入る。軽く反省。再び気合を入れて、半分に割られている木の実で、甲板をみがき始めた。

甲板をみがくのは、これで三回目である。魔道士として雇われたが、ただ、お客さま立場で乗船している状態は、性に合わない。邪魔をしてしまう可能性も一応、考えた。それでもキーラは、アレクセイとアーヴィングに手伝いを申し出ていたのだ。

最初は二人とも、手伝いは不要だと告げた。それでも食い下がる、苦笑混じりに差し出してくれたのが、甲板のみがき仕事だ。以来、キーラは早くに起きて甲板磨きに参加している。まだ三日目。でもだいぶ、慣れてきた。それはおそらく、傍にいるもう一人、

「どいてくださあい、邪魔ですよー」

いつも通りに涼しげな表情で、軽々と甲板をみがくキリルのおかげだろう。

ずいぶん慣れた手つきで甲板をみがく。それも道理で、甲板のみがき掃除は、新人団員にまかされる仕事なのだという。キリルは一

か月前に入団したというから、キーラのように気合を入れなくても、さっさと甲板を磨けるコツをとくにつかんでいるのだ。いまでも、自分にまかされた範囲をみがき終え、キーラを振り返って、ふっと笑う。

「よたよたですねえ。つらいなら休んでもいいんですよ？」

明らかに勝ち誇った表情に、キーラはむっと唇を結んだ。

「だれが休むもんですか！ 見てなさいよっ」

「おやおや。僕は親切で云っているんですけどねえ」

（くわあああ。腹が立つ！）

最初の印象はどこへやら、だ。傭兵団に似合わぬ繊細な美少年と
思ってしまった自分が腹立たしい。さすがとか、キリルとて立
派に鍛えた少年だったのだ（甲板磨きをうまくこなせる程度で鍛え
たと云われたくないだろうが）。キーラが腕の届く範囲をみがいて
いる間に、キリルはその倍をみがいている。慣れていないから仕方
ないのだが、自分より弱いかも、と侮っていた相手だけに妙にくや
しい。キリルは二人のみがいた領域を見比べて、いつもうれしそう
だ。おかげで朝の甲板磨きは、そろそろ競争の様相を帯びてきた。
みがき終え、他の団員たちがいなくなった甲板で、今日も二人の声
がにぎやかに響く。

「はい。今朝も僕の勝ちですね」
「くっ」

改めて敗北を思い知らされ、キーラはがくりと肩を落とした。
かがんでいた腰が痛い。これだけ痛む想いをして甲板磨きにいま
しんだというのに、今日も今日とて、繊細な美少年に負けてしまう

事実。ああ、切ない。

「キーラさんはマジメなんですねぇ」

ふてくされたように両足裏を合わせて座っているキーラの頭を、隣に腰かけたキリルがポンポンと叩いた。女性にあるまじき態勢にはもはや追求しない。乗船してもはや四日目、いろいろなところを見せているからだろう。きらきらしい尊敬の眼差しも消えている。ありがたいことだ。いつまでも『紫衣の魔道士』として見られたくない。

思いがけないキリルの言葉に、のっそり顔をあげてキーラは訊ねた。

「マジメって？」

「ほら、キーラさんは紫衣の魔道士じゃないですか。甲板掃除だって魔道で片付けようとは思わないんですか？」

キーラは少しばかり唇を尖らせた。

「出来ないことはないけど、」

「やっぱり疲れます？ 魔道を使ったら」

「そのくらいで疲れるなら、紫衣になれないわよ。……じゃなくて、まどろっこしいじゃない。手足は無事でちゃんと動くんだから」

と云いながらも、手足のように魔道を動かせるキーラは複雑な気持ちである。

他の魔道士ならキリルの云う通り、疲れるかもしれない。だがこれでも紫衣の魔道士だ。さらに加えて、呪文の詠唱すら必要としないキーラなのだ。魔道を使ってもおそらく掃除としての手間は変わ

らない。キリルの負担も減るだろうともわかっている。

ただ、使いたくないのだ。このあたり、微妙な屈折心理が働いているが、そこまで話す気分になれない。いまはまだ。

不思議そうに見つめてくるキリルに気づき、キーラは唸りながらも説明を試みた。

「なんて云えばわかってもらえるかな。たとえばね、人を攻撃したいと思うじゃない？」

「乱暴なたとえですねー。はい、そう考えました」

「あたしの場合、方法はふたつあるわけよ。こぶしで叩きのめす方法と、魔道でぶちのめす方法ね。で、あたしはこぶしで叩きのめすほうが好きだ、ってだけの話」

「意外に体育会系ですねー。とにかく、好みの問題で魔道は使わないというわけですか」

「そういうこと」

なるほどなるほどー、とキリルはぴかぴかになった甲板を眺めた。太陽の光で、濡れていた甲板はすっかり乾いている。端整な横顔が満足そうな笑みを浮かべた。同じものを見たキーラも、気分よく笑った。

「結局、今日も負けたけど。きれいになった甲板っていいものね」

「だから雨の日とかは悲鳴をあげたくなりますよ。あんなにきれいにしたのに、って」

「げ」

想像して、キーラは顔をしかめた。確かに一生懸命がいた甲板が、雨風に汚れるさまは見たくないかもしれない。あわてて空を見

あげてみた。うすい空に、ぽかりと浮かぶ白い雲。さんさんと輝く太陽、を認めてほっと息を吐いた。大丈夫、今日もよく晴れそうだ。

不意に隣で、「あれ」と不思議そうな声があがった。思わず視線を向けると、キリルが眉をしかめて遠くを眺めていた。視線をたどる。みえてきたのは、黒く、ぼつんとした、

（船……？）

だろうか。ただ、動きがおかしい。まるで風に流されているような、頼りない航行である。首をかしげていると、キリルが立ち上がった。靴に裸足を放り込みながら、キーラを見下ろす。いつになく緊迫した表情だ。

「様子がおかしい。団長に報告してきますっ」

云うなり、船長室の方角に走り出した。キーラはとっさに操舵室を見つめる。船を操っている人はもう気づいているだろうか。そちらにも報告したほうがよさそうだ。

認められる条件として資格は有効でした。(6)

ぴかぴかにみがいた甲板は、あっという間に人で埋まってしまった。

仕方ないことだとわかっているが、みがいたばかりなのだ。思わずキーラは皆の足元を見つめ、「きれいにしてから歩いてええつ」と叫びそうになった。理不尽な衝動だとわかっている。だが、人間としてこの衝動は仕方ないと云えるのではないだろうか。

「確かに、変だな」

遠眼鏡を掲げて、問題となる船を眺めたアーヴィングがつぶやいた。先ほどよりもぐっと近づいてきた船は古ぼけた帆船である。まだ帆を張っているから航行できるのだろうが、船上に動いている影はない。当直すら見当たらないのだ。明らかな異変と云える。遠眼鏡を渡されたアレクセイが、同じように覗き込んで眉をひそめた。

「難破船でしょうか。アーヴィング、嵐の情報は？」

「いや、ない。最近は何しろ、風のほうが怖いくらいだ。しかし難破船にしたら様子が変だぞ。そもそもなんで航行してられる？」

「まさか、幽霊船とか」

ぼそっと団員の一人がつぶやくと、「ないない」と皆から総ツツコミが入った。

まあ、確かに「幽霊」船が、朝から出沒するようでは常識もこれまでである。とはいえ、そのくらい、おかしい船だった。さいわい、こちらの航路にぶつかる動きではない。

だがこのまま放置するわけにはいかない。難破船を発見した者に

は、この海域を治める領主に報告する義務があるからだ。一応、調査する必要がある。

だれが調査に行くか。話し合いを始めた団員たちをよそに、キーラは目を細めて帆船を眺めていた。魔力による探りは入れていない、まだ。ただ、なにやら感覚に訴えるものがある。ありていに云えば、いやな予感がするのだ。魔道士として、自分も行ったほうがいい。そう感じたキーラは、アレクセイを呼んだ。振り返った彼に、名乗りをあげる。

「あたしも調査に行くわ。足手まといかもしれないけど」

するとその場の雰囲気、直ちに引き締まった。一気に注目され、ひそかにたじろぐ。

「それは魔道士としての申し出か」

黙り込んだアレクセイの代わりに、アーヴィングが訊ねる。キーラはためらったが、迷いながらうなずいた。団員たちがどよめく。それぞれに顔を見合わせ、口々にささやく。

「おい、魔道士の勘だぜ」

「それも、紫衣の魔道士だぞ」

「うわー、やばめやばめ」

（え、……）

耳に届く言葉に、むしろキーラのほうが戸惑った。自分の申し出がここまで注目を浴びると思わなかった。軽い後悔が、胸をかすめる。だが撤回しようとは思わなかった。思えない。自分は絶対に帆船に乗り込んだほうがいい。そう感じるからだ。

「では、わたしも行きましょう」

だがアレクセイがそう云い出したとき、キーラはぎょつと驚いた。

（ちょっと、なにを考えてんの！）

魔道士である自分が、行かなければならないと感じる場所なのだ。穏やかならざる場所だと云っていいだろう。そういうところにむざむざと、目的を持つアレクセイが行っていいとは思えない。慌てふためいてまわりを見渡し、ますます驚いた。だれも止めようとしないうのだ。ただひとり、セルゲイが顔をしかめていたが、なにも云おうとしない。

「おまえさんに行ってもらおうと安心だが、いいのか？」

さすがに団長であるアーヴィングは問いかけてきたが、アレクセイは笑顔で応えた。

「かまいません。というより、わたしが行かなければならない場所かもしれないから」

（え……）

何のことだろう。まつ毛を上下させていると、アレクセイがこちらを見て、笑った。

「魔道士であるあなたが反応する状況です。わたしは、マーネを思い出しますね」

はっと息を呑んだ。そうだった。直接襲い掛かってきた魔道士は

死亡したが、仲間は逃亡しているのだ。アレクセイを狙った輩が、帆船に潜んで近づいてきている可能性もある。そうだとしたら、彼がここに残ると問題である。アレクセイが敵の目的なのだ。敵がこちらに攻撃して、この船が破損でもしたら大事である。

「いままで、航海中に攻撃されたことはあるの？」

「ありません。でもこれまでと状況が変わらないとは限りませんから」

その通りだ。警戒するに越したことはない。でもアレクセイが行っても本当にいいのだろうか。

戸惑って視線を巡らせる。本当に誰も反対しない。するとくすりとアレクセイが笑った。

「そんなにわたしは頼りないですか？　それでも『灰虎』の一員として認められた身なんですが」

王子にして、傭兵集団『灰虎』の一員。確かにマーネでの戦闘を思い出せば無駄な不安だと感じる。そもそも戦いのプロである傭兵たちが異議を申し立てないのだ。いわゆる適材適所というものなのだろう。

それにしてもなんという兼業、と思いながら、キーラは正直に思ったことを告げる。

「あなたの強みって、やけに調子よく回るその口なんだと思っているからよ」

すると傭兵たちが吹き出した。豪快な笑い声が響く中で、アレクセイが苦笑する。セルゲイが睨んでくるかと思えば、奇妙に顔をゆがめている。彼であってもいまの言葉は否定しきれないのか。

かくして和やかな空気の中で、謎の帆船に向かうメンバーが次々と決まった。

キーラにアレクセイ、キリルにセルゲイ、この四名に、調査を得意とするカジミール、セレスタンという二人の団員が加わって小舟が降ろされた。小舟に移る前にキーラは魔力の探査を行った。帆船から伝わる情報を読み取り、思いがけない内容に眉を寄せる。

「ひとりだけ、甲板の上の操舵室に、ひとがいる」

他に乗船しているひとはいない。そう伝えると、皆の顔が緊張に引き締まった。

認められる条件として資格は有効でした。(7)

すぐそばで見上げると、帆船の迫力はなかなかのものだ。

マーネの港からコーリヤの船に乗り込むときにも同じ感想を抱いたが、今はそれ以上の圧迫感を覚える。たぶん、緊張しているからだろう。ゆらゆら揺れる小舟で、キーラは深く呼吸を繰り返していた。気を静めようとしていると、先に乗り込んだキリルがひょいっと見下ろしてきた。縄梯子をなかなか上がらないから心配になったのか。

「大丈夫ですかー？」

うん、とうなずいて、キーラは覚悟を決めた。縄梯子をつかんでのぼり始める。小舟にはセレストアンが残っている。途中で見下ろせば、氣遣わしげな眼差しを向けていたから、小さくうなずきを返した。船縁にたどり着けば、見守っていたキリルが手を差し出し、引き上げてくれる。たどり着いた甲板で、ふう、と、息を吐いた。

「本当にだれもないのね」

目の前に広がる甲板は、がらんとしていた。人の気配はなく、しんと静まり返っている。用具はちゃんとあるべき場所に備えられていたが、甲板が砂と埃で汚れている。何日、みがいてないんだろう、と、キーラは考えた。甲板磨きはほとんどの船が毎日行う習慣だ。すなわち、みがいていない期間だけ、この帆船から船員の姿が消えたということになる。キーラがそう云えば、つるりと頭をそっているカジミールがうなずいた。

「たぶんな。三日くらいは、海をさまよっていたんじゃないかと思

うぜ」

三日、という数値に、眉を寄せる。まさかマーネから追いかけてきたのだろうか。

思わず視線が、操舵室に向かう。あそこにいる人物はコーリヤの船にも、キーラたちがこの船に乗り移ってきたことにも気づいていないはずだ。にもかかわらず、沈黙している。

敵なのか、それとも、ただの漂流者なのか。そもそも他の乗船者の気配を感じ取れないのはどういう理由だ。さまざまに考えていると、「キーラ」とアレクセイが呼びかけてきた。

「探査をもう一度試みていただけますか」

考えたことは同じらしい。うなずいたキーラは力を集め、操舵室を探った。船全体ではなく、操舵室だけに集中したためだろう。先にわからなかったことが、今回はわかった。相手は船員ではない、魔道士だ。独特の波動が伝わってくる。しまった、と、気づいた瞬間に、力を集めた。相手の傾向が読める。ただちに甲板に立つ面々に力を張り巡らせた。

じゅうつ、と、操舵室の扉が消えた。セルゲイとキリルが剣を構え、それぞれ護衛対象の前に立つ。同時に、襲いかかってきた炎が、皆の上に降り注いだ。キーラは唇を結んで、張り巡らせた力を持ちこたえる。想像以上の威力に、眉をひそめた。この船の関係者じゃない。そう感じた。いまの攻撃は、船への愛着など感じさせない、容赦ない攻撃だった。

「おや、人違いだったか」

開け放たれた扉から、そんな声が聞こえる。ややかすれた、若い

男の声だ。

だが姿が見えない。攻撃してきた相手は現れない。キーラたちは互いに顔を見合わせ、うなずいた。セルゲイとキリルが身構えながら、操舵室に近づく。キーラは護りの力を維持したまま、歩き始めたアレクセイに並ぶ。カジミールが背後に立ち、後方を警戒する。

やがて操舵室の中が見えてきた。キーラは啞然と口を開く。

そこにいたのは、緋色の肩掛けをまとった男だ。ぼさぼさの髪に、伸び放題のひげ。奇妙なことに腕を後ろ手に縛られ、椅子にくくりつけられている。哀れで見苦しい姿だ。だが前髪の間からこちらを見据えてきた、群青色の瞳が、そんな侮りをはねのける。彼は誰よりも先にキーラを認め、目をみはる。キーラが身にまとっている、紫紺の肩掛けに気づいたのだろう。きゅっと口端を持ち上げた。

「これはこれは。まさかこんなところで紫衣の魔道士とお目にかかることになるとは」

楽しそうな口調で、魔道士は言葉をつむぐ。

「そうか、キーラ・エーリン。最年少の紫衣の魔道士が、そういう名前だったね」

「あたしごときの名前をご存じのようで、光栄だわ」

まだ他の面々を護ったまま、キーラはつつけんどんに応えた。

相手は縛られている人間である。おそらく数日は、そのままだったのだろう。だから優しく対応するべきなのだろうが、いきなり攻撃された事実が響いている。口を開いて問い詰めようとした時、肩に大きな手のひらがかかった。キーラは隣を見上げる。アレクセイが微笑んでいた。優美な美貌を見上げて、しぶしぶ口を閉じる。ひ

とつうなずいて、アレクセイが前に進み出た。セルゲイとキリルが静かに場所を譲る。

「どうして縛られているのですか？」

二人のやり取りを見つめていた魔道士は、まじまじとアレクセイを眺める。やがてふっと唇をゆるめて笑った。意外なことだが、子供のような笑顔である。

「厄介な女に捕まってね」

魔道士は陽気な口調で応える。厄介な女？　だがおとなしく捕えられたままでいる事実が解せない。魔道士なのだ。それも赤衣の魔道士なら、縛られていても逃れる方法はある。やけどを覚悟して縄を焼き切れればいいのに、と、キーラは不思議に思った。

「奇妙な依頼に断りを入れたら、この始末だ。気の毒だと思ったら、ほどいてくれないか」

「いきなり攻撃された身としては難しいですね。あなたが本当に、わたしたちに害意を向けない人物か否かを見極めなければ、助けることはできません」

「おやおや、それが赤衣の魔道士を従えて云う言葉かな？　おれは赤衣だよ。万が一、暴れ出したとしても、赤衣の魔道士なら簡単に抑えられるだろう」

「世の中には絶対の安心というものはないのよ」

キーラは、つい、言葉をはさんでいた。魔道士が眉をはね上げる。口を開いて何か云い出そうとする前に、さらに言葉をつづけた。

「あたしは確かに紫衣の魔道士だけど、地位に甘んじて、油断した

くない。雇われている人間として、自分がいれば万事大丈夫です、なんて、間違っても云わないわ。雇用者を危険にさらしたくないの。だからあたしの存在をあなたの安全証明に使わないでちょうだい」

アレクセイが、ちらりと笑った。キーラに視線を流した後、魔道士を見つめる。

「というわけですよ。実際、弱ったふりをして敵地に潜入する、というやり口がありますからね。自然、あなたには警戒せざるを得ないわけです」

魔道士はがくんとうなだれた。落胆したのか、と思ったが、ちがった。気配が変わる。

認められる条件として資格は有効でした。(8)

『やれやれ。警戒心の強いこと』

甘やかに響く声は、それまでの声とまるで違う。これは女の声だ。キリルが顔をしかめ、背後でカジミールが「きもっ」と叫んだ。まあ、ひげもじゃ男の口から、甘やかな女性の声は聞きたくなかったかもしれない。キーラは混乱したが、すぐに状況を理解した。

魔道士に重なって女の姿が見える。憑依だ。別の場所にいる声の主、――まちがいはなく魔道士だろう――が、縛られた男を道具とみなして、通常、無生物にしか通用しない憑依の術をかけたのだ。相手が生物だからこそ、完全に支配しきれない。その不完全さを、声の主は利用しようとしたのだろう。すなわち、こちらの警戒を解く材料として。

『これほど弱った男ならば、懐に入れてくれるかと期待したのに。つれないにもほどがあつてよ？ ルークスの王子さま』

「ご期待に添えず、申し訳ありません」

にこやかな笑みをたたえたまま、アレクセイはまったく動じていない。セルゲイもだ。二人の反応に安心して、キーラは向かいの魔道士を見つめる。油断しないでおこう。相手はいま、会选择んでいるようだけど、いつ、攻撃してくるか、わからないのだから。

「ですが、つれないのはあなたのほうでは？ これほどまわりくどいアプローチをしていただくよりも、直接、お目にかかるほうが、わたしは嬉しいですね」

『あら。お世辞でもそう云われると嬉しいものね』

「本心ですから」

(……。……。ええと)

だが身構えたキーラは、続く二人の会話にまぶたを瞬かせた。
なぜだろう、微妙に力が抜ける。それだけではない、心の隅っこが、微妙な感覚でさざめいた。ぞわぞわする。背後のカジミールがキリルに近づいて、こそこそ話しかけた。じろりとセルゲイが睨んでいるのだが、まったく気づいた様子は無い。というか、無視しているのか。男たちの会話が聞こえる。

「偉大だよなあ、あいつ」

「ですよねー。なんで外見アレな男に、そういう愛想を云えるんだろう」

「声は確かに美女っぽいけどさ、外見アレだぜ、アレ。一気に萎えねえ？」

「そもそも機能するんですか、アレに？」

「……。声はいいんだけどなあ」

「……。ええ、声はいいんですけどねー」

緊張感のかけらもない。睨み続けているセルゲイが何となく気の毒に思えてきた。マジメな性格ってこういう時に気苦労するよね、と、あまり他人ごとではない感覚でキーラは心の中でつぶやいた。緊張感がないのは自分も同じだ、と数泊遅れて気づいて、慌てて意識をアレクセイに向けた。ちなみにこの間も、アレクセイと女の会話は続いている。

「……ですがそろそろあなたがたの目的を知りたいところです。あなた方の望みは？」

『うふふ、叶えてくださるかしら。わたくしたちは、あなたが持っている紋章が欲しいの』

（紋章？）

キーラはしっかり相手の言葉を聞きとがめた。

それはアレクセイと会った日に見せられた、身分証ともなった紋章だろうか。ルークス産の琥珀を細工した、精緻な紋章だ。芸術品としての価値はあるかもしれないが、わざわざこのような手段で欲しがるものとは思えない。アレクセイをうかがう。すると彼は笑みを消して、厳しく引き締まった表情を浮かべていたから驚いた。

「あなたの仲間に、青衣の魔道士はいますか」

唐突な質問だ。だがそう感じたのはキーラだけのものである。軽口をたたいていたカジミールもキリルも、もちろんセルゲイまでが魔道士に注目している。キーラは戸惑ったが、口をはさめる雰囲気ではない。もちろん、だれもキーラに解説などしない。だが、相手はアレクセイの質問の意味を理解したらしく、うふふ、ともったいぶるように笑った。

『彼に会わせてあげると云ったら、紋章を譲ってくださいるかしら？』
「残念ですが、確約はできません。ただ、魅力的な提案ではありませんね」

あら、そお。相手はそう云って、探るように目を細めた。アレクセイは揺らぎのない態度でその視線を受けて立つ。生まれた沈黙は短くはなかった。やがて魔道士は告げる。

『では、次の満月の夜に、ここから西南に進んだ場所にある島に来てちょうだい。とても小さな島だけど、そこの紫衣のお嬢ちゃんならご存知よ』

（お嬢ちゃん？）

ぴくりとキーラは反応した。女の呼びかけに、驚くほど苛立ちを覚えた。

だが苛立ちを示すより先に、操舵室に飾られている海図に視線を向けた。現在地を見つけて、西南に視線を移す。島はいくつか見つかった。どの島だろうと考えて、相手がわざわざ自分を指名した意味に気づいた。もう一度、海図を見直す。あった。魔道士を見直すと、挑発的な笑みでキーラを見守っていた。苛立ちが増し、剣呑な眼差しでにらむ。

「フェツルムの島ね。素敵な招待場所だわ」

『わたくし、かよわい黄衣ですもの。紫衣のお嬢ちゃんとともにやりあえるはずがないわ。ああ、もちろん王子さまとお嬢ちゃんだけで来てちょうだいね。他の方までいらしたら、怖くて上陸できないから、お願い』

そう云うなり、女の気配が消える。がくんと魔道士はうなだれた。その様子から女がいなくなった事実に気づいたのだろう、皆の緊張がゆるむ。アレクセイが何事かを云おうとした、その前に、キーラは力を解散させた。まだ縛られたままの魔道士につかつかと歩み寄って、ぐい、とその襟元をつかむ。驚きの声が背後で上がったが、かまわず、ぱんと男の頬を張った。魔道士は低くうめいて、群青色の瞳が開く。キーラを認めて驚いたように目を見開くが、かまわずにキーラは口を開いた。

「その厄介な女とやらとはどうやって知り合ったの！　どんな間抜け行為をしてこういう状況になったの。きりきり吐きなさいっ、きりきり！」

こえええ、というつぶやきが聞こえたが、いまのキーラには大し

た問題ではなかった。

認められる条件として資格は有効でした。(9)

しめあげた魔道士は、襟元をつかまれたまま気絶してしまった。

軟弱な、と舌打ちしかけたが、そもそもこの魔道士は数日にわたって絶食を強いられていたのだ。ケロツと忘れていた自分に、さすがに羞恥を覚えながらアレクセイを振り返る。

微妙な表情を浮かべていた王子さまは、視線が合うと取りつくろうように微笑んだ。

「この男の縄、ほどこいてもいい？」

ちらりと魔道士に視線を向けたあと、アレクセイはうなずいた。

「かまいません。いろいろ話をうかがいたいところですし、連れ帰りましょう」

すると肩をすくめたカジミールとキリルが動いた。キーラの肩を押してアレクセイの近くに導き、縄をほどこいてぐったり気を失っている魔道士を担ぎ上げる。操舵室を出ていく二人を見送って、キーラはアレクセイを見上げた。視線に気づいて、「なにか」と問いかけてくるものだから、率直に疑問をぶつけることにした。

「青衣の魔道士、ってなに？」

そう問われることを予測していたのか、アレクセイの眼差しは静かだった。

「以前、わたしたちを襲ってきた魔道士のことですよ」

ふうん、と相槌をはさんで、当然、さらに追及した。

「でもわざわざ消息を訊いたということは、それだけの関係じゃないわよね。青衣の魔道士は、あなたから特別なものを取りあげたひとなの？」

そう続けると、アレクセイではなくセルゲイの顔色が変わった。ハツタリなのだ。直感が導くまま、浮かんできた疑問をぶつけたに過ぎない。

だが、セルゲイのわかりやすい動揺に視線を向けて、しっかり見届けた。再びアレクセイを見つめれば、しかたなさそうな苦笑を浮かべていた。キーラがなにを見て、なにを確信したのか、理解したのだろう。ええ、と浮かべていた微笑みに、わずかな苦みを増やした。

（それは、なに）

アレクセイとセルゲイの反応を見て、キーラは確認しようとした。けれど奇妙なためらいが、ふっと胸に通り過ぎる。そこまで立ち入って大丈夫なのか。思考がつぶやいた言葉は、キーラを我に返らせる。あたしは、なにをしようとしているのか。

（あたしは、さっさと依頼を遂行して、マーネに帰るのよ）

——でもアレクセイがとりあげられたものを聞いてしまえば、たぶん、後戻りできなくなる。

根拠もなにもないのに、なぜだか、強くそう感じた。開きかけた

口を閉じて、うつむいた。沈黙が留まる。アレクセイもセルゲイも、なぜだか、なにも云わない。緊張に彩られた、気まずい雰囲気にしたたまれない。ふっと息を吐いた。しいて口端をもちあげて、えいやつとアレクセイを見上げる。静かな眼差しだ。似た眼差しを以前にも見た。

キーラを見定めようとする眼差しだ。以前はひやりとした感覚を覚えたが、いまは苦笑にも似た想いが湧き上がってくる。腰に両手をあて、首をかしげて訊ねる。

「それで王子さま？ あたしはあなたと共に、フェツルムの島に向かえばよろしいのでしょうか？」

アレクセイの緊張が、たちまち軽やかにほどける。唇の端が持ち上がり、いつもの微笑を浮かべた。優美な美貌が引き立つ、王子さま「らしい」微笑みだ。

これがアレクセイの笑顔だと思っていたけれど、あの夜から、彼は違う微笑みを持っているのではないか、と思うようになっていた。だからちよつと失望する。

でも。

（あたしは、これでいい）

アレクセイが、王子さまとしての仮面を取り去るところなど見たくない。見てしまえば、依頼主ではなくて、友人になってしまう。重いものを担う王族と、友人関係を結ぶなどごめんだ。そんなことをしたら、キーラはマーネに戻れなくなる。

夢が、叶わなくなる。

「そうですね。頼りないわたしとの同行を、了承していただけますか」

ちくりと皮肉が混じった言葉に、キーラは顔全体をつかった笑顔を返した。

「了解です、王子さま。ただし、フェッルムの島に行けば、あたしはまったく使い物にならなくなります。フェッルムの島とは、そういう場所ですから」

「かまいません」

フェッルムの島に関する、知識があるのかないのか。さっぱりわからないが、アレクセイの返事には迷いというものがなかった。あのときに聞いてしまった清々しい決意表明を思い出す。いまの返事と、よく似た響きの言葉だ。あの夜、が、あったから、気づいた。

「では帰りましょう。コーリヤ爺とアーヴィングにいまのこと、報告しなくちゃ」

浮かべていた笑顔にほんの少しだけ苦味が混じる。だからそれは、仕方ないことなのだ。

認められる条件として資格は有効でした。 (10)

「はい、あーん」

麦粥をふうふう冷まして、魔道士の口元に運んだ。群青色の瞳が、面白がるように笑んだ。何か云うかと思えば、おとなしく口を開く。もぐもぐと頬が動き、喉仏が上下する。麦粥を呑みこんだ魔道士は、キーラをからかうように見つめた。

「光荣だな。まさか紫衣の魔道士どのから手厚い介護を受けるとはね」

「紫衣の魔道士、関係ないから」

すぱっと端的に応えて、再びさじで麦粥をすくう。ふうふうと冷まして、また魔道士の口元に運んだ。れっきとした成人男性に、物を食べさせるなど少々気恥ずかしい。キーラは意識しないように努めながら、魔道士の介護を続けた。

ちなみに部屋の扉付近には、護衛役のキリルが立っていた。こちらを見守っているが、なにも云わない彼の視線が、妙に気になる。好きでやっているわけではないのだ、好きでやっているわけでは誤解しないでほしい。

声高に主張したい気持ちをこらえて、丸窓を見つめた。船はゆっくり進んでいる。

「溜息」

はっと視線を向ければ、魔道士は枕に寄りかかったまま、キーラを眺めている。次の一口を食べさせなくちゃ、と思ったところで、

器が空になっていることに気づいた。ああ、そういえば先ほど最後のひと口を食べさせたばかりだった、と思い出して、眉を寄せる。

「なに？」

「自覚はないのかな。きみ、この部屋に入ってから何度も溜息をついているよ」

「えっ、ほんと？」

思わず片手で口を押さえた。かつかつ、とキリルが歩み寄る。キーラから空になった器を取り上げて、ぽん、とキーラの頭に手を乗せた。くしゃくしゃと髪をかき回され、思わず見上げる。キリルは困ったような表情を浮かべ、魔道士に視線を向けた。

「どうやらここは、年の功の出番のようです。キーラさんの話を聞いてあげてください」

「おいおい。きみは彼女の護衛だろう？ 不審者であるおれと彼女を、二人きりにしてもいいのかな」

「『灰虎』の皆に、海の藻屑になる覚悟を決めた、と、そう判断されたければ、どうぞ」

キリルが珍しくきつい眼差しで魔道士をねめつけ、さっさと部屋を出ていく。魔道士は軽く肩を落とした。やれやれ、と小さくつぶやいて、キーラを温かく見つめる。

「じゃあ。ここんところ、受けた介護の礼だ。悩み相談、してあげよう」

「……。莫迦じゃないの」

何をどう云っていたのか、わからないまま、キーラはそんな言葉をひねり出していた。

云ってしまつて、すぐに後悔した。これじゃ、やつあたりだ。それも関係ない人に対してやつあたりしている。ごめんなさい、とかすれた声でつぶやいて、キーラはうつむいた。今度は魔道士が、ぽんぽんと頭を叩いてくる。温かな感触に、ふっと力が抜けた。

「悩みがあるわけじゃないわ。ただ、現状が気持ち悪いだけよ」

「現状、ねえ。フェツルムの島に向かっていることかい？　まあ、確かに魔道士は行きたくない場所ではあるかな」

フェツルムの島、とは、その名の通り、フェツルムという特殊な金属を生産する島である。扱いが厄介な金属だが、酸化しにくい特性のため、貴金属として重宝されている。

ただ、この金属、精製する前の状態に限り、魔道士には特筆すべき特徴がある。

大気中の魔力を吸収するのだ。

魔道士は大気に満ちる力を用いて、魔道を行使する。つまり、力を吸収するフェツルムの近くでは、魔道を発動させにくくなるということだ。だからこそギルドではフェツルムが産出される場所を、魔道士たちに知らせて注意を促している。当然、キーラも世界に点在している場所を覚えていた。だから女が示す場所が分かったのだ。

「ちがうわ」

だが、キーラが抱えているもどかしさは、そんなことではなかった。魔道士は不思議そうに見つめてくる。抱えている感情を、素直に吐き出さなければならぬ義理はない。

「……ちがうの」

けれどキーラは何もかも吐き出したい衝動に駆られた。相手がフェッルムの島に立ち寄る前に、船を降りるからだろうか。通りすがりの人間だから、甘えてもいいと考えたのかもしれない。自分を計算高いと感じるが、キーラはあきらめたように口を開いた。

「すねている自分が、気持ち悪いの」

その言葉を皮切りにして、キーラはすべてを話した。

将来はマーネでカフェを開きたいと思っていること。だから飲食店で働いていたのに、アレクセイの行動でクビになってしまったこと。ギルドの長の要請で、アレクセイの依頼を受けたこと。アレクセイたちに親しみを覚え始めていたが、慌てて距離を置いたこと。

魔道士は穏やかな表情でキーラの話聞いていた。時折うなずいて、キーラの言葉を引き出す。最後まで聞き終えて、ずばりと云ってのける。

「うん。きみは少々、回り道をしているようだね」

しばらくの沈黙をおいて、キーラは問いかけた。

「間違えた、とは云わないの？」

「間違いを認識している人間に、そう云う必要はないだろう。人間、心の赴くままに行動するものだよ。だからきみは回り道をしている、と云ったのさ」

水が欲しいな、とつぶやいて、水差しの水を要求したうえに、さらに言葉を続ける。

「いやいやであっても、依頼を引き受けた以上、きみはまわりの人

間と親しくならなければならない。なぜなら戦いにおける連携とは、口先だけの関係で可能になるわけではないからね。依頼主とは、命を預ける仲間とならなければならない。だからきみも、距離を置いたことを間違いだと認識し、いま、自分を気持ち悪く感じているのだろ？」

あいまいな表情で、唇を結んだ。

「ただ、同時に、夢が叶わなくなる、と怯える気持ちもわかる。だがそれは、きっぱり杞憂だと云っておこう」

「杞憂？」

「きみが本当に望むのなら、叶わない夢はない。そう思えないのかい」

魔道士の群青色の瞳が、まっすぐにキーラを射抜いた。

（キミガホントウニノゾムノナラ）

「思いたいわ」

応えながら、少し、うそを混ぜている気持になった。だから慌てて、うそではない、とキーラは心の中でつぶやく。自分の望みは、お茶とお菓子のおいしい店を開くこと。いろいろな国の人々が訪れる店を開くこと。紫衣の魔道士として生きることではない。

「夢はいつまで経っても夢なのだよ。輝きは衰えることはない。すべてが終わってから目指しても間に合う。少々、魔道士として生きたところで、決して消えることはない、と、おれは思うね」

——すべてが終わったら、あるべきところにちゃんと帰して

やる。

唐突に、あの夜に聞いた言葉が、脳裏によみがえる。アレクセイの言葉だ。こっそり聞いてしまった、だからこそ、アレクセイの真実が現れている言葉でもある。

彼はちゃんと、そのつもりでいたのに。

ゆるゆると肩から力が抜けていった。ようやく唇の端に笑みを浮かべた。

「どうせ開くなら、敷居の低いカフェを開きたいわ。どんな人も気軽に立ち寄れるような」

そう、たとえば一国の王族であろうとも。

「開店したらぜひとも知らせてくれ。紫衣の魔道士が開くカフェに興味があるのでね」

「だから紫衣の魔道士、関係ないから」

きばっと云い捨てて、キーラは立ち上がった。ちらりと扉に視線を向ける。魔道士がにやりと笑って、うなずいた。素早く歩み寄って扉を開いた。立ち尽くしていたキリルに、にっこりと笑いかける。まずは、心配をかけてしまった彼を、将来のお客さまにするのだ。

認められる条件として資格は有効でした。(11)

次の満月の夜に、と、女は告げた。承諾を与える間もなく女は消えたが、こちらとしても異論はない。

だが、律儀に従うのは問題である。相手は敵なのだ。それも手段を選ぶことなく襲撃を繰り返してきた敵である。指定された場所に罠を仕掛けている可能性は高い。

だからこそ『灰虎』の傭兵たちは、指定された日付の二日前には、フェッルムの島に到着していた。ほぼ半日をかけて、ちいさな島を探索し、不審物の有無を確認する。次に島に近づく船影を見張った。島ではなく船を拠点にして、『灰虎』の皆は動いた。

ちなみに、この海域の領主には承諾を得ている。海の上をさまよっていた帆船は盗品だったため、犯人を追跡する、という理由で許可を得た。途中で船を降りた魔道士が言葉を添えてくれたことも大きかっただろう。条件として経緯を報告しなければならないが、領主に知らせた以上、仕方のないことである。そうして、約束の日時となった。

「でも、わたしたちの行為を、向こうがお見通しだったらどうするの？」

ちやぷちやぷと水が跳ねた。小舟から手を差し出して、水をすくいながらキーラは訊ねた。太陽が沈み、水は冷たさを取り戻している。

いまは小舟で島に向かっていているところだ。小舟に乗っているのは、アレクセイとキーラだけではない。櫂を動かしているセルゲイも乗

っている。ルール違反だが、「要は上陸しなければいいのだろう」という論理である。どうやら小舟の中で待機するつもりらしい。ほとんど屁理屈の世界である。

「たいした問題ではありませんよ、キーラ。わたしたちも見通されることを前提に、準備を進めましたから」

島を見つめていたアレクセイが、キーラを振り返って告げた。どういうこと、と問いかけるより先に、まずキーラは自分の頭で考えてみた。手伝いをしたから、『灰虎』の皆が何をしたのか、よく覚えていいる。やがて意味がわかった。

「見通されたくらいでは、揺るがない準備を進めたということね」

よく出来ました、と、微笑んで、アレクセイは言葉を続けた。

「わたしたちの目的は、敵魔道士の捕縛、もしくは情報取得です。あの女はわたしの持つ紋章が目的だと云っていましたが、それはおそらく、第一段階の目的でしょう」

「問題は、紋章を得てなにをするつもりか、ね。……ねえ、考えたことはある？」

水面から手を放し、アレクセイと正面から向き直る。少し、アレクセイは驚いたようだった。それはそうかもしれない。なにせあの日から、アレクセイとまっすぐ向き合って会話していなかったのだから。權をこぎながら、セルゲイがちらりと視線を飛ばしてくる。

「あの魔道士は、ルークス王国の鎖国に絡んでいるかもしれないわ」「考えました。可能性は高いと思います。ただ、紋章にたどり着くまで、なぜ十年もかかったのか、という疑問が残ります」

そうね、と、応えながら、キーラはさらに考え込む。仮に、魔道士たちがルークス王国の鎖国に絡んでいたとする。十年と云う歳月は短くはない。魔道士たちの目的が何であれ、たいていの目的が達成できてもおかしくない歳月だ。それなのに、いまになって紋章を求める理由はなんだというのか。紋章自体に、なにか秘密でもあるのか。

ちやりと、鎖の音が聞こえた。アレクセイが首から紋章を外し、キーラに渡してきた。とすと両手のひらに乗った紋章を眺め、はっと我に返って、アレクセイを見返した。

「調べたいと思ったものではありませんか」

「……ありがとう」

アレクセイの態度に戸惑いながら、キーラは思考を切り替えた。鎖を持ち上げ、月の光に掲げてみる。つるりと艶めいた黄金にきらめいた。なんの変哲もない、琥珀で作られた紋章だ。ルークスの国鳥でもある、最高神の使者アクィラを模している。初めて見たときにも思ったが、本当にたいした芸術品だ。だが、それだけだ。特殊な彫りは見当たらないし、魔力の探査を試みても特性はない。少なくとも「魔道士」が特別に求める品ではないと思うのだが。

（琥珀は確かに貴重だけど）

大地の力を結集した宝石、それが琥珀である。しばしば魔力の貯蔵庫ともなりうる。だがこのレベルの琥珀ならば、ギルド経由で入手は可能だ。あるいは魔道とは関わりのない観点から、この紋章は求められているのか。この紋章は正統な王位継承者に譲られる品である。つまり政治的な目的ではないかと考えかけて、まさか、と、

キーラは考え直した。鎖国と云う強硬政策に出た相手が、いまさらどんな理由で紋章を求めるというのか。

「なにか見つかりましたか」

「ぜんぜん。たいした芸術品ね、としか思えない」

片手でぼんと返して、はっと我に返った。ずいぶんぞんざいに扱ってしまった。

「ごめん。あなたにとっては大切なもののよね」

「いいんですよ。わたしもそう思いますから」

そう云いながらも、愛着のある眼差しで紋章を見つめる。じっと見つめていると、キーラの視線に気づいて、アレクセイは穏やかに微笑んだ。またたく。

（なんだかいつもと、）

ちがう、と感じた時に、その言葉は聞こえた。

「でも大切なものです。なにしろこれを奪おうとする青衣の魔道士から、……ミハイルが、命がけで守ってくれた紋章ですから。なにがあっても手放すまいと誓っているのですよ」

（———あ、）

目を丸くして、硬直した。青衣の魔道士。与えられた情報に、なぜだか胸がつまる。あまりのさりげなさに、ずるい、とののしってしまいそうな唇を押さえた。ありがとう、とも、ごめんなさい、とも云わせてくれない。

ずるい。

「……じゃ、あの女が現れたら、ぎったんぎったんにする方向でいいわね」

狼狽したまま適当に告げると、ほどほどにしてください、と苦笑交じりに云われた。

認められる条件として資格は有効でした。(12)

「あら。ずいぶん遅いご到着ね」

小舟を降りて、島の中央に向かう。すると女が一人、佇んでいた。月明かりでは色彩がよくわからないが、すらりとした肢体の持ち主である。キーラは沖を見た。留まっている船から、合図の知らせはない。つまり女は船ではなく別の方法でフェッルムの島を訪れたということだ。まさに、こつぜんと。

キーラはアレクセイと視線を交わす。マーネの件を思い出していた。

ここは魔道が発動しにくくなる場所だが、あらかじめ道具に術をかけているのなら話は別、ということだ。

あのととき黄衣の魔道士がペンダントに込めた転移の術で逃れたように、女もまた装身具に込められた転移の術でここに来たのだろう。女を観察する。二つの耳たぶに、首元、それから手首に、装身具をいくつもつけている。ただの装飾品ではないだろう。キーラが今、つけている腕輪が、ただの腕輪ではないように。

「お待たせして、申し訳ありません。ですが、おひとりでいらしたのですか？」

アレクセイがやわらかな口調で、話しかける。くす、と女は笑う。

「おっしゃりたいことはわかってるわ。話が違うとおっしゃりたいのでしょうか。でもね、ちゃんと彼も来ているのよ？　ただ、内気だからちよっとかくれんぼしているの」

「おやおや。初めてお会いするわけでもないのですが」

「そうなの。王子様たちはあなたに会いたがっているのよ、としつこく口説いたのだけど、どうしても会いたくないんですって」

（ふうん）

どこまで本当なのか、疑いながらキーラは辺りに気を配っていた。ぎったんぎったんにしてやるとうそぶいたものの、女の相手はアレクセイだとわかっている。キーラが気を配るべきは、それ以外の不確定要素だ。小さな島ではあるが、ささやかな緑はある。身を隠せそうな樹木もある。ハツタリと云う可能性が高いが、女の言葉も全否定できない。

「では、残念ですが交渉は決裂ですね。あの方にお会いできるからこそ、紋章を持ってきたというのに、会えないのなら意味がありません。帰らせていただきます」

「あん。やだ、待ってよ。本当に王子さまってつれないのね」

危なげのない足取りで、女は歩み寄ってくる。ようやく顔を確認できた。やや吊り上った目が印象的な、艶めいた美貌の持ち主だ。アレクセイに指を伸ばす。そのとき、きらりと耳元の装身具がきらめいた。とっさにアレクセイの腕をつかみ、引き寄せる。ち、と、舌打ちが響いた。じろりと女がキーラを睨む。

「そう云えばいたんだったわね。紫衣の魔道士さまが」

「あなたから許可をいただいたからね。云っておくけど、術を使わないと王子さまを口説き落とせないなんて、妙齡の女として失格なんじゃないの？」

わざと女の神経に触る言葉を選んでみた。先日、お嬢ちゃんと云われたことへの仕返しだが、もちろんそれだけが理由ではない。女

がこちらに接近してきたときから、奇妙な違和感を覚えていたのだ。動きが無防備すぎる。それはフォローに回る相手がいるからではないだろうか。キーラの推測を証明するように、女は交渉を請け負っている立場としては無防備に、むっとわかりやすく表情を変えた。他愛なさすぎる。

「キーラ。云い過ぎですよ」

同じことを思ったのか、アレクセイが視線で語りかけてきた。女の相手は任せろ、と云っている。しかし相手は黄衣の魔道士だ。人を操る技に長けている、と、反論したくなったが、アレクセイが気づかぬわけがない。考えがあるのだろう、と、しぶしぶ退いた。

「ありがとう、王子さま。やっぱりやさしいのね」

「最低限の礼儀としてね。ただ、術でわたしを操ろうとしても無駄ですよ。紫衣の魔道士が防いでくれますから」

「フェツルムの島に対する備えを怠らない魔道士さまね。いやみな存在だこと」

（お互いさまじゃないの）

初めて会った時からそうだったが、なぜだか妙に敵意を向けてくる。やはりこの女は好きになれない。改めて思いながら、もう一度、ぐるとまわりを見渡した。力の流れは、皆、足元の土に向かっていて。大気の力に、不自然な動きはなく、また、装身具による力の波動もない。どうやって男を探せばいいのか。

「それで、わたしを操ってなにをしようとしたのですか」

「確かめたいことがあったのよ。紫衣の魔道士さまに邪魔されてしまったけど」

「確かめたいこと?」

うふふ、と女は首をかしげて笑った。紋章にはね、ともったいぶるように告げる。

「ある精霊の意思が宿っているの。ルークス王家に連なる者を護ろうとする意志がね。その意思が本当に発動するか否か、確かめたかったのよ」

足元の力に向かう力の流れが急激に増えた。はっと男の居場所に気がついて、キーラは腕輪の力を解放した。地面から、水の竜が現れる。キーラの力がアレクセイをくるむと同時に、水の竜がアレクセイを飲み込んだ。

認められる条件として資格は有効でした。 (13)

息をつめる感覚でアレクセイを見つめる。とっさに護ったが、衝撃までは防げない。だから彼が持ちこたえられるか、と不安だったのだけど、アレクセイと目が合ったことにほっと息を吐き出した。彼は大丈夫だ。ゆっくりと青衣の魔道士に視線を移す。

(なんというか、執念よね)

現れた青衣の魔道士を眺めて、キーラは呆れてしまった。

どこに潜んでいるのかと思っていたら、なんと地面の下に隠れていたのだ。不審物は見つからなかったんじゃないっけー、と『灰虎』の面々に訴えたくなる。だがまあ、探索した時ではなく、そのあとに潜んだのだろう。お互いに間抜けに思えてくるのはいかなる理由か。そんなことを考えていたから、ちょっと気が抜けていたかもしれない。

「王子さまの護りを解いて」

ひやりと冷たい感触が、首元に押し付けられた。女の腕がまわり、キーラを抱え込む。そういえば女のほうが長身だったっけ。自らの失態に、ふ、と、息を吐き出して、静かな声音で告げる。

「あなた、馬鹿？ 襲撃者に少々脅されたくらいで、云うことをきくと思ってるの」

「きいてもらおうわ」

つい、と冷たい感触が食い込んで、温かな感触がてろっと流れた。痛みは神経を走るが、アレクセイの護りをほどくほどではない。そ

れにしても短気だなあ、と思いながら、青衣の魔道士を見た。涼やかな表情で水の竜を維持している。どこまで維持することができるか。水の竜から力は零れ落ちている。土の中のフェッルムが、魔力を吸収しているためだ。キーラと同じように、魔道士は装身具から力を得ているようだが、さていつまで持ちこたえられる？

「ちょっと、無視しているんじゃないわよ！」

ややヒステリックになった女の声が、耳朶を叩く。
うるさいなあ、とつぶやいて、キーラは挑発的に笑って見せた。

「脅しなんてかけずに、ざくつとやんなさいよ。護りを解いてほしいならね」

「なっ、」

「あたしのことが気に食わないんでしょう？　ならいい機会じゃない」

そう云うキーラはもちろん本気ではない。アレクセイの護りを維持しながら、頭の中では数を数えている。もう、五十は数えた。ならそろそろあの人が到着してもいい頃なんだけど。

「殿下！」

待ちかねていたあの人の声が響いた。キーラを抱えている女の身体がこわばる。「寄らな」、そこまで云って、女は慌ててキーラを突き飛ばす。このまま自分を人質にする方法もあったのにお馬鹿なことだ。冷静に考えながら、受け止めてくれたセルゲイを見上げ、女が慌てた理由が分かった。

なるほど、これは怖い。セルゲイは黒瞳を細めて、壮絶な殺意のこもった眼差しで睨んでいる。

「なぜ、殿下が水の竜に襲われているのだ？」

「青衣の魔道士さんがはりきっちゃって。護りは施しているってば」
「そのくらいはわかる。でなければ、おまえを剣の露にしていたところだ」

（あつぶねー）

そう思いながらセルゲイの腕の中で屈んで、靴に仕込んでおいたナイフを取り出した。護りの維持に必要なだから腕輪はもう使えない。魔道を使えないということだ。ならば直接行動するしかない。キールを解放したセルゲイはもう動いている。青衣の魔道士に向かって、剣を抜き払って走り出していた。

だからキールは、女に向かって走り出す。女は手首の装身具から力を集めて、そのまま何の特性も与えずに投げつけてきた。ナイフで受け止める。ぱきいいん、と、ナイフが砕けた。予測通り。使い物にならなくなったナイフを放り投げ、そのまま走る勢いを殺さないで、キールは女に掴みかかった。もつれあって、ごろごろと地面を転がる。途中、髪を引っ張られた。蹴られた。かみつかれた。だから顔を思いつきりひっかいてやった。悲鳴を上げて力をゆるめた身体に馬乗りになって、にやりと笑いかける。

「教えといてあげる。魔道に頼るばかりだと、こういうやり口に対抗できないのよ」

首筋を押さえられ、髪も乱れまくった女は、しぶとくフンと笑って見せた。

「暴力ではなく、あなたの重さに負けたのよ。体重、あたしより重いわね？」

胸の部分は軽そうなのに、と続けるものだから、きゅっと首筋を締めてしまった。

本気ではない本気では。ここで殺してしまったら本来の目的は達成できない。

なのに、「キーラ！」と焦ったような声が聞こえたのはなぜだ。

認められる条件として資格は有効でした。 (14)

続いて剣戟の音が耳を叩いた。意外に感じながら、セルゲイが向かった方向を見つめる。同時に、水竜から解放されたアレクセイが近寄ってくる。余裕のなくなった青衣の魔道士が解放したのだろう。完全に気を失っている女を見つめ、キーラに視線を移して、呆れたように告げた。

「やりすぎですよ」

「でも敵捕縛が目的のひとつでしょ？ 問題ないじゃない」

「いえ、そうではなく。……まあ、よしとしますか」

なんだかうやむやに誤魔化されてしまった。セルゲイと青衣の魔道士が剣を交えている。相手は職業を間違えているのではないだろうか。あるいは捕縛が目的だからセルゲイが手を抜いているのか。そう思いながら、女の上からどいて、左手を確認していた。表情がこわばる。薬指にはしっかり指輪がはまっている。同じものを見たアレクセイも、引き締まった表情でキーラを見つめてきた。

「これは……」

「うん。マーネと同じ、裏切りを防ぐ指輪、ね。このままだとこのひとの命が危ない」

「解除する方法は？」

問い質されて、渋い表情を浮かべる。統一帝国時代の魔道は、現代に使用されている魔道とは系列が違う。構成が違うのだ。つまり、キーラには解除の方法はわからない。

「ではいま、彼女から何かしらの情報を得る魔道はありますか」

ずいぶん悪趣味なことを云う。気を失っている女から、承諾を得ないまま、情報を手にするというのだ。魔道はある。ただ、ここがフェッルムの島であることが問題だ。

「少なくともここを離れなければ、魔道を使うことはできないわ。あと青衣の魔道士もどうにかしないと。あたしたちが探査する間に、この女性を殺されてしまったらたまらない」

云いながら、セルゲイと対峙している青衣の魔道士を見た。魔道士もこちらを見ている。アレクセイが立ち上がり、すらりと剣を抜いた。参戦するつもりか、と思えば、「セルゲイ」と短く呼びかける。それだけで通じたようで、セルゲイは魔道士から距離を置いた。

「ひさしぶりになりますね、青衣の魔道士どの」

「ああ、たしかに。もっともおまえはそのときとは様子が違うようだな」

魔道士はだらりと剣を下げている。女を見据えていた眼差しが動いて、アレクセイを見た。面白がるように、目を細める。なぜかキーラに視線を移して、ゆっくりと口を開く。

「アリアが面白いことを云うと思ったよ。王子さまたちがおれに会いたがっている、とね。だがそんなはずはない。十年前、ルークス王国から逃れたアレクセイ王子は」

「紫衣の魔道士、耳をふさげ！」

セルゲイが振り向きながら、いままでに聞いたことのない大音声で怒鳴る。だがすぐに行動できないキーラに聞こえるよう、魔道士ははっきり告げた。

「一か月前に、殺されたのだから」

（――、え？）

シンジラレナイコトバヲキイタ。

呆然と立ちすくんで、キーラはゆっくり我に返る。一か月前に、殺された。だれが？ 十年前にルークス王国から逃れたアレクセイ王子が、と、この魔道士は告げている。

「何やら勘違いしてらっしゃるようですね」

悠然と落ち着いたまま、アレクセイが応える。背中しか見えないが、欠片なりとも動揺していない。その後ろ姿に、わずかに落ち着きを取り戻した。魔道士のハツタリなのだと思いかけた。だが魔道士はにやりと笑う。

「いいや、勘違いじゃないさ。確かにおれが殺したのは、おまえをかばって亡くなったアレクセイ王子だよ、ミハイル。王子は息も絶え絶えにおまえに云ったな、紋章を護れと。おまえはその理由を知らないんじゃないか？ だからこのような取引も申し出た」

「黙れ！」

セルゲイがたまりかねたように叫んだ。ミハイル、と呼びかけられたアレクセイはこちらを振り向かない。でも、ピクリとも動かない。それは魔道士の言葉がハツタリだからだろうか。けれど、セルゲイの動揺は隠しきれない。むしろ彼の動揺がキーラに伝わる。魔道士の言葉が真実だと感じさせる。

（そうだ）

いまになって、先ほど女が告げたときに、不審に思った点を思い出す。

——紋章にはある精霊の意思が宿っているの。ルークス王家に連なる者を護ろうとする意志がね。その意思が本当に発動するか否か、確かめたかったのよ。

（それが本当なら、ルークス王家に連なる者を護ろうとする力が紋章にあるのなら、水の竜がアレクセイを飲み込んだ時に、紋章に異変が起きてもおかしくない）

たしかにキーラの護りは間に合った。だが、あれはただ力で包んだだけだ。あのままの状態が長く続けば、アレクセイは呼吸困難で倒れていただろう。危機に陥っていただろう。

でも、紋章にはどんな変化もなかった。

（じゃあ。じゃあ！）

キーラはアレクセイを見つめる。少なくとも、これまでアレクセイだと信じ、呼び掛けてきた青年の後姿をじっと見つめた。セルゲイが表情をゆがめて、視線を外した。

アレクセイは振り向かない。

「————そう、だからおれたちはおまえを殺すために探していたのさ」

ぽつりと低く響いた声は誰の声だろう。どこまでも冷ややかに研ぎ澄まされた声が聞こえたと思ったとたん、アレクセイが素早く動

いた。きらつと刃が月明かりに光る。ふぐつ、とくぐもった音が聞こえ、魔道士はアレクセイにもたれかかるように倒れた。

「弱い人間ほど、口はよく回る」

「ミハイル！」

「セルゲイ、おまえのせいだぞ。土壇場に弱いのはおまえの欠点だ」

云いながら彼は、ゆっくりとこちらを振り返ってきた。

月明かりにもあざやかな、彼の優美な美貌は、ぞっとするほど冷やかな色をたたえている。こちらを眺める彼が浮かべているのは、キーラを殺そうか殺すまいかと思案している表情ではないのか。逃げたい。衝動的に思ったが、逃げたら即座に斬られるということもわかってしまって、キーラは動けないでいた。しびれるように怯えが指先をふるわせる。舌が喉の奥に張り付いたままだ。それでもかろうじて口を動かした。

「うそだったの、全部」

彼の表情は変わらない。ただ、セルゲイが眼差しを伏せた。

「あなたはアレクセイ王子じゃなくて、ミハイルと云う人なの？」
「いいえ」

歩み寄ってきながら、彼はゆったりと微笑んだ。いつもの笑みで。いつも、『アレクセイ』が浮かべる笑みをたたえて、彼はキーラのすぐ傍に立つ。

「わたしは間違はなくアレクセイですよ。一か月前、ミハイルと云う名前と共に、一人の青年が葬られたときからね」

彼の手が動く。なにをされようとしているのか、わかつていたが動けなかった。動かなかった。下腹部に衝撃が襲う。前かがみになる身体を、もはやアレクセイと呼びかけられない青年が支えた。わずかに血の匂いが漂う。でも手つきは優しいままだった。

(どうして、支えたりするのよ)

莫迦、と最後につぶやいて、キーラの思考は闇に沈んだ。

詐欺に資格は必要ありません。(1)

「あら、今日も美味しそうね」

にこにこ微笑みながら、キーラは寝台から立ち上がった。もう一人の同室人はふてくされて、寝台から降りてこない。ワゴンに乗せて、夕食のプレートを持ってきたセルゲイは無言だ。数日前に持ち込んだ折り畳み式テーブルを組み立て、その上にプレートを並べる。ささやかながらにキーラも協力した。壁に並べた椅子をテーブルの前に並べる。

あとは食べるだけ、と云う段階にまで準備を整えたセルゲイは、そのまま部屋を出ていく。いつものように、時間を見計らって入室してくるのだろう。ぱたんと扉が閉じると同時に、同室人は身体を起こし、寝台を降りてくる。

「信じられない女よね、あんた」

そう云いながら、同室人は椅子に腰掛ける。キーラは果実水をふたつのコップに注ぎ、同室人の向かいに腰かけた。手を組み合わせ、食前の祈りをささげる。少し遅れて、同室人も食前の祈りを唱え始めた。素直な反応だなあと思いつめてみると、気づいた同室人がちょっと頬を赤らめた。誤魔化すようにさじを取り上げたので、あえて追求しないまま、キーラもさじに手を伸ばした。二人の腕に同じ腕輪がある。

——罪を犯した、魔道士を縛める腕輪である。魔道を封じる効果がある。

存在だけを知っていた腕輪の効能に、これまで半信半疑だったキーラだったが、実際に身に着けて、納得した。見事なほど、大氣にあふれているはずの力の波動がわからない。見えない。力を集めようとしても、意識を傾ける先が見つからないということだ。これまで手足のように魔道を使ってきたキーラにとって、もちろん不便な待遇なのだが。

（もっと早くに、この腕輪の効果を実感しておきたかったわ！）

と感じている。魔道を使えない事実によって、押し寄せるこの安心感はなんだ。というより、この手があったのか、とも、キーラは考えてしまった。

（まさか犯罪者向けの腕輪が、ここまで絶大な効果があるとは思わなかったのよねえ。これさえあれば、あたし、堂々たる一般市民。飲食店で働いていても、どこからも文句は出てこないじゃない！）

と、晴れ晴れとした思考でつぶやいているキーラだが、当然、同室人は同意しない。

「また、にまにましてる」

不機嫌そうに眉を寄せて、同室人はキーラを睨んだ。ほかほかと湯気を立てる椀物をすすっていたキーラは、口の中の食べ物をきれいに呑み込んで、首をかしげた。

「なあに。おいしいごはんを食べているんだから、にこにこするのは当たり前でしょ」

「にこにこじゃないわよ、にまにまよ。……ったく、こんなのが紫衣の魔道士だなんて」

間違っているわ、とつぶやいた同室人は、無然とした様子で食事を再開した。

この同室人の名前は、アリアと云う。そう、フェッルムの島で捕えた女魔道士だ。

あのときは妖艶な印象の強い女だったが、こうして化粧を落とした素顔を見ると、年相応の幼さが漂っている。なんと驚いたことに、キーラよりも年下なのだ。

すると現金なもので、キーラが抱いた反発はきれいに消えてしまった。生意気な言葉をさんざん云われても、なんだか受け流せるようになった。アリアにしてみたら腹立たしいことだろうが、キーラの精神上、とても喜ばしい事実である。なにしろ監禁されているいま、一日のすべてを、この女魔道士と二人きりで過ごさなければならぬのだから。

思考が暗く沈みそうになったものだから、慌ててキーラは丸窓を見つめた。ゆっくりと進むコーリヤの船は、いま、どのあたりにいるのか、さっぱりわからない。ルークス王国に向かっているのだろう、けれど、くわしい航路を教えてください存在はいないのだ。

「莫迦じゃないの」

つんつんした言葉が響いた。視線を向ければ、アリアは食事の手を止めて、キーラを睨んでいた。もはや上品ぶった言葉を使わない。アリアの素は、なんだか微笑ましい。

「美味しいものを美味しいと云ってなにが悪いの？　どんなときでも食事は重要なよ」

「そうじゃないわよ。……あんた、あいつらの仲間なんでしょう。なのに、敵であるわたしと同じ目にあわされて、なんでそんなにここにこしていられるわけ？」

莫迦じゃないの、と、もう一度繰り返す。キーラは口端を持ち上げた。

（表面ほど平然としているわけじゃないんだけど）

だが正直に話すより先に、キーラはさじを腕から持ち上げた。味わい深い汁と、大きく切られた具がのっかっている。まだほかほかと湯気が立つ料理を眺めて、口を開く。

「この料理、どうやって作っているか、わかる？」

はあ？ と胡散臭げな響きで相槌を打たれた。

「すごく手が凝っているのよ。材料をぶった切って、ぐつぐつ煮込んだ、と云う作り方じゃないの。具に調味料をまぶして、焼き目をつける。汁は、ぶつぎりにした骨をぐつぐつ煮込み、さらに丁寧に漉して味付けしたもの。具と汁を合わせて、さらに味を調えてる」

語りながら、アップリケ付きエプロンを着た料理人を思い出す。初めて乗船した時にはキーラのための歓迎ごちそうを作り、いまでもこうして美味しい腕物を作ってくれる人だ。

「他にも毎日シーツを交換してくれる。二日に一度は、身体を拭くことを許してくれる。魔道を封じる腕輪はされているけど、手も足も縛られていない」

ふう、と、息を吐いて、キーラは続けた。

「この状況で、怒り続けるほど心の狭い女ではないつもりよあたしは」

「へえそお」

冷ややかに云い放って、アリアはさじを置いて立ち上がった。いつの間にか、椀は空になっている。ぎしぎしと寝台にのぼり、振り返らないまま云い放った。

「でもわたしにとっては、あいつらは仲間を殺したやつらだからね。どんなに待遇が良くても怒りを解く理由にならないわ。もちろん、あんたも同じよ。もう、話しかけないから」

（その、『話しかけないから』、何度目の宣言か覚えているのかしら？）

素朴な疑問を口にしないで、キーラは平然と食事に戻った。美味しい食事に口論は不要なのだ。

詐欺に資格は必要ありません。(2)

食事を終えて、食器を重ねる。そのまま寝台に腰かけると、じきに足音が聞こえる。こつこつこつ。礼儀正しく扉を叩かれ、思わず苦笑してしまった。セルゲイは答えを待たずに入室するが、事前にノックするところが、彼の性格を表わしているように思える。

だが、入室してきたのは、セルゲイだけではなかった。

「どうも。おひさしぶりですー」

いささか気まずそうなキリルが、セルゲイに先立って入室してきたのだ。軽くまたたいて、キーラはにやっと笑ってやった。

「本当におひさしぶりね。甲板磨きはどう？」

意外な質問だったのか、キリルは目を見開いて、ちょっと安心したように笑った。

「勝ち誇る相手がなくて、気が抜けています。寂しいものですね」「ま、しかたないわね。あたしはこういう目にあっているわけだし」

別に皮肉ではなかったのだが、キリルは目を伏せてしまった。ああ、もどかしい。軽い苛立ちを覚えていると、代わりにセルゲイが口を開いた。

「殿下がおまえを呼んでいる。キリルと共に行け」
「ふうん。殿下、ね」

殿下って誰のこと。そう云ってもよかったが、この場にはアリアがいる。

キーラは一応配慮して、おとなしく立ち上がった。キリルが食器を持ち、セルゲイが壁際に留まる。アリアの見張りとして残るつもりか。（アリアにとって）気の毒なことだなあ、と思いながら、部屋を出た。

ひさしぶりに歩く、船の通路である。まだ明るい時間だから、すれ違う傭兵たちもいる。微妙に気づまりだと感じてしまう理由は、その誰もが、キーラを見るなり、気まずそうになることだ。気が付いていたが、特になにか示すわけでもなく、キリルの後についていく。途中傭兵の一人に食器を預けたキリルは、ちらちらと振り返っていたが、おとなしくキーラがついてくることに眉根を下げた。

「怒ってますよねー？」

「なにそれ」

率直に感じたことを口にする、キリルはますます情けない表情を浮かべた。

慰めてやってもよかったが、いささか間抜けな図式である。なぜ、監禁している側を、監禁されている側が慰めてやらなければならいいのか。たとえるならそれは、飲食店で間違ったメニューを出してきた店員を「気にしないで」とお客が慰めるようなものである。どう考えてもおかしい。

「いや、この数日間、何の情報も与えませんでしたし」

おずおずと切り出してきたキリルに、口の端だけで笑いかけてやる。

「毎朝お寝坊できたのは嬉しかったわ。ヴォルフの料理は美味しかったし。おかげであたしの気持ちはがつんと定まったわね」

「えっ」

驚きと期待が入り混じった様子のキリルに、にっこりと笑いかけてやる。

さらに挙動不審になったキリルに先導されるまま、キーラはいちばん最初に案内された、自称アレクセイの部屋にたどり着いた。キリルが扉を叩く。その隣で、静かにキーラは呼吸を整えた。どんな目に合うのか、心構えが必要である。すぐに応えがあつて、キリルが扉を開けた。

推測通り、部屋にはコリーヤ爺とアーヴィング、アレクセイと名乗っていた青年が集まっていた。彼らはさすがに表情に揺らぎがない。落ち着いた表情でキーラを見つめてくる。

入室したキーラは、ぐると三人を見渡した。もはや笑みなど欠片も浮かべていない。キリルが背後の扉付近に立った動きを気配で察しながら、口を開いた。

「素敵な待遇を、どうもありがとうございます」

渾身の皮肉をぶつけたつもりだったが、どうした理由なのか、三人は唇をゆるめた。

なんだその反応。まさか、皮肉が通じていないのか。思わず半目になると、アーヴィングが和やかな表情で口を開いた。

「ずいぶんお怒りのようだな」

「ああら、いいえ？ 毎日食べて寝て、食べて寝て。結構な待遇だったなあと心から感謝していますですよ、ホホホ」

「言葉遣いが苦しいですよ、キーラ。いつもの口調で話してください」

「あなた、だれ」

きばつと云ってやると、困ったように金髪の青年は微笑んだ。あのときに向けられた冷ややかな表情が、まるで嘘のようだ。だがキーラははっきりと覚えている。少なくとも、あのときに感じた自分の怯えを覚えていた。だからキーラは冷ややかな眼差しを崩さないでいる。

「云いませんでしたか、わたしはアレクセイですよ」

「嘘つき」

「たしかに嘘ですが、本気の嘘です」

なんだそれ。云い訳のつもりなのか見苦しい。

わざわざ口に出して云うことではないから、眼差しにたっぷり不審の色をまぶしてやった。いつものように笑った青年は、ちらりとアーヴィングと眼差しの会話を交わした。口で語れ口で。以心伝心など寒々しい、と思っていると、コーリヤ爺が口を開いた。

「こやつの名前はな、ミハイルと云う。だが、いまはアレクセイと呼びかけてくれぬか」

「もちろんかまいません。『ルークス王国王子さまではないアレクセイさん』と呼びかければいいですよね」

「や、長ったらしいだろそれ」

「略して『えせ王子アレクセイ』にしましょうか」

アーヴィングがぼそりとツツコミを入れたものだから、にこやかにキーラは提案した。

おちよくっているつもりはない。名前を呼び合う予定はないのだ

から、どんなに長くても構わないという気持ちを表したつもりだ。その意思是伝わったのか、三人は顔を合わせる。キーラは呆れた。この期に及んでも、あの言葉は聞けないようだ。呆れた気持ちを隠さないまま、固めた決意を口にする。

「今回の依頼はお断りします。即刻、わたしを船から降ろしてください」

指先がわずかに震えたが、声は震えなかったから、心の中で自分をほめてやった。

詐欺に資格はありません。(3)

口封じに殺されることはない、と、いまのキーラは考えていた。

フェッルムの島では少々錯乱していた。キーラは最高位魔道士であり、また、魔道士ギルドの長から後継者に指名されている身である。客観的に考えたら、充分、重要人物なのだ。少なくとも不審な死に方をしたら、ギルドの長は事の経緯を必ず質すだろう。結果、傭兵集団『灰虎』の秘密が知られるかもしれない。そのような下手をするはずがない。

では、どうするか。

「それは、できない相談だな」

誰よりも先に、アーヴィングが口を開いた。キーラがここまで思い切った提案をするとは思わなかったのか、表情が少しばかり改まっている。金髪の青年、――アレクセイ（仮）も同様だ。ただ、コーリヤだけは優しいながらも慎重な眼差しでキーラを見返していた。

「嬢ちゃんが、おれたちの秘密を口外したら、困る」

キーラはすっと瞳を細めた。いま、この傭兵団の団長は明らかに下手を打った。紫衣の魔道士であるキーラを、雇用主の秘密をわざわざ話して回る人間だと暗に告げたのである。

莫迦だ。魔道士は傭兵の一種なのだ。雇用契約において、雇用主の秘密を守る義務もある。色なしの魔道士でも、そのあたりの義務は徹底的に教え込まれるというのに。

口を開いて、感情のままに怒鳴ろうかと思った。だがアーヴィングがそう云った途端、コーリヤがアーヴィングの頭を殴った。ごいんと盛大に音が響いたから、戯れめいた殴り方ではない。本気で殴っている。はたして、アーヴィングは涙目でコーリヤを見たが、コーリヤはキーラに向き直って、頭を下げてきた。

「申し訳ないの、キーラどの。許してほしい」

ようやく得られた謝罪だ。キーラはわずかに肩から力を抜いた。

「平穩に暮らしておったおまえさんを、無理矢理、今回の依頼に巻き込んでおきながら、このような始末じゃ。怒るのは当然じゃと思うが、どうか話を最後まで聞いてくれぬか」

「……顔を上げてください、コーリヤ爺」

だが、いちばん謝るべきではない人からの謝罪なのだ。複雑に顔をゆがめながら、キーラはとりあえずそう告げた。じろりと残り二人を眺めて、言葉が続ける。

「事情説明をしないまま、人の意識を奪ったり腕輪をはめたのは、コーリヤ爺ではないのでしょうか？」

「しかし」

「本当に謝らないでください。そんなに謝られたら、……あたしは自分の決意も貫くことができなくなる」

キーラの口を封じる方法を選べないと悟った傭兵たちは、ではどうするのか。

———もったも考えつきやすい方法が、キーラを味方として取

り込む方法である。

同志として迎えれば、秘密が漏れる心配は不要だ。紫衣の魔道士でもあるし、心強いことこの上ない。ただ、問題は、どうやってキールを取り込むか、ということだ。

おそらくいまになって呼び出したのは、その方法を論議していたためだろう。『灰虎』の傭兵たちは、キールが望んで依頼を受けたわけではないことを知っている。キールがおとなしく自分たちの仲間になると考えられるほど、傭兵たちは楽観的ではないだろうから。

「意思は変わらないと？」

穏やかにそう云った青年を、キールはまっすぐに見つめ返した。アレクセイと名乗り、ミハイルと呼ばれていた青年を、なんと呼びかければいいのか、キールはまだわからない。

「変える余地がどこにあったというの」

（ああ、まずいわ）

云い返しながら、確かにキールはそう考えていた。完全に自分は、喧嘩腰になっている。

このままでは傭兵たちから強硬な態度しか引き出すことができない。もっとうまく立ち回らなくては。思考の隅では確かにそう考えているのに、身体には、態度には現れない。

（うまく交渉したいのに）

表情を変えぬまま、心の内で困惑していると、背後から遠慮がちな声が聞こえた。

「あとう、団長」

「なんだ」

苛立ちがにじみ始めた表情で、アーヴィングが応える。背後から歩み寄る気配がして、キリルがキーラの隣に立った。身体がこわばっていたから、キリルに視線を向けなかったが、そっと気遣うように視線を向けてきた動きには気付いた。

「僕たちはまず、キーラさんに謝るべきではないでしょうか」

「なんだと？」

「だってキーラさん、なにもしていないのに、犯罪者がつける腕輪を勝手につけられたんですよね。まずそれが問題だと思うんです。無実の人を犯罪者として扱ってるんですから」

（いえ、別にそれは構わないのだけど）

むしろうつとうしい魔力が見ることができなくなって、キーラとしては万々歳である。

だがさすがに本音をダダ漏れにするほど、キーラは空気を読めない人間ではない。実際に、アーヴィングは痛いところを突かれたと云わんばかりである。ちらりとその視線が動いて、金髪の青年に向かった。青年は涼しい表情を動かさない。

そうか、と悟る。今日までの扱いは、すべてこいつが原因だったのか。

（あるべき場所に、返すと云ってくれていたのに）

キーラはくしゃりと顔をゆがめた。視界がぶれる。ぎよっとアーヴィングが表情を変えた。理由はわかっている。優美な金髪の青年も、軽く眉をひそめた。

でも泣いてやるものか。うるんできた瞳を、渾身の気力で持ちこたえる。こんなの、間違っている。こんなやつに勝手に期待して、裏切られたように錯覚して、あげく涙を流すなんて冗談じゃない。キーラは必死になってまぶたをまたたかせた。涙を散らせる。気持ちを鎮める。すうはあ、と大きく呼吸を繰り返して、つばを飲み込んで、告げた。

「確認させていただくわ。要するに、あなたたちはルークス王国王子を騙ろうとしている。そういうことよね？」

するとアーヴィングが奇妙に口ごもった。コーリヤはまぶたを伏せる。

なにか事情があるのか。直感的に感じ取ったが、金髪の青年がばさりと云ってのけた。

「その通りです」

「そしてあたしにその片棒を担がせようとしていた。ことが露見したら、あたしはもちろん、魔道士ギルドも騙りを働いたという汚名にまみれることになる。少なくともあたしは、あなたたちと同じように処刑される。その上で、あたしを巻き込もうとしたのね？」

「はい」

ぶるっと唇が震えた。頼りなくおのくものだから、唇を噛んでしっかりとしようとした。金髪の青年が苦笑する。いつもと同じようにでいて、でもなんだか違う微笑だ。

「その先は云わなくてもいいですよ、キーラ。よくわかりましたから」

やわらかい声だ。微笑と同じように、やわらかくやさしい。『アレクセイ』らしい態度だ。幼子をあやすような、やさしい『王子さま』らしい態度。でも。

（それはあなたの本当の態度じゃないのでしょうか……？）

もうわかっている。青年の真実は、あの夜、フェッルムの島で見たのだから。

だからこわい。殺されることはないとわかっている、やはりこわくて、どこか哀しい。

（ああ、もう、ぐちゃぐちゃ）

ぶるんと頭を振った。いまはどう考えても、冷静になれそうになかった。

詐欺に資格は必要ありません。(4)

丸窓の外から、月の光が差し込む。寝台から眺めて、ふう、ときーラは息を吐いた。

眠れない。さきほどから眠ろうと努力しているのだが、夕方に交わした会話が尾を引いていて、眠気が訪れないのだ。眠ろうと努力しているうちに、なんだかむしむしと暑くなってきたものだから、夜具を身体の上からどけてしまった。でもまだ暑い。

水が呑みたい。ふと閃いた衝動は次第に強くなってきた。しかし部屋に水差しは置かれていないし、部屋の外には見張りがいるだろう。頼めば水くらい飲ませてくれるだろうが、同室人がいる身だ。起こしてしまったら申し訳なくて、動けないでいる。美味しい食べ物想像する。つばが出てこないかなあと考えたのだが、効果はないようだ。

ふう、と再び溜息をついたとき、上の寝台がぎし、ときしんだ。

「眠れないわけ？」

「起きていたの？」

びっくりして声をあげると、呆れたような声音が響いた。

「ふう、ふう、ふう！ 何度も何度も溜息をつかれたら、うっとうしくて眠れるものも眠れないのよ！」

「ごめん」

「謝るくらいなら、さっさとすっきりして眠ることね」

「え？」

戸惑っていると、ぎしぎし、と寝台をきしませながら、アリアは降りてくる。壁に立てかけてある椅子をひきずってきて、どしんと腰かけた。おそろおそろ寝台から起き上がると、ちょうど目の前にアリアの顔がある。無然と唇をとがらせて、顎をしゃくった。

（話を聞いてくれるってこと？）

うわ、と、キーラは奇妙な感動を覚えた。敵なのに。少なくとも敵だと云ってつんつんした態度をとっていたのに、なんだろうこの変化は。かわいいとまで思ってしまった。

しかし、と、キーラは困惑する。話を聞いてくれようとする姿勢は嬉しいが、だからと云ってすべてを話すわけにはいかない。キーラはともかく、アリアは明確な敵なのだ。うっかり秘密を話そうものなら、本当に口封じに殺されてしまう。それはだめだ。

「ちょっと、喉が渴いて」

だからあいまいにぼやかすことを選んだのだが、アリアはぴくりと眉を反応させて睨んできた。こわい。少なくともセルゲイよりこわいのではないか、と考えていると、アリアは急に立ち上がって、扉をガンガン叩いた。応えを得たのか、声を張り上げる。

「飲み物を持ってきなさいよ。あんたたちの紫衣の魔道士さま、喉が渴いたんですって」

しばらくすると、扉が開いて水差しが差し込まれる。アリアはカップに水を注いで、呆然と眺めていたキーラに差し出してきた。「ん」と乱暴に差し出すものだから、ちよつと水がこぼれる。だが

慌ててキーラは受け取り、「ありがとう」と告げた。ふん、と、アリアは鼻息を立てて、ぎしぎしと寝台に戻っていく。たしかに喉が渴いていたのだ、水分がじわじわとしみこんでいく。ほう、と満足に息を吐いて、カップを寝台の傍に置いた。

「なにがあつたのか、知らないけど」

唐突に、アリアは話しかけてきた。横たわりかけたキーラは動きを止める。

「あいつらはそうやって、あんたを大事にしている。だったらあんたも、多少は歩みよってもいいんじゃないの？」

しんと静かな声音だった。内容は引つかかるが、耳を傾けさせるなにかがある。

ふと、アリアの身の上に思考が向かった。仲間を殺され、敵に捕らえられている。だがこれまでアリアの仲間は動きを見せない。船の上だからということも関係しているだろうか。考えながら、口を開く。

「歩み寄ろうとしたんだけどね」

「は？」

「＞誓約く、しようと思っていたのよ」

そう続けると、しばらくの間を置いて、「はあ？」と云いながら起きあがる気配があつた。

「あんた、なにを考えてるわけ？」

苛立たしげに詰問され、キーラはちよつと笑った。

＞誓約＜とは、魔道による精神的拘束だ。特殊な言葉ヴォールズを用いて約束する。これを破った場合、言葉が対象者に痛手を与える仕組みになっている。よほどのことがない限り、取り交わさない、統一帝国時代から残っている古い魔道なのだ。

キーラは＞誓約＜を以って、『灰虎』の秘密を他言しないと伝えるつもりだった。傭兵たちの危惧は理解できる。さらに加えて、キーラは傭兵たちに多少の好意も抱いている。傭兵たちの行為に協力できないが、せめて＞誓約＜で安心を返そうとしたのだ。依頼を断り、船を降ろしてもらう交換条件として、そのくらいの不自由は受け入れようと考えていた。

だが、結果は、ああいうありさまだ。思ったより感情的になりすぎた。

失敗だったな、と、改めて独白していると、アリアがさらに云う。

「＞誓約＜はやりすぎでしょう、＞誓約＜は！」

「それで皆が安心できるならいいじゃない？」

「お人好し。云っておくけど、これは褒め言葉じゃないからね、罵ってんの」

「裏切りを防ぐ指輪、なんて悪趣味な装身具をつけている人に云われたくないわ」

そう云い返してやると、アリアはピタッと沈黙した。

云い過ぎたかな、と思った理由は、しばらく経ってもアリアがなにも云い出さないからだ。仲間の存在を思い出させてしまったかな、と考えていると、平坦な声音で云う。

「裏切りを防ぐ指輪、なんて、云い方やめてよ。これは絆なの」

「絆？」

奇妙な言葉を聞いた気がして、その単語を繰り返した。けれどリアはそれ以上何も云わない。キーラはしばらく待ったが、あきらめて目を閉じた。

ただ、気づいたことがある。あの指輪を絆と云い放ったこの少女は、マーネで殺された魔道士に手を下したわけではないのだろう、と。むしろ魔道士がだれによって殺されたのか、知らない可能性もある、と考えながら、ようやくキーラは眠りに就いた。

詐欺に資格は必要ありません。(5)

扉の外がいつもよりにぎやかだ。きっと補給するために港に停泊しているのだろう。

丸窓から外を眺めると、船から出ていく傭兵たちの姿が見える。このまま一泊するのだろうか。これまでなら間違いなくそうしていただろうが、いまはアリアの問題もある。

(なにを考えているのかしらね)

アリアと二人、相変わらず部屋に監禁されたままの状態で、キールは心の中でつぶやいた。傭兵たちのことでもあり、アリアの仲間たちのことでもある。どちらも何を考えているのか、キールにはさっぱりわからない。尋問を行うでもなく、救出を行うでもなく。このままルークスにたどり着くのだろうか、と、考えて、キールは眉を寄せた。

その流れでは、なし崩し的に、依頼を果たさなければならないのだろうか。

(依頼を果たすことも考えに入れたほうがいいのかしら)

最近はずいぶん、そんな思考をもてあそぶようになっている。一度、金髪の青年の部屋に招かれたものの、あれ以降は何の音沙汰もない。再び話し合いの機会があると思っただけに、しょうじき、拍子抜けだ。味方に取り込むことをやめて、手元で見張ることにしたのかしらね、と考えるけれど、奇妙な違和感を覚える。

————がたん、

窓際から外を眺めていると、奇妙な音が聞こえた。なにかが扉の外でぶつかったような音だ。

まだ夕食の時間にならないはずなのに、と考えかけて、はっと閃いた。視線を向けると同時に、アリアががばっと寝台から起き上がる。がちやがちやと鍵が開けられる音が響いて、扉が開いた。傭兵ではない、すらりとした男の姿が見える。

「ここにいるかい、アリア」

「マティ！」

ほとんど飛び降りるように、アリアは寝台から扉に向かった。喜々としてアリアが飛びついた人物を見て、キーラは愕然と目を見開いた。あざやかな濃紺色の肩掛けを身に着けたその人物は、アリアを抱き留め、キーラを見返して、にやりと笑う。

「ほお。紫衣の魔道士どのもちちにいたのか」

「あなた。……どうして、」

うめくように洩らした、問いかけの言葉は、ほとんど聞き取れないほどかすれていた。

現れた人物は、他の誰でもない。あの夜、金髪的青年によって斬られた、青衣の魔道士だった。

間違いなく殺されたはずだ。すぐにキーラも気を失ってしまったけれど、倒れて二度と動けなくなった姿を覚えている。たとえ息があったとしても、『灰虎』が見逃すはずがない。

（双子、だとか）

直感的に閃いた答え、とは違う別の可能性を、思考は呟いた。それが現実的な答えと云うものだ。だが、アリアが安心したように続けた言葉が、常識的思考を打ち砕く。

「今回は生き返るまでに、ずいぶん時間がかかったのね。心配したのよ」

「悪かったな。丁寧に埋葬されたし、船もなかったから手間取った。心細かったか？」

「別に」

云いながら、アリアはちらりとキーラを見る。その眼差しを追いかけて、マティと呼びかけられた人物は、おおらかに笑った。好意的な微笑を浮かべて、キーラを見つめる。

「アリアがずいぶん世話になったみたいだな。お礼になにか、してやろうか？」

なにか、と云いながら、その眼差しはキーラの腕輪に向かっていく。反射的に腕輪をおおう。この腕輪を砕かれたら、また、力が見えるようになってしまう。

———また、紫衣の魔道士に戻る、と云うことだ。

ひよい、と、眉を持ち上げ、マティは意外そうにキーラを見返す。だが、アリアがはっとしたように、マティの袖を引いた。扉の外を見て、マティの表情が引き締まる。

原因はキーラにもわかった。にぎやかな足音が聞こえる。傭兵たちがこの異変に気付いたのだ。

マティは短く呪を唱えて、アリアを抱えたまま、水の弾丸を右手から放出する。そのまま後ろに下がる流れで部屋に入り、扉を閉め

る。アリアが動いて、扉の前にがたと衣装箱と椅子を並べた。さらにマティが魔道をかける。どん、と扉が揺れる。傭兵たちが体当たりしているのだろう。二人の思いがけぬ行動に、啞然としていると、マティに再び抱き着いたアリアが手を差し伸べてきた。

「いらっしやいよ」

戸惑っていると、アリアは苛立たしげに、差し伸べた手を振った。

「あんたなんてどうせ、この先もここに監禁されたままじゃない。だったらわたしたちと逃げたほうがいい。ちがう？」

くく、とマティが喉の奥で笑って、キーラを見据えた。さて、どうする？ そんな問いかけを含んだ眼差しを見つめ返す、その間にも、どんどんと扉が揺れている。「キーラ！」と呼びかけてくるのは、キリルだろうか。明らかに気遣っている声音だ。応えるべきだろう。迷う間にも、マティとアリアは逃れる様子も見せずに、じつとキーラを見ている。

待っている。

（なにを考えているの、この人たち）

本当に困惑して、二人を見つめた。なぜ、逃げ出そうとしないのか。なぜ、自分を待っているのか。このまま自分を待ち続けて、捕まってしまったらどうするつもりなのだ。

「キーラ、いますか！」

唐突に、「彼」の声が響いた途端、ぴくりと肩が揺れて、心がす

くんだ。

珍しく取り乱した声だ。キーラを案じているのだから、怖がる必要などどこにもない。そう、キーラ、が、怖がる必要はない。……だが、こうしてキーラを待ち続ける二人には。

すう、と、キーラは息を吞んだ。自分が選ぼうとしている行動の、意味を考えた。

だが、結局、キーラは一步進んで、アリアの手を取っていた。アリアは口端を持ち上げる。マティが笑いながら、呪文を唱える。扉が揺れ、衣装箱が倒れる。魔道が消える。

部屋に飛び込んできた彼と、キーラは確かに目が合った。だが次の瞬間には、金髪の青年の姿は視界から消えていた。マティによる転移魔道が発動したのである。

詐欺に資格は必要ありません。(6)

視界のぶれが足元をおぼつかなくさせる。たたらを踏んで、結局、座り込んでしまった。

ぺたんと座り込んで、転移魔道でたどり着いた先が、室外ではないと気づいた。つるつるとよく磨かれた床は、大理石だろうか。転移の魔道陣が刻まれていた。円形に刻まれている言葉を見つめて、ヴォールズキーラはゆっくりと読み上げる。

「我、ここに帰還する。世界の果てから、ルークスの都、サルワートイオーの地へ」

「さすが紫衣の魔道士どのだ。刻まれた言葉すら読み解くか」ヴォールズ

からかうような声が響いたものだから、キーラは自分一人ではない事実を思い出した。顔を上げれば、マティが顎に手を当ててにやと見つめていた。アリアはちらりとキーラを見て、唯一存在する扉に向かっている。と、向こうから開いた。

「マティアスどの、アリアどの。お戻りですか！」

扉を開けたのは、まっすぐな黒髪を肩で切りそろえた少年だ。白い簡素な服に、水色の肩掛けをまとっている。部屋に足を踏み入れて、キーラに気づいたようだ。紫紺の肩掛けに目を止め、驚いたように立ちすくむ。次いで、いぶかしげに眉を寄せる。

「こちらの紫衣の魔道士どの？」

「気にしないでいいわ。それよりお風呂の用意をお願い」

アリアが少々居丈高な口調で云うと、少年はむっとしたように眉

を寄せた。

「あのですねえ、アリアどの。お忘れかもしれませんが、僕は、青衣の魔道士であって、あなたの召使いじゃないんですよ？」

「知っているわ。そもそもこんなことを召使に頼むわけがないでしょう。水をお湯に変えてくれなんて、青衣の魔道士にしか頼めないじゃない」

「そうではなく！」

なんだか和やか(?)に云い合いながら、二人は部屋を出ていく。何となく見送っていると、マティが屈みこんでキーラを覗き込んできた。

「まだ目がくらんでいるか？ 手を貸してやろうか」

「……ううん、大丈夫よ」

ところがそう云ったにもかかわらず、マティは手を差し伸べて、キーラの手首をつかんだ。はっと顔を上げると、マティはじっと腕輪を見つめていた。

「外してやろうか？ このままだとあちこちで迫害を受けるぞ」

キーラも改めて、腕輪を見つめる。特殊な封印が刻みこまれている、水晶でできた腕輪だ。目立つものではないと考えていたのだが、それは少々甘い見込みだったらしい。だが応えるより先に、キーラは別の質問をぶつけることにした。

「ここはルークスなのね？」

「ああ。^{ヴォールズ}言葉で推測できていただろう？」

けろりと肯定されて、肩から力が抜ける。

あの船から逃げ出す際は、どこに行くことになっても構わないと
考えていた。ルークスにたどり着く可能性も、一応は考えていた。
だが実際にルークスに着いてみると、なんだか氣力が萎える。マー
ネまでどのくらい距離が離れているかと思っっているのだ、と、だれか
れ構わず訴えたくなった。だが自分の思考の幼さに気づいて、ぶる
んと頭を振るう。

「で、あなたたちは、おとなしくわたしを逃がしてくれるの？」

問いかけると、マティはにっと笑った。

「紫衣の魔道士はいつだって大歓迎さ。だがおまえは、俺たちの仲
間になるつもりか」

キーラもちらりと笑う。

「いいえ。あたしはマーネに帰りたいの。だからルークスを出たい
のだけど」

「それは難しいかな。そのためには結界を解かなくちゃいけないか
らね」

不意に第三者の声が割り込んできた。涼やかな、少年にも青年に
も聞こえる声だ。

視線を向けると、開け放たれたままの扉の傍に、ひとりの青年が
立っていた。キーラはその青年を見つめて、違和感に眉を寄せる。

なんというか、いままでに見たことがない顔立ちだ。象牙色の肌
に、漆黒の髪と瞳。立ち上がったマティよりも、さらに細身で、ま
るで子供のようにも見える。

「スキターリエツ。立ち聞きとは悪趣味だぞ」

「ごめんごめん。でも聞こえてきたんだ、しかたないだろう？」

まったく悪びれない態度で青年は謝る。キーラは青年に向けられた呼称に首をかしげた。ルークスの言葉だ。スキターリエツ放浪者。個人名ではない。だが青年はいやがる風でもなく、その呼称を受け入れている。キーラを見つめて、ニコリと笑った。

「こんにちは。紫衣の魔道士なんて、初めて見るからちよつとうれしいね」

「あたしは珍獣ではないのだけど。……こんにちは」

戸惑いながら挨拶を返せば、ニコニコと青年は笑う。そのままなにも云わない。本当に珍獣になった気持ちに顔をゆがめると、マテイが溜息交じりに言葉をはさんできた。

「あのな、スキターリエツ。せめて自己紹介するとか、したらどうだ？」

「ん？ だけど自己紹介のしょうがないんだけどなあ。僕はスキターリエツ。名前はあるけれど、それは秘密だから明かせない。ほら、ずいぶんうさんくさくなるだろう？」

たしかにうさんくさい。キーラは目を細めてスキターリエツをながめた。しばしの沈黙をはさんで、けろりとマティに視線を移す。

「じゃ、あたしはここを出ていくから、そういうことで」

とりあえず、いろいろなことをなかったことにしてみた。
ぷ、とスキターリエツが吹き出す。けらけらと楽しげな笑い声に

続いたが、なんというか、キーラにはどうでもいい状況である。マティも青年を放置して、首をかしげる。

「それはかまわないが、こいつが云っただろう。結界があると。どうするつもりだ？」

「本当に結界があるのか、確かめてから答えを出すわ」

「無駄だよ。結界があるから、ルークスは鎖国してられるんだ」

笑いながらスキターリエツが口をはさむ。なんだか余計なことを聞いた。ぴくりと眉を反応させながらも、キーラはにっこりと笑う。聞かなかったことにしよう。さらに笑い転げながら、スキターリエツがマティに視線を向ける。

「頑固だねえ、この娘さん。マティアス、この人の名前は？」

「キーラ・エーリン。最年少の紫衣の魔道士なのだ」

「へえ。それはそれは。……ねえ、キーラ？」

名前を呼び掛けられたら、応えるしかない。しぶしぶ顔を向けると、スキターリエツはにっこりと笑っていた。見れば見るほど不思議な顔だと思う。しっかり男性の顔立ちだが、なんだか華奢な印象があって、年齢不詳に見える。温厚に目を細めて、口を開いた。

「きみがどこに行こうとしているのか、僕はわからないけど、しばらく一緒について行ってあげるよ。そもそもいまのきみには、結界なんて見えないんだろ？」

「おい、スキターリエツ」

「僕は退屈してたんだ。退屈しのぎに、ちょっと留守にするくらい、別にかまわないだろ」

ちろりと漆黒の眼差しを、マティに向ける。ひょうひょうとした

印象のある男は、その眼差しだけで奇妙に口ごもった。しばらくして、「アリアがすねるな」とぼやく。ご機嫌に笑って、スキタールエツは何気ないしぐさでキーラの腕をとった。む、と反射的に睨むと、ますます楽しそうに笑う。ぜんぜん応えていない様子は、「彼」を思い出させた。微妙に顔が暗くなったのだろうか、スキタールエツは首をかしげて、「そうそう」と云い放つ。

「スキタールエツなんて呼びにくいだろ？ キョウ、と呼んでくれてもいいよ」

偽名としても聞きなれない名前だ。マティの驚きに気づきながら、キーラはうなずいた。

詐欺に資格は必要ありません。(7)

(どうしてうなずいてしまったんだろ)

キーラは現在、微妙な後悔をしている最中である。何に対する後悔かと云えば、左手首をがちりつかんでいる青年、スキターリエツの同行を許してしまったことだ。ただ、通り過ぎる人間が、皆、スキターリエツに対して頭を下げるものだから、完全な後悔になりにくい。きっとキーラ一人ならば、通行もとがめられていたに違いない。

「で、キーラ。きみはどこに向かおうとしているんだい？」

「いまさら訊くの、それを？」

しばらく歩いたところで、スキターリエツが振り返る。わざわざ問いかけてきたかと思えば、こういう内容だ。手首をつかまれ強引に部屋を連れ出されたキーラとしては、呆れてしまうのである。にこりとスキターリエツは微笑んだ。

「神殿から出ていきただっていることはよくわかったからね。だから神殿の出入り口に案内しようと思ったんだけど、そこから先へどうしたらいいかなあ、といま気づいたんだよ」

「ちょっと待って。ここは神殿なの？」

うん、と、スキターリエツはむしろきよとした表情を浮かべる。唐突に、キーラはごく基本的な情報すら確認してない自分に気づいた。焦っている？ 短く自問して、混乱している自分によって、く気付いた。馬鹿、と短くつぶやいて、ぐい、と別の方向に歩き出す。回廊に面している中庭に向かうのだ。ベンチがあったから、そ

こで少し考えよう。

キーラに引きずられる形になったスキターリエツは、おとなしくついてくる。どこか面白がる表情を浮かべているが、なにを面白がっているのか、さっぱりわからない。まあどうでもいいことだから、さくさくキーラはベンチに腰かけた。スキターリエツも隣に座る。

「考え事かい？」

「そう。しばらくの間、黙っていてくれる？」

正直に云えば、この返答でスキターリエツがどこかに行くことを願った。だがスキターリエツは怒り出す様子も見せずに、いたって寛大に「いいよ」とうなずいた。奇妙な人物だ。ちらりと考えながら、中庭から回廊を見つめる形で両手を組み合わせて唇を当てた。

——まず、現在地の確認だ。

ヴォールズ

転移の魔道陣に刻まれていた言葉によれば、ここはルークス王国の都、サルワーティオーだ。傭兵集団『灰虎』の皆と共に訪れるはずだった最終目的地でもある。この地に潜入するため、キーラは『灰虎』に雇われたのだ。思考が沈む。それなのに、『灰虎』の団員でもないキーラが先に、この場所にたどり着いてしまうとは皮肉な展開である。

（あのあと、皆はどうするのかしら）

コーリヤやアーヴィング、キリルやセルゲイ、ヴォルフたちを思い浮かべた。

ああいう流れで船から逃亡したキーラを、『灰虎』の皆はどう感じただろう。最後に眼差しと眼差しがかち合った、金髪の青年をも

思い出す。驚きを浮かべていた瞳を思い出すと、なぜだか奇妙に心が騒ぐ。あなたの秘密は口外しない。せめてそう云えばよかったか。

（ではなくて、これからあたしはどうするのか、よ）

いまの状況を冷静に考える。キーラの希望は簡潔だ。マーネに戻る。だが簡単な願いであっても、現実に叶えるには、並大抵ではない労力が必要になる。船で幾日もかけたように、マーネとルークス王国は遠く隔たっているのだ。さらに。

キーラはちらりとスキターリエツに視線を向けた。にこにここちらを眺めている青年は、「なに？」と首をかしげる。訊ねて答えが得られるか。迷いながら口を開いた。

「ルークス王国には、結界がはりめぐらされている、と云っていたわね」

「そうだよ」

けろりと肯定された。つまりルークス王国にまつわる、魔道による強力な結界が張られている、と云う噂は真実なわけだ。だが魔道士として、疑問を提示したいところである。

「でもあなたたちは、転移の魔道で出入りしているようだけど？」

少なくとも、キーラの知る魔道では成り立たない仕組みである。結界とはいわば、窓も扉も備え付けられていない壁だ。魔道的だけではなく物理的に空間を遮断することは可能だが、融通のきくものではない。つまり本来の結界ならば、転移魔道による出入りはいきないのだ。

ああ、と、スキターリエツはうなずいた。

「便宜上、結界と呼びかけているけれど、実際はちがうものだからね」

「どういうこと？」

するとスキターリエツはにんまりと笑った。

「くわしい仕組みが知りたいなら、僕たちの仲間になってくれないとだめだよ」

「なら聞かなかったことにしてちょうだい」

即座に撤回すると、スキターリエツは残念そうに眉根を下げる。

「仲間にはなってくれないんだ？」

「あたりまえでしょう」

「どうしてあたりまえ？」

キーラが戸惑うくらい、スキターリエツは不意に真面目な表情を浮かべた。組み合わせていた両手から唇を浮かべる。その両手に大きな手のひらをかぶせて、スキターリエツはもう一度繰り返した。

「どうして、僕たちの仲間にならないことが、キーラにとってのあたりまえなんだい？」

「それは、」

ぐるぐると思考が回る。もちろんマーネに戻るためよ。そう答えてもよかったのだが、口に出せないでいる。なぜならそう云えば、相手は「転移魔道で戻してあげるよ」と告げることがわかったからだ。だから云えない。キーラの目的が、本当にマーネに戻ることであるならスキターリエツたちの仲間になることが、もっとも手早い

方法だというのに。

（――――、だからよ）

思考がかすかにささやいた。自分の心がつぶやいた、思いがけない内容に、力いっぱい動揺する。目を見開いて、ぐるぐる混乱していると、スキタリーエツが首をかしげて言葉を促した。でも口に出せない。だって、ああいう成り行きで逃げ出してきたのに――――。

ふ、と自分たちの距離の近さに気づいた。我に返って、ぱっとスキタリーエツの手を払う。ちよつと残念そうな表情を浮かべた青年を、キーラは力いっぱいにらんだ。

「とりあえず、あなたがいる限り、仲間になんかならないわ!」
「つれないなあ」

けろりとスキタリーエツは元の温和な表情に戻る。油断大敵、とキーラは自分に云い聞かせた。スキタリーエツ独特の雰囲気は呑まれるところだった。

詐欺に資格は必要ありません。(8)

「とりあえずどうする？」

安心できる距離に戻ったスキターリエツは、あっけらかんと訊ねてきた。なにを考えているのだろう。キーラは注意深く相手を見る。これまでの人生で不可解だと感じる人物とそれなりに出会ってきたが、スキターリエツの不可解さは群を抜いている。

なぜ、仲間にならないキーラを、これほどかまいつけるのか。

理由を訊いてみようかと考えた。だがキーラを紫衣の魔道士に押し上げている直感的資質が、満足する答えは得られない、とささやきかけている。問いかければスキターリエツは応えてくれるだろう、だがキーラには納得できない理由なのではないか。

しばらく沈黙して、やがてスキターリエツから中庭に、さらに遠くに眺められる街へと視線を移した。落ち着いて考えれば、なによりも優先すべきことがある。金だ。

「とりあえず働けそうなところを探すわ」

「へえ？」

うかつなことだが、身一つでエリアの手を取ったから、先立つものがないのだ。

ここは神殿だ。奉仕活動を代償に、寝場所を借りるという選択肢がある。だが、ここはスキターリエツたちが根城としている神殿でもある。仲間になることを拒絶したキーラが滞在するわけにはいかないだろう。いや、滞在「しないほうが」いい。

スキターリエツはくい、と口の端を持ち上げた。声をあげて笑っていないが、やはり楽しそうな表情ではある。

「やっぱり楽しいなあ、きみは。僕が、きみの腕輪を外させないとしても、そう云うかい？」
(なるほど)

スキターリエツに感じていた不可解さが、わずかに消えた。

同時に、部屋から強引に連れ出された理由がようやく腑に落ちた。

マティはキーラの腕輪を外そうとしてくれたが、彼の行動は明らかにおかしいのである。なぜ仲間でもないキーラにそこまで便宜を図ろうとするのか。アリアが世話になったからと云っていたが、仲間でもない紫衣の魔道士を、自分たちの領域内で解放するわけにはいかないだろう。あるいはマティには別の思惑があったのかもしれないが、そこまで推し量るつもりはない。

だからキーラは胸を張って、堂々と主張した。

「あたしをただの紫衣の魔道士だと思わないでちょうだい。将来の夢はカフェを開くことで、魔道士としての経験値より飲食店の店員としての経験値が高いんですからね」

ぱちぱちと目をまたたいて、スキターリエツは笑う。

心から楽しそうに、声をあげて笑うものだから、少々気が抜ける。ぐい、と、右手を取られた。なめらかな指が、腕輪をひと撫でする。たちまち水晶の腕輪は、あざやかな瑠璃の腕輪になった。目を疑って、呪文を行使することなく、幻影の魔道をかけられたのだと気づ

いた。キーラは愕然とスキターリエツを見つめた。呪文も行使することなく、魔道を行使する。これまでにそれを可能とした人物を、キーラは自分以外に一人しか見たことがない。すなわち魔道ギルドの長だ。

「あなたも、紫衣の魔道士なの？」

問いかけて、いや違う、とすぐに答えを得た。

紫衣の魔道士は、他の魔道士と違って、厳密に数を管理されている。世界で十三名しか与えられない位なのだ。十三人の名前と顔をすべてキーラは記憶している。その中に、スキターリエツは存在しない。だから紫衣の魔道士ではない。

けれど同等の能力がある。そんな存在、これまでに見たことがない。

スキターリエツは動じた様子もなく口を開く。

「僕はね、色なしの魔道士だよ」

「……スキターリエツ、あなた、そういえば何歳なの？」

求める答えは得られない。さきほど自分自身で捉えた感覚を思い出しながら、別の角度から質問を繰り返す。「えー?」、なぜかスキターリエツは恥ずかしがる。やっぱりよくわからない人、と思われるながら答えを待った。

「十三歳プラス十年だよ」

「……。……どうして二十三歳と答えられないの?」

いささか謎な答えを得て、キーラは眉を寄せる。

とにかく求めていた答えは得られた。十年前、ルークス王国が鎖国政策に踏み出したときに十三歳であるなら、魔道士ギルドがスキターリエツの存在を認識していてもおかしくない。

なのに、なぜだ。なぜこれほどの魔道を扱えるスキターリエツが色なしなのだ。彼が色なしでいられるのなら、キーラこそが、色なしでいなければならないだろうに。

(論点がずれたわね)

取り戻せない過去を思い出している場合でもなければ、もしもと云う仮定を頭の中で練りまわしている場合でもない。問題は、スキターリエツがなにもものであるのか、と云うことだ。

だがキーラは、ふ、と息を吐き出して、ベンチから立ち上がった。

「というわけだから、もう街に行くわね」

「え、もう？　僕の年齢をきくだけきいて、それで放置プレイするの？」

なんだか、訳の分からないことを云い出している。追いかけるように、慌てて立ち上がったスキターリエツから、ななめに視線をそらしキーラは憂いを込めて告げた。

「だって本当に、あなた、うさんくさい人なんだもの。くさいものには近寄るな。これって世渡りの基本じゃない」

「ひどっ。僕は毎日お風呂に入っているよ！」

「匂いって、人の好みがいちばん現れるところなのよねえ」

わざとずらした会話を互いに交わしながら、神殿の出口に向かう。

スキターリエツが先に立って歩き出した。キーラの行動に異議はないということか。腕輪を指で探る。いま、この腕輪がなければ。先を歩くスキターリエツを、細めた目で見ながらキーラは思った。

この人が行使する、力の波動がどれほどのものか、推し量ることができるのに。

詐欺に資格は必要ありません。(9)

(ああ)

朝の澄んだ空気が、心地よく肌に触れる。両手に桶を持って、共有の井戸に向かう。朝も早い時間だが、すでに井戸に人は並んでいた。にこにこ最後尾に並ぶと、見慣れ始めた顔がキーラに気づいて、挨拶をしてくる。

「あ、おはよ」

「……はよ」

「おはよう！」

たいてい、この時刻に井戸に並んでいるのは、炊事の手伝いをさせられている子供たちだ。ゆっくり眠りたいが、親に桶を渡されて水桶の補充にやってきた、という風情である。文句を云う子供はいない。眠たそうではあるが、おとなしく水を汲んでいく。

(ああ)

ほけーっと列を待っていると、比較的早くにキーラの番がやってきた。桶に水を汲み、すぐ近くにある建物の裏庭に向かう。でっぴりと大きな水甕に注ぎいれて、再び井戸に向かう。水甕がいっぱいになるまで井戸を往復する。それがキーラの朝の仕事だ。結構な重労働ではあるが、キーラが雇われるまで、これは視力の弱い老婦人の仕事だったのだ。あなたが来てくれて、本当に助かっているわ、と云われてキーラはますます早起きになった。

(労働って、いい……!)

じーんと胸を熱くさせる感情がある。あたりまえに働いて、ありがとうと云われる。そんな事実ほど、人を喜ばせるものがあるだろうか。いいや、ないに違いない。

キーラはいま、ルークス王国、都の西はずれにある食堂で働いている。足を棒にしてようやく見つけた勤務先だ。ローザと云う名前の優美な老婦人が一人で経営していた飲食店で、キーラが魔道士だと知っても、住み込みで雇ってくれた。

スキターリエツが身元保証人となってくれたおかげでもある。だから最初は警戒心が働いていたが、いまはすっかり労働の喜びに目覚めている。

水甕がいつぱいになるころには、ローザがすでに下ごしらえを進めている。野菜を洗い、果物を切る。食材に触ることは許されていないから、キーラは次に店内の掃除を進める。窓を開けて、床を箒で掃いて、テーブルを布巾で拭く。野草の花を摘んできて、ところどころに飾る。居心地の良い空間になった、と感じるころに、ローザに呼ばれる。

「おつかれさま。そろそろ朝食にしましょう」

飲食店の開店は、朝食を終えた後の時間だ。朝食を食べさせる屋台があちこちにあるため、あえて朝食の時間帯には開けないのだとローザは笑っていた。ここはお茶とお菓子と軽食を楽しむ店なのだと。初めて聞いた時、キーラの胸がどくんと高鳴った。それはまさしく、キーラが将来開きたいと思っている理想のカフェなのだ。

布巾を裏庭に干して、ローザがにこにこ待つテーブルに向かう。

近所のパン屋から届けられる焼きたてのパンに、野菜サラダ、卵料理、と云った朝食がキーラを待っている。手を組み合わせると、ローザも同様に、食前の祈りを唱えた。ふわりと紅茶の匂いが漂う。はぐ、と、ちぎったパンを口に入れて、じーんと感動した。外がさくさく、内はふわふわのパン生地に、溶けたバターが豊かにからむくすくす、とローザが笑う。

「本当に美味しそうに食べるわねえ、あなた」

「本当に美味しいからそうなるんですよ」

食事の間、二人の間に、ほとんど会話は無い。

だからと云って気づまりということとはなかった。会話を続けなければならぬ、と脅迫めいた空気はなく、ただ、好きなように過ごせばいい、と云う空気がある。それはローザから漂っているもので、だからこそ、この店にお客は来るのだろうとキーラは感じた。

「今日のお菓子はなんですか？」

「ペルシックをたくさん持ってきていただいたから。この時期のペルシックはそのままいただくほうがよいのだけど、やっぱりヴァレーニエにしたのよ。面白がっていたかと思って。ああ、ヴァレーニエというのはね、果物を砂糖で煮たものよ」

「へえ、果物なんてそのまま食べるのがおいしいのに」

「あらいやだ。ルークスの人間を泣かせるようなことを云うものじやなくてよ。あなただって果物を乗せたタルトを食べるでしょう。それと同じようなものよ？」

「そうですかねえ。やっぱり微妙に違う気がする」

「じゃあ、食べてごらんなさい。ルークスの人間が、紅茶を飲むたびに必要とする、その理由がよくわかるから」

はあ、とキーラはあいまいに笑った。こういうとき、対応にすご

く困る。

スキターリエツはローザに対し、キーラがルークスの外から来た人間だとは云わなかった。だが侮れない老婦人は、それとなく察しているようで、ことあるごとにルークスの常識を教えてくれる。お客に対応しているときも、さりげなく手助けしてくれる。

「さ、朝食を食べ終わったらお仕事よ。今日も一日、がんばりましょう？」

「はい」

だがキーラの困惑など、ローザは受け付けない。さらりと手助けした後は、さらりと自分の生活を守る。だからキーラは今日も、ちゃんと働くことができるのだ。

詐欺に資格は必要ありません。(10)

自分が置かれている現状に対して、どう考えているのかと問われたら、キーラは少し考えて応えるだろう。とてもうれしくてありがたい状況だ、と。

ここならキーラは本当に、ただの娘でいられる。魔道士であることは隠していないが、キーラを魔道士として、ましてや紫衣の魔道士として見る者はいない。将来カフェを開きたいと願っている、ちよっと奇妙な娘だと苦笑交じりに見てもらえる。

欠点があるとしたら、ここがマーネではないことか。ここが太陽の光と海の匂いに彩られた、あの陽気な都市ではない事実が、不満と云えば不満だ。だが気になるほどではない。このまま働き続けてもいいかなと思う程度には、ルークスでの生活を気に入っていた。

だが、そのままではいいはずがない、と、よくわかっていた。

「おやすみなさい、ローザ」

「はい、おやすみなさい。ゆっくり眠るのよ」

一日の仕事を終え、就眠のあいさつをローザと交わし、とたとたとキーラは屋根裏の部屋に向かっていった。入浴させてもらったから、髪がまだ濡れている。与えられた部屋の扉を開いて、ちいさな室内に入れば、窓から月の光が差し込んでいた。おかげでずいぶん、明るい。

(ろうそくなんて、いらなかったかしら)

でも雲に隠れてしまったら、たちまち暗くなるのだし。キーラはちょっと迷って、ろうそくを床に置いた。

この部屋はローザの子供が幼いころに過ごしていた部屋だ。おかげで家具がそろっている。ちょっと小さめの寝台に、学習するための机、さまざまなジャンルの本が並んだ本棚、衣装箱。ローザの子供は勉強家だったらしく、本棚にはなんと世界地図もあった。

窓を開ければ、冷たい夜風が入り込んできた。アダマンテウス大陸の北方に位置するルークスは、マーネと違って昼でもそんなに暑くない。だから夜は、本当に気温が下がる。とはいえ、風呂上がりには冷たい空気は気持ちいいものだ。

そうしてキーラは、今日も世界地図を、学習机に広げた。

注目するのは、ルークスを描いている付近だ。ルークスはきれいな楕円状の国で、北、東、西、の三方を海に囲まれている。南に他国との国境がある。だがいずれもいまは出入りできない。

（つまりルークスにはりめぐらされている結界とやらは、海と陸、両方に効果があるのね）

もう一度、キーラは断言する。魔道的に考えるなら、そのような結界は存在しない。

あわせてスキターリエツが告げた言葉が、キーラに閃きを与えた。

『便宜上、結界と呼びかけているけれど、実際はちがうものだからね』

あのかきはさらりと聞き流してしまったが、よく考えるべき言葉

だった。そのとき、キーラが下した判断が間違いだと教えてくれる言葉だったのだから。

つまり魔道による結界はルークスのまわりには「存在しない」。噂は真実ではなかった。

だから魔道を封じられたままでも、キーラはルークスから出て行く。ただしどのような方法で、ルークスが他国人の入国を拒んでいるのか、わかりさえすれば、だ。

（問題は、どんな方法で拒んでいるか、よね）

キーラは地図を見つめたまま、腕を組んで、むむむ、と唇をとがらせる。

普通に考えるならば、兵士を国境に配置する方法だ。人件費はかかるが、それなりに有効だ。だが徹底できないし、なにより魔道による結界を張り巡らしている、と云う噂が出てくるはずがない。魔道を用いているとしか思えない要素があるからこそ、そのような噂が生まれたに違いなかった。

———そのような要素に、心当たりが、ある。

魔道士よりもっと自然に近い、不思議の力を行使できる存在に、助力を求めれば良いのだ。土地の条件を考慮したら、彼らが住んでいる可能性があるとキーラは気づいた。

精霊、と一般的に呼ばれている存在である。

普通の人々は「精霊」と呼ばれる存在に対し、勘違いをしている。

自然の力が凝り集まって意志を持った存在を精霊だと考えているのだ。だが魔道士たちは、精霊と呼ばれる存在が、人間とは異なる進化を遂げた「生き物」であると知っている。けれど知識としてまだ広がっていない。精霊たちが人間と隔てて暮らすことを望んでいるからだ。

だが精霊たちが、その要望を違えて、スキターリエツたちに力を貸しているのならば？

（どうするの、あたし）

自分に問いかけて、同時に、キーラは金髪の優美な青年を思い出している。

精霊たちを動かす方法など、キーラは知らない。スキターリエツたちは知っているようだが、キーラには見当もつかない。つまりキーラはルークスを出ていくこともできなければ、傭兵集団『灰虎』の皆をこの地に潜入させることもできないということだ。

——傭兵集団『灰虎』の傭兵たちは、きっと、ルークスにやってくるだろう。

キーラが理由だとは思わない。思うはずがない。そもそも彼らには王子アレクセイを騙る理由があるのだ。だからキーラが逃亡し潜入できる可能性が減ったとみなしても、ルークスにやってくるに違いない。

そうしてキーラには、まだ依頼を遂行する義務がある。『灰虎』から逃げ出したため、依頼を放棄したとみなされているだろう（あるいは裏切ったと思われるかもしれない）が、互いの話し合いの結果、正式に依頼を廃棄したわけではない。少なくとも『灰虎』

は了承していなかった。だからキーラは、依頼を遂行する方法を考え続けなければならないと感じていた。

(でも、)

窓から見ることができる、静かで平和な夜を眺めて、キーラはつぶやいた。

「ここはこんなにも、穏やかで豊かな、国なのよね」

ルークスで働き始めてから、胸の中で響いている感想だ。いまのところ鎖国を行っているルークス国内は、とても穏やかで豊かだと感じる。こんな国に最強の傭兵集団『灰虎』が潜入する意味はないのではないか。ローザやほかの人々の笑顔を見るたびに、強くそう感じている。あるいはキーラの知らない事実があるのだろうか。

くしゅん、とくしゃみが出る。夜風にあたり過ぎた。小さく自嘲の息を吐いて、キーラは窓を閉めた。

(1)

物云ぬ友人を抱き上げ、甲板に出たとき、仲間たちが息を呑む気配を感じた。だが口に出してなにかを云う者はいない。

だからミハイルは、あえて意識をそちらに向けずに、まっすぐに小舟に向かう。金に染めたばかりの髪が、海風に乱される。見慣れぬ前髪が少しわずらわしい。

だが表情には出さずに、布にくるんだ友人を小舟に降ろした。頭部に手を乗せ、まぶたをとじる。短く祈りをささげて、はなれると、いつもより肅然とした仲間たちが歩み寄り、小舟を海に降ろした。同時に火がつけられ、小舟はゆっくりと彼方に流されていく。

———こうして仲間を弔うのは、これが初めてじゃない。

なんといつてもミハイルは傭兵なのだ。命を戦場でやり取りする稼業なのだから、仲間の喪失は日常の一部である。感情が麻痺するように、葬送にも慣れていく。

ただ、本日弔ったのは、幼いころより共に育った友人だった。

ゆっくりと小舟から煙が立ち上っていく。もしも魂と云うものがあるなら。それぞれ黙祷している仲間たちの中で、一人、ミハイルはまっすぐに煙を見つめて心の中でつぶやく。

(もしも魂と云うものがあるなら、いま、あいつはどこに向かおうとしているんだろうな)

ルークス王国では、故人は死んでもこの世に留まると考えるらしい。

ならば肉体と云う枷から解き放たれた友人は、まっすぐに故郷に向かうのだろうか。亡くなる直前まで王子として案じ、一人の青年として愛し続けた故郷へ。

「ミハイル」

物思いにふけていると、黒髪黒瞳のセルゲイが険しい眼差しで見据えてきた。表情だけで何を云い出そうとしているのか、よくわかる。ふ、と微笑してミハイルは口を開いた。

「悪いがセルゲイ。今後、おれのことはアレクセイと呼んでくれ」
「あいつは死んだ!」

叩きつけるような怒号を放ったセルゲイは、ぐいと乱暴に襟元をつかんできた。揺らがない眼差しで見つめ返し、ぽんとその手に片手を乗せる。

「あいつが云い残した言葉を覚えているだろ」

「馬鹿げたことだ。いくら本人の頼みでも、王族を騙るなど許されるはずもない」

「ミハイル」

さらに口を挟んできたのは、傭兵集団『灰虎』の団長であるアーヴィングだ。いつも朗らかに笑っている顔に厳しい表情を浮かべている。

「セルゲイの云う通りだ。おれたちはルークス王国国王からの依頼を果たせなかった。ルークス王子を護ることはできなかったんだ。

粛々とその事実を受け止めるしかないだろう」

「あいにくですが、団長。おれはすでに依頼を受けました」

「なに？」

いつまでも襟元をつかんでいるセルゲイの手を放して、アーヴィングに向かい合う。

「死にゆくルークス王子より。自らに擬態して、故国を解放せよ、と」

「馬鹿野郎！」

びりびりとあたりの空気が震える大音声だった。反射的に身をすくむ仲間の姿が見えたが、ミハイルはピクリとも動揺せずに、アーヴィングを見据えた。この反応は予測していた。『灰虎』から放り出されることも覚悟している。それでもミハイルは、王子アレクセイの依頼を最後まで遂行するつもりだった。もう、決めたことなのだ。

「ミハイル」

誰もが息を吞んで見守るなか、ずっと沈黙していたチーグルが口を開く。老いたとはいえ、いまだ多くの戦士から畏敬を受ける存在の呼びかけに、ゆっくりと視線を移す。

「もう、決めてしまったのかの？」

「はい」

「わしらとは袂を分かつつもりか？」

淡々となされた問いかけにも、はっきりとうなずく。仲間たちがざわめいていたが、ミハイルはチーグルから視線を外さなかった。

まっすぐに注ぎ込まれる、虎のような猛々しい眼差しが、ふっとゆるんだのは、どのくらいの時間が経過してからだろうか。

「ならば、好きにするがよからうよ」

「チーグル！」

セルゲイが慌てたように呼びかけ、ざわめきがいっそう大きくなる。ミハイルは表情をゆるめ、静かに頭を下げる。そのときだった。チーグルが口を開いてもずっとミハイルを睨んでいたアーヴィングが腰に佩いている大剣をすらりと抜いた。アーヴィングの殺意はまっすぐにミハイルに向かっていく。

「あいにく。団長としてはかつての団員から詐欺師を生み出すわけにはいかないんでな。決意を翻さないというなら、その首をいただく」

「団長！」

「剣を抜け、ミハイル。おまえの覚悟、おれに見せてみる」

ひややかに見据えてくる眼差しを受け止め、ミハイルも剣を抜き払った。冷や汗がこめかみを流れていく。アーヴィングはただ、気風の良さで団長になった男ではない。チーグルをはじめとする傭兵たちに、剣の腕前を認められたからこそ、団長の座に就いた男だ。つまりミハイルより圧倒的に強い。このまま本当に命を失う可能性を強く意識した。

だが、それでも約束したのだから。

（アレクセイ）

剣を構え、動き始めたアーヴィングの足さばきを感じ取りながら、

心の中でつぶやく。

（だからおれは、おまえのことが大嫌いだったよ）

生きていようが死んでいようが、容赦なくミハイルを厄介事に引きずり込むのだから。

(2)

目覚めたとき、なによりも先にアレクセイは、いまが現実であることを確かめた。ほーっと息を吐き、ぐったりと重い動きで身体を起こす。疲れをとるための睡眠であるはずなのに、眠りに就く前より疲れているのはなぜだ。頭を振って、寝台から降りる。

最悪の悪夢を見ていた。あれは『アレクセイ』を失ったばかりのころの夢だ。あれからどのような展開になったかなどと、アレクセイはもう思い出したくもない。かつてないほど死に近づいたと思った瞬間なのだ。

もう眠りは完全に去ってしまった。再び眠る気にもなれない以上、このままにいるよりも鍛錬したほうがマシである。枕元に置いていた剣を取り上げて、アレクセイは部屋を出た。すでに夜明けを迎えているためか、ほんのりと明るい。ひたひたと歩いて甲板に出ると、この船では珍しい少女の姿があった。わずかに目を見開き、アレクセイはひそかに苦笑を浮かべた。

そんなことをしなくてもいいと云ったのに、紫衣の魔道士は甲板磨きに精を出している。

(たぶん、なにかをしないと落ち着かないんだろうな)

貧乏性、と心の中でつぶやく。魔道士ギルドの長に紹介された最高位の魔道士どのは年齢もさることながら、その望みでアレクセイを驚かせた。まさか将来はカフェを開きたいとは。紫衣の魔道士と云えば、努力だけでなれるものではない。何らかの事情があることは察していたが、それでも宝の持ち腐れだ、と感じる。世の中には

紫衣の魔道士になりたくてもなれない人間は山のようにいるだろうに。そんなことを考えていると、意外にさとい少女がぱっと振り向いてきた。驚いたように目を見開いて、笑いかけてくる。

「おはよう、アレクセイ王子。ずいぶん早いね」

「おはようございます、キーラ。アリョーシャで構わないと申し上げたはずですが？」

（ああ、口がもつれる）

アレクセイの口調を思い出しながら挨拶を返せば、キーラはうへえ、と眉をしかめた。

「あいにく、王子さまを愛称で呼びかける趣味はございません。それよりどうしたの、今朝はずいぶん憔悴しているのね？」

さらりとなされた問いかけに、アレクセイは正直、舌を巻く。にこやかな表情で隠したつもりだったが、気づいていたのか。とっさに誤魔化すことも考えたが、じっと見つめてくる濃藍色の瞳に気づかされた。誤魔化しようがない。

「ええ。ちよつと夢見が悪かったもので」

ただし大げさに顔を曇らせて打ち明けることにした。するとよく気が回るキーラは、余計なことを聞いたのか、と後悔したように眉をひそめた。かと思えば、すぐにいつも通りの表情を浮かべる。わかりやすい。思わず本気で苦笑してしまいそうになりながら、片手に持ったままの剣を示す。

「ですから鍛錬に訪れたところです。キーラは甲板磨きですか？」
「ええ、そう。でも早くに目が覚めちゃって。キリルたちが来るの

を待っているところ」

なめらかに答えて、ちょっと困惑したようにキーラはうつむく。マーネで感じていたような、とげとげしい気配はもう彼女から感じ取ることはない。初めてこの船で過ごした夜、セルゲイとの話を立ち聞きしたときから、キーラはアレクセイに好意的になっていた。

（おれとしては、当然のことを云っただけにすぎないんだけどな）

だがキーラには少なくとも態度を変えるだけの効果があったらしい。今度こみあげてきた苦笑には、なんだかくすぐったい気配が含まれていた。最高位の魔道士、キーラ・エーリンはその位にふさわしく鍛錬の日々を過ごしてきただろうに、示す反応はまるきり普通の女の子だ。マーネの守護者たちは同年代であっても、もう少し隙のない反応だったが。

「甲板磨きの仕事はいかがですか。大変でしょう？」

話題を向けられたキーラは、安心したように表情をゆるめる。

「うん、たしかにね。でもキリルの教え方がうまいし、楽しくやっているところ。ねえ、王子さまも甲板磨き、したの？」

「……そうですね。コーリヤ爺はそういうところで分け隔てをしませんから」

十年前、「アレクセイ」とセルゲイの三人で競い合いながらみがいていたときを思い出す。

ルークス国王から王子アレクセイを預けられたコーリヤは、最悪の事態、国に戻れない事態を想定して王子を育てたのだ。すなわち特別扱いせずに、徹底的に鍛えた。おかげで王子アレクセイは一筋

ではないかない人物に育った。一筋ではないかない、大馬鹿者に。

漂い始めた思考を追求せずに、アレクセイはじっと見つめてくるキーラに思い出を話す。

「最初は大変でした。王宮のルールと傭兵団のルールはかなり違いますからね。アーヴィングの厳しいしごきに耐えかねて、泣き出したことも一度や二度ではありません」

泣き出したアレクセイを慰める役がセルゲイで、呆れかえる役がミハイルだった。

「へえ、王子さまにもそういう時代があったのね。とても意外」

「意外って、どういうイメージをわたしに抱いてらっしゃるんです？」

「王子さまなら、意地でもつらいところを隠そうとするんじゃないかと思ったのよ」

何気なく云われた言葉に、アレクセイはあやうく顔色を変えるところだった。

それはまさしく、ミハイルの特徴だ。まだ『アレクセイ』に擬態しきれていなかったのか、知らず知らずのうちに自分自身が現れていたのか。アレクセイは口端を持ち上げた。誤魔化そう。目元も和ませれば、穏やかに見えることを、いまの彼は知っている。

「昔の話ですからね。おかげさまでコーリヤ爺たちには鍛えられました」

「なるほどね。で、その結果、悪夢を見たら鍛錬に逃げ込むひとになったわけだ」

ええ、と答えて、アレクセイはそつとキーラの様子をうかがう。
なにかを感じていた様子はない。だから安心していいはずなのだが、
このとき、どういう次第なのか、計算間違いをしている気持になっ
た。

キーラが自分たちの依頼を拒絶しまくっていたことは記憶に新しい。
だから扱いを仲間ではなく、客人にするとアーヴィングたちと
決めたのだが、それは間違いだっただろうか。

なぜならキーラは想定以上に鋭い。アレクセイが、——ミハ
イルが偽物であると気づく日が来るかもしれない。そのとき、秘密
を隠されていた少女がどう反応するか。少なくとも友好的な反応を
示すとは思えなくて、キーラから視線を外して息を吐いた。

(3)

最高位の魔道士、紫衣の魔道士を雇うと決めたのは、当初の意思を翻してミハイルの決意に協力することを決めたアーヴィングである。理由は明白だ。自分たちを過信していたつもりはないが、王子アレクセイを青衣の魔道士によって失ったためだ。今後彼らと闘う事態を考慮するなら、青衣と同等以上の魔道士がいたほうがいいと主張した。

正直に云えば、アレクセイは気が進まなかった。秘密を知る者は少ないほうが望ましいし、そもそも雇用する魔道士が信頼できるとは限らない。ならば、とチーグルが閃いた人物がキーラだったが、自分より年下の少女と聞いて尻込みした。か弱い少女は共に戦う相手としては気づまりだ。そんな考えを変えたのは、マーネでの出来事が原因である。

そのときのアレクセイは、すでにキーラを雇うつもりをなくしていた。仲間たちにはしかけられ、毎日彼女のもとを訪れはしたが、積極的になれなかった。だから予想以上に依頼をいやがるキーラの事情を訊いたのは、それなりの日数が経過してからである。

聞いたことで少女への印象が少し変わった。魔道士と云う存在の弱点をよく知っていると感じた。だが同時に、軽侮の念が生まれたことは否定できない。どんな事情があるにしろ、魔道士であることがいやならば紫衣を返上したらいいのだ。キーラは中途半端に思えた。カフェを開くつもりだ、と云いながら、魔道士としての自分を捨て去らない。

ただ、襲撃してきた敵に対する反応の素早さは、好ましく思えた。

すっかり普通の少女としてとらえていたが、さすがは紫衣の魔道士だと感じさせた。少々、見込みの甘さが目立ったが、それでもマ―ネの守護者たちが閃きもしなかった追跡魔道をかけた点は評価できる。これならば足手まといになることはない、と、キ―ラを受け入れてもいい気持ちになっていた。だから最も効率的な方法で彼女を雇うことに決めた。

けれど軽侮の念は、やはり消えない。

ギルドの長から「要請を受けた」キ―ラは、明らかに落胆しながら依頼を引き受けた。断りきれない方法を用いながら、アレクセイは軽く苛立った記憶がある。いやならば拒めばいい。本当にカフェを開きたいというならば、飲食店で働きたいというならば、まだ打てる方法がある。だが、キ―ラはやはりその方法を使わない。魔道士としての自分を捨て去らないのだ。苛立つアレクセイに思いがけないことを云ったのは船に戻ったセルゲイだ。

「彼女はアリョーシャに似ているな」

停泊している甲板で、共に潮風に身をさらしながらの言葉である。どこが、と、アレクセイが訊ねると、セルゲイはやるせないような笑みを浮かべた。

「魔道士としての自分を捨て去れないところが、だ。傭兵であろうとしながら、王子としての自分を捨て去れなかったアリョーシャに似ているだろう」

「あいつは本当に傭兵になろうとしていたか？」

生前の王子アレクセイを思い出しながら疑問を提示したら、セル

ゲイは苦く笑う。

「おまえの目には本気に映らなかっただろうな。おまえはこうと決めたら、決して後を顧みない。だからアリョーシャの頼みにもうなずいて、本気で実行しようとするんだろが」

「それが悪いと云いたげだな」

軽く突っかかると、セルゲイは珍しく笑って何も答えなかった。話題はこれからの行動に移り、キーラに触れることはなかったが、奇妙な印象強さでセルゲイの言葉が残った。

キーラは王子アレクセイに似ている。

云われてみたら、そうか、と納得していた。だからアレクセイはキーラに対して苛立つのか。いま覚える軽侮の念は、たしかに王子アレクセイに抱いたものと同じものだ。そうして嫌な予感を覚えた。ならばキーラは、アレクセイを振り回していくのかもしれない。

魔道士の勘には及ばないが、傭兵の勘とて、あたるのだ。

(4)

「殿下」

しばらくキーラと会話を交わしていると、セルゲイが甲板に現れた。キリルをはじめとする新人たちを引き連れている。偶然、かちあったのだろう。おそらく部屋にいないアレクセイを探して甲板に出てきたのだ。もうそんな時間か。アレクセイは毎朝、アーヴィングたちとミーティングを重ねている。だから迎えに来たのだ。

アレクセイに協力すると決めて以来、忠実な従者の役を演じてくれている友人は、「おはよう」とあいさつしてきたキーラに視線を移した。無表情の下で困惑していると、長年の付き合いがあるアレクセイにはわかる。女性を苦手とするにも限度があるだろう。苦笑を表に出さないよう気をつけながら、ぽんと肩を叩いて船室に向かう。まもなく背後から「てえええいっ」と気合の入ったキーラの声が聴こえてきて、くすりと笑ってしまった。

「ミハイル、どうした？」

少女がいないことで気が抜けたのか、セルゲイは本来の口調で話しかけてくる。ちらりと視線を向けて、背後を示した。

「魔道士のお嬢さんさ。元気だな、と思って」

ああ、とセルゲイはうなずいて、背後をかえりみる。

「キリルともずいぶんうちとけているようだ。だから相談されたぞ、本当におまえのことを話さなくていいのか、と」

「……そうだな」

さきほど抱いた感覚を思い出して、あいまいにアレクセイは応えた。すると意外そうにセルゲイが眉を上げる。基本的にアレクセイはあいまいさを嫌う。よく知るセルゲイは、口端をもちあげて、からかうような眼差しで告げた。

「おまえでも迷うことはあるんだな。必要ないと断言すると思ってたぞ」

「そもそも彼女に対して、不要な温情を向けた自覚があるんでね」
「不要な温情か」

苦笑を交えたセルゲイに、「そうさ」と返して、アレクセイは続ける。

「彼女は魔道士である自分から逃れたがっている。だから依頼に積極的じゃない。そんな人間だから深く立ち入らせまいと秘密を話さない。温情以外のなものでもないだろう」

「たしかにな。だから意外でもある。彼女を巻き込むことを選びながら、どうしてそんな甘さを残している？」

とっさに返す言葉が見当たらなかった。アレクセイが沈黙していると、セルゲイは目を細めて視つめてくる。いつものおまえらしくないぞ、と、告げる眼差しだ。たしかにそうだ。手段を択ばない方法で引きずり込んだのだから、容赦しないで秘密を話してしまえばいい。なのはどうして自分はキーラを客人扱いし続けるのか。

流されやすい少女だからだろうか。意志が弱いわけではなく、ただ、周囲の思惑を読み取りすぎる少女だからこそ、第一級の秘密を打ち明ける人間として不適格とみなしているのか。いや、と、自分

ですぐに答える。たしかに軽侮の念を向けている。だがそこまでキーラを信用できないと思っっているわけではない。

ではなぜだというのだろう。

応えられないアレクセイに対し、どう考えたのか。セルゲイは「まあいい」とつぶやく。落ち着かない気持ちになった。これはあいまいに片付けていいことではない。不自然に目をそらすと、セルゲイは無表情にとんでもないことを云った。

「それだけおまえが、あのお嬢さんを気に入っているということだろう」

「気に入っている？」

目をみはって、アレクセイは訊き返した。意外そうな響きだったからか、セルゲイが眉を上げる。

「そうだろう？ だからお前は彼女に対して甘くなるんじゃないか？」

「それはちがう」

きっぱりと云い放って、アレクセイは少し考え込んだ。

キーラに対して特定の感情を向けているつもりはない。ただ、ルクス王国に潜入する助けになることを期待している。求めている。むしろ温情を向けた人物だからこそ、個人的な感情を向けるべきではないとアレクセイは考えていた。

だがそれは自信過剰な考えだったろうか。相手がどんな人物でも、共に生活することで育つ感情はあるのだ。かつて苛立ちを覚えた王子アレクセイに対し、いつのまにか友情が育っていたように。

キーラに対しても同じことが云えるのではないだろうか。

それでもキーラを気に入っているという言葉には違和感を覚える。

気が付けばセルゲイがじっと見つめている。気づいたアレクセイは軽く肩をすくめておくことにした。いまはキーラを気に入っているわけじゃない、ただ……。その先の言葉を探してあきらめる。いずれ自分から解放する人間だ。考えすぎる必要はないとアレクセイは結論付けて、会議室の扉を開いた。

(5)

もともと王族仕様の船だったためか、チーグルの船は帆船にしては広い造りになっている。アレクセイが訪れた会議室も、『灰虎』幹部が全員入室できる広さだ。今日、会議室にいるのはアーヴィングとチーグル、それからまだキーラに紹介していない幹部たちだ。視線を集めたものだから、アレクセイはちらっと笑った。

「ずいぶんお待たせしたようですね？」

ことさら王子さま風味を前面に押し出せば、全員がそろって苦笑する。

「おまえの『王子さま』はどうしてそんなに胡散臭いんだろうな？」

「アリョーシャと同じ口調なのになあ？」

「しかたないですよ。おれ自身があいつを胡散臭く感じていたから、自然の成り行きです」

ちがうだろ！ と云うツツコミを軽く流しながら、いつもの席につく。にこにこ微笑んだチーグルが、ちよっと身を乗り出してきた。

「今朝は珍しく寝坊したのかのう。疲れておるのか？」

「いえ。今日は早起きだったんですよ」

「ほう？」

不思議そうに首をかしげたチーグルに、扉付近に立っていたセルゲイが口をはさむ。

「こいつ、甲板にいたんですよ。剣を持ったまま、魔道士と楽しみに話していました」

余計なことを云う。ちよつと視線をさまよわせると、にこにこ笑顔のまま、きらりとチーグルの瞳が光った。

チーグルとギルドの長は同郷出身の知人だ。ゆえにキーラを幼いころから知っており、孫娘のように想っていたのだという。ちなみに孫娘のように「かわいがっていた」とならないのは、ひとえに陰から見守ることに徹していたためだ。チーグルはときどき謎の行動をとる。堂々とかわいがればいいじゃないか、とアレクセイは感じたものだが、チーグルにもいろいろ思うところがあるようだ。

「ほう？」

「たいしたことは話していませんよ。ヴォルフの料理はなぜあんなに美味しいのか、とかそういうことです。レシピを知りたがっていましたが、あいつの料理にレシピは存在しないと伝えたと、えらく感心していました」

問われる前にすらすると答えると、へにやりとチーグルがますます笑み崩れた。

「そうかそうか。あの娘はカフェ経営を希望しておるからのう。そのときのために多くの情報を集めておきたいのじゃな。ついでだから他のうまい店にも連れて行きたいのう」

莫迦だ。すっかり孫娘にめろめろの祖父の図に、そつと皆が視線を逸らした。戦場において、あれだけ勇壮な男がここまで変わるとは。眼差しだけで語り合う男たちのツブヤキは同じである。人間って、変わる生き物なんだな。

「あー、まあなんだ。コーリャ爺さん、そのあたりは後で検討していただくとして、とりあえずヘルムートからのアウイス便が届いた」

アーヴィングが微妙に言葉を濁しつつそう云えば、たちまち皆の表情が引き締まった。

ヘルムートとは傭兵集団『灰虎』の副団長の名前である。伶俐なまなざしが印象的な男で、いまは情報を集めながら陸ルートを進む団員たちを率いている。

「向こうは順調だそうだ。ルークスに関する情報も目立ったものはない。ただな、こう書いていた。ルークスの連中は鎖国政策で自給自足が成り立っているのだろうか、と」

アレクセイは目を見開いた。

他の幹部が戸惑いながら顔を合わせる。いまさらの疑問だと感じたのだろう。

ルークス王国が鎖国政策を始めて、もう十年経過している。自給自足体制が整っていないければ、自滅するだけだ。そのような政策を実施するはずがない。だが、あのヘルムートがあえて告げた理由に見当をつけて、アレクセイは口を開いた。

「つまり完璧な鎖国をしていないと副団長はおっしゃりたいのですね」

はっと皆が息を呑むなか、アーヴィングがにやりと満足そうに笑う。

「察しがいいな、その通りだ。ここには明言していないが、ヘルムートのやつはどうやらルークスに潜入する方法にあたりをつけたに違いないぜ」

「そもそもルークス王国が鎖国政策に踏み切ったのは急だったうえに、段階をふんでいないからのう。それまでの流通を顧みれば、もっと大きな混乱が生じてもおかしくない。だが現実にはそれほど大きな混乱は起きていない。ヘルムートはその理由を考えたのじゃない」「つまり国家間ではあらかじめ、鎖国を受容する理由があったということですか」

セルゲイが慎重な口調で告げると、チーグルは「かもしれないということじゃ」と慎重に答えた。チーグルの視線がこちらにむかう。察したアレクセイは苦笑を閃かせた。

「わかっていますよ。そのあたりを探るのはおれの管轄ですね」「もう引き返せなくなる。それでもよいのかのう？」

ルークス王国とほかの国々の間に、鎖国を認める理由があったと仮定する。

ならば理由を探り、打開する手段を持つ人物は、十年前にルークスから逃れた王子アレクセイに他ならない。つまりアレクセイが他の国々に「王子」として、正確には次期国王として接触しなければならぬということだ。各国の狸の前で王子を騙るのだ。たしかに引き返せなくなるだろう。決意を撤回するならいまのうちだとチーグルは告げているのだ。

「必要ありませんよ、チーグル」

だが、アレクセイは闊達に笑って返した。

「おれはもう決めている。退路など必要ありません。どんな状況でも考え抜いて、全力で前に進む。そもそも一度引き受けた依頼は必ず遂行しろ。そう教えてくれたのはあなたじゃないですか」

ふ、と、チーグルは微笑んだ。満足そうにも寂しそうにも見える不思議な笑みだ。

そのままなにも云わないチーグルの隣で、アーヴィングはわずかに顔を伏せた。自らにひと区切りつけるようにひと息ついて、アレクセイをまっすぐに見据える。

「ならばまずは隣国パストウスに上陸するか。海路を変更する必要があるな」

はい、と、アレクセイがうなずいたところで扉があわただしく叩かれた。同時に、扉の外からキリルの焦ったような声が聞こえる。なにごとか、あったのか。セルゲイが素早く動いて、扉を開けた。転がり込んできたキリルが、不審な動きを見せる船が近づいてきていると報告する。たちまち緊張が走り、アレクセイも席を立った。

(6)

王子アレクセイから受けた依頼は、自らに擬態し故国を解放せよ、だ。

だがもうひとつ、頼まれたことがある。紋章だ。王子アレクセイが国を出たときから肌身離さず持ち続けていたルークス王国の紋章をやつらの手から護ってくれ、と云われた。

なぜ、と問う暇はなかった。瀕死の状態でありながら、必死の気迫でアレクセイに頼み込んだ後、王子アレクセイは亡くなったのだから。ただ、そのときにもなぜ紋章を護れというのか、疑問に感じはした。だから魔道士ギルドを訪れた際、ギルド長に依頼して鑑定してもらったのだが、特筆すべき点はないという結果だった。ただの琥珀の塊であるという鑑定結果を得て、アレクセイは首をひねった。

ならばなぜ、王子アレクセイはこの紋章を護れと云ったのだろう。そしてもうひとつ、なぜ、敵はこの紋章を欲しがるのだろう。

接近してきた船の調査を終えて以来、アレクセイは自室でずっと考え続けている。ただ、あまりにも情報が少ないから、一向に前に進まない不毛な考えだと感じていた。ついに舌打ちしてアレクセイは椅子から立ち上がった。心の中には亡き友人への文句が渦巻いている。

(わたしに擬態しろとは、よくも簡単に云ったものだ)

同じ年齢、よく似た身体つきをしていたとはいえ、顔のつくりが違う。瞳の色は同じだが、髪の色は違う。そのような人間によくも

擬態を頼む気になれたな、と亡き友人の心理に思いをはせていると、扉が叩かれ、セルゲイが入室してきた。振り返り、軽く眉を上げる。

「仏頂面だな、どうした？」

「仏頂面にもなる。おまえ、フェッルムの島の調査に加わらないでなにをしているんだ」

「王子とはこまごまとした雑事に煩わされないものさ」

うそぶいてみせると、セルゲイの眼差しが陰をはらんだ。

ふ、と笑って「冗談さ」と告げる。テーブルの上に置いた紋章を取り上げ、セルゲイに向かって投げた。ぱしっと危うげなく受け取ったセルゲイは、訝しげに紋章を見下ろす。

「なあ。変だと思わないか。あいつらはその紋章を狙い、アリョーシャのやつもこれを護れと云って亡くなった。ならこの紋章になんがあるんだと思う？」

「それを考えていたのか。ギルドの長はなんにもないといっていただろう」

「なんにもない紋章を狙ったり、護れと云うのか？　納得いかないだろう」

「ではもう一度、魔道士に訊いてみたらどうだ」

云いながらセルゲイは紋章を放り投げる。受け取りながら、アレクセイは眉を寄せた。

「キーラに？」

「……いまならもうひとり魔道士もいる。だが紫衣の魔道士に訊ねるのが一番だろうな」

「さて、どうかな」

受け取った紋章を首から下げながら、アレクセイはあいまいに言葉に濁した。

敵魔道士とのやり取りを聞いて、当然のことながら、キーラは疑問をいくつか抱いたようだった。だがアレクセイに追究しかけて、―――やめた。おそらく魔道士の勘が働いたのだろう。聞かないほうがいいと判断して、事実確認にとどまった。賢明である。

だがその賢明な態度が、不思議とアレクセイを苛立ちに誘う。

フェッルムの島の調査に加わらなかったのも、それが理由だ。いま、キーラの顔を見たくない。彼自身、理由もわからぬ苛立ちなのだ。王子らしからぬ醜態をさらさないよう、一人で引きこもっていたほうがいい。アレクセイはそう考えた。

「おまえは本当に、彼女がからむと、らしくなくなるな」

くく、と笑い含みの声で云われ、アレクセイは片手で顔をおおった。

「云わないでくれ。一応、自覚しているよ。あのお嬢さんは人を振り回すのがお上手だ」

「振り回されているのはおまえだけだ。正直になれ、気に入っているんだろう？」

楽しそうなセルゲイに、アレクセイは呆れた眼差しを向けた。

「それを云わせてどうする気だ？」

「別に。ただ、安心できるだけだ」

安心とは奇妙なことを云う。ますます眉をひそめると、セルゲイ

は思いがけず真面目に見つめ返してきた。

「おまえは云ったな。すべてが終わったら、あるべきところに皆を返すと」

「ああ」

「そうしておまえは王になる。王子として国を解放するんだ。逃れられない展開だ」

「そうさ」

相槌を打ちながら、わずかに苦い気持ちが芽生えた。ふっと笑って、その気持ちをひねりつぶす。もう決めたことだ。セルゲイはさらに淡々と言葉を続けた。

「そのとき、おまえは一人だ。だが事情を知る人間が傍にいたら、おれは安心できる」

短くはない沈黙が芽生えた。アレクセイは啞然と口を開いて友人を見つめていた。与えられた言葉の意味を考え、アレクセイは心から表情の選択に困惑した。なにを云えばいいのか、なにを返したらいいのか。まったく浮かばないまま、口が動く。

「おれはそんなに頼りなく見えるのか」

「まさか。だがおまえの急所をおまえしか知らない状況を危うく感じる。おまえはチーグルに勝てない。団長にも勝てない。気力は誰にも勝っているだろうが、必ず誰かの助けを必要とするだろう。その誰かが、あの紫衣の魔道士どのでなにがいけない？」

（セルゲイらしい心配だ）

アレクセイは目を伏せてちいさく笑みを浮かべる。王子アレクセイ、ミハイル、そしてセルゲイ。この三人の中でだれが一番気性が

やさしいかと云えば間違いなくセルゲイだとだれもが云うだろう。
その通りだ。くく、とのどの奥で笑って、アレクセイは顔をあげた。

「おれが気に入っているというより、おまえがキーラを気に入っているんじゃないか？」

「否定はしない」

むしろ胸を張って堂々と応えるものだから、ついにアレクセイは吹き出した。

だがやさしい友人の思惑通りに、物事は運ばない。

恐怖を浮かべた濃藍色の瞳を見て、だめだな、とアレクセイは感じた。

キーラは確かに紫衣の魔道士だ。だから事象に敏くて、彼の正体にも気づいた。だが同時に、普通の少女としての一面もあるから、目の前で人が斬り殺された事実へ過敏に反応している。アレクセイにおびえている。そんな反応を認めて、胸がきしんだことに我ながらひどく驚いた。

「うそだったの、全部」

(気丈なお嬢さんだ)

ふるえながら、それでも逃げ出しもしないで口を開く少女をまっすぐに見つめる。

「あなたはアレクセイ王子じゃなくて、ミハイルと云う人なの」

「いいえ」

ゆっくりと歩み寄りながら、アレクセイはいつもの仮面を身につける。

もう、ミハイルと云う青年はこの世に存在しない。してはいけない。王子アレクセイの依頼を受けた時からミハイルはアレクセイとなった。ミハイルと云う名前に執着などない。もともと捨て子だった彼に、適当に与えられた記号だ。アレクセイでも別にかまわない。

「わたしは間違いなくアレクセイですよ。一か月前、ミハイルと云

う名前と共に、一人の青年が葬られたときからね」

すぐ目の前に立てば、キーラは必死な眼差しで見上げてきた。

たじろぐ自分を認識する。アレクセイにまだ怯えながら、なにかを必死で探そうとしている眼差しだ。なにを？ 感傷的に彼女を見つめようとしている自分に気づいて、とっさに彼女の意識を奪った。とさり、と、あえなく倒れこんでくるキーラを支える。

「ミハイル」

「おれをその名で呼ぶなと云ったはずだ、セルゲイ」

眼差しをキーラから外さないまま、アレクセイは鋭く云い放った。そのまま斬り捨てた男を眺めて、剣呑に目を細めた。まったく、余計なことを云ってくれた。だが命を失った人間にこれ以上の憤りを向けるなど馬鹿馬鹿しい。キーラを抱え直そうとしたとき、二の腕をつかまれている状態に気づいた。意識を失う前、とっさに掴んだのだろうか。アレクセイの唇がわずかにひらく。だが結局なにも云い出さないまま、キーラを抱えて歩き出した。ふと思いついて、アレクセイはじっと立ち尽くすセルゲイを振り返った。

「魔道士の埋葬は任せる。おれは先に船に戻ってキーラを、……ああ、こちらの女も捕まえておかないとな。キリルにでもキーラを委ねた後は、引き取りに来る」

「キーラ嬢をどうする。殺すのか」

ひどく思いつめた声音に、ふっと唇をゆるめた。

「まさか。彼女を殺したらチーグルやギルドの長に殺されるよ。ただ、事態がこうなった以上、魔道封じの腕輪をはめて監禁させても

らうけどな」

「馬鹿なことを云うな。それこそ彼女の反発を招くだけだ」

「―――セルゲイ、甘い希望は捨てろ」

今度こそセルゲイと向き直って、アレクセイはきっぱりと云い放った。

「キーラの反応を見ただろ。彼女がおれの仲間になることはない。無理だ。こうなった以上、ことが終わるまで彼女を監禁するしかない。少なくとも、おれの立場が揺らぎのないものになるまでな。殺すわけにはいかないんだから、それしか方法はないだろ」

「無理を云っているのは、おまえのほうだろう」

ようやく動いたセルゲイは、毅然とした声音で告げる。

「キーラ嬢を監禁する？ 生きた人間を監禁し続けることがどれほど骨か、おまえは知っていて戯言を云っているのか。この場合、秘密を保つためならばキーラ嬢を殺すべきだ。それが出来ないというなら、」

「セルゲイ」

「味方に取り込むしかないだろう」

アレクセイがあげた制止を無視して、セルゲイは最後まで云い終えた。

黒々とした瞳が、まっすぐにアレクセイを見つめている。本当に甘い希望を抱いているのはどちらだ。言葉に出さなくても、そう考えている。アレクセイは口端を持ち上げる。笑うしかない心理とは、まさしくこういう心理を云うのだ。

「たぶん」

云いながら踵を返して歩き始める。セルゲイは咎めることもせず、じっと見送った。

「団長やチーグルも同じことを云うんだろうな。だがおれには無理だ。キーラを口説き落とせる気がしない」

「キーラ嬢一人を動かせない男が、ルークス王国の解放を成せると思うのか」

苛立ちを含んだ言葉に、ぴくりとも反応できず、振り返りもしなかった。

アレクセイは舌打ちの衝動をこらえる。まったく自分はどうしてここまで弱気になっているのか。腕の中に抱えた少女をあえてかえりみなかった。キーラが理由のはずがない。だから見つめる必要もない。意地になっている自分を悟りつつ、アレクセイは船に戻った。

それからしばらく、あいまいな時間を過ごすことになる。

やはりというべきか、チーグルをはじめとする団員たちはキーラを味方に取り込もうと主張した。事情を話しさえすれば、彼女はきつとわかってくれると云うのだ。だが、同意できないアレクセイは、やはりこのまま監禁しようと主張した。アレクセイに共調する者は少なく、まったく、とアレクセイは呆れてしまう。

(こいつらに対し、どんな魔道を使ったんだ?)

キーラが仲間たちに魔道を使うはずがない。理解しながらも思わずにいられない。最強の傭兵集団『灰虎』のいかつい傭兵たちをここまで信用させるとは、いったいどんな魔道を使ったのか、と。だがキーラを呼び出したとき、きっぱりと云われてしまった。

「今回の依頼はお断りします。即刻、わたしを船から降ろしてください」

改まった口調だった。かちかちにしゃちほこばっている様子がよくわかる。

アレクセイとしては覚悟していた言葉のはずだった。だが、やはり実際に云われてしまうと、落胆している自分に気づいた。やはり魔道をかけられている。戯れにつぶやいてみた。だがこわばった表情はゆるまない。アレクセイが沈黙している間にも会話は進み、ついに、キーラが泣きそうな顔でアレクセイを見つめてきた。

うそつき、と云われている気持ちになった。
うらぐりもの、と罵られている気持ちになった。

アレクセイの決意は、キーラと会う前から始まっている。なんにもかも了承して、アレクセイはルークス王子を騙る道を選んだ。だから、いまさらなのだ。道を定めた後に知り合った人間に非難されたところで、道を違えるはずがない。だが、——だが。

（彼女を傷つけない方法が、理解を得られる方法があつたんじゃないか？）

動揺したまま、そう考えている自分に気づいた。けれどもう遅い。他にもいろいろ道はあつたと思うが、これが、現実が発生している状態だ。キーラはアレクセイたちの仲間にならない。だからとつとつとした口調で平静を装う彼女をアレクセイはさえぎっていた。

「その先は云わなくてもいいですよ、キーラ。よくわかりましたから」

ぎりぎりのところで踏みとどまっているキーラを、これ以上追い詰めたくなくて、ことさら王子らしい態度をよそおうと、ますます彼女は泣き出しそうになる。アレクセイはひとつ息を吐いて、キールにキーラを部屋まで送るように云いつけた。おとなしく部屋を出ていくキーラは、何事か云いたいようだったが、諦めたように首を振る。

アーヴィングもチーグルもセルゲイも、なんにも云わない。云おうとしない。キールの言葉もある。これまでを悔いる気持ちはわかるが、このまま沈黙しても状況は変わらない。

「彼女を船から降ろしましょう」

「それはだめだ」

アレクセイが提案したら、アーヴィングが即座に反応した。両手を組み合わせたまま、陰鬱に落ち込んでいるくせに、きっぱりとした響きで云う。

「彼女は魔道士ギルドから紹介された魔道士だ。彼女をこの件から降ろして、新しい魔道士を紹介してもらえないはずがない。おれたちに魔道士は必要なんだからな」

「心当たりがあります。先日、船から降ろした魔道士を雇うわけには？」

「方法としてはあるだろうが、あの男にはギルドの保証がない。おまえの秘密を話すわけにはいかんだろう」

秘密を話すわけにはいかない以上、同じ事態を繰り返す可能性が高いというわけだ。沈黙したアレクセイを、セルゲイがじろりと睨みながら、口を開く。

「おまえは本当に、どうかしているぞ」

溜息ひとつを、まずは返した。いまとなつては、秘密を明かさなかつた自分が悪いとわかっている。前髪をかきあげ、そのままの態勢でつぶやいた。

「おれがアリョーシャ本人から騙りの依頼を引き受けた。それを話したところで何が変わる？ 国をだまし、民をだまそうとしているのは事実だ。なによりあそこまできっぱり拒絶しているんだ。深い事情など知らないほうが、彼女のためだろう」

「深い事情を知れば、だまされて雇われたのだ、と云う言い訳がで

きなくなる、か？　だが現状を見ろ。キーラ嬢の性格を見れば、一方的な配慮にすぎないとよくわかるだろう」

「ああ。まったく返す言葉もないね」

放り出すように告げて、アレクセイは息を吐いた。キーラを、仲間として受け入れる。けれど自らが犯した過ちのために、彼女を頑なにしている状況をどう切り開くか。もう一度息を吐く。なによりも骨が折れる仕事になりそうだった。

こつこつ、と丸窓をたたく音がした。視線を向ければ、アウイスが羽ばたいている。セルゲイが素早く駆け寄り、丸窓を開けて中に招き入れた。空色の鳥はゆっくりと旋回し、アーヴィングが差し出したこぶしの上にとまった。餌の入った箱を取り出しながら、足首にくくりつけられた文箱をとりあげた。中から副団長からの報告書が出てくる。

「キーラのことを伝えたんですか？」

溜息交じりに、アーヴィングはうなずいた。

「伝えねえわけにはいかねえだろう。やれやれ、あいつがなんと云って書いてよこしてきたか、正直読みたくねえな」

そう云いながらも報告書を広げ、しばらくしてアーヴィングは眉をひそめた。

なにが書いてあるのかと思えば、アーヴィングはひらりと報告書をよこしてくる。眼差しだけで読んでいいのか訊ね、了承を得た後に紙面に目を落とした。眉を寄せる。

———アリョーシャが云い残した言葉を至急、書き送れ。

(どういう意味だ?)

報告書をひっくり返したものの、他に文章はない。返信するための新しい用紙を受け取りながら、アレクセイは考え込んだ。

アリョーシャが云い残した言葉と云えば、なによりもアレクセイに自らに擬態し故国を解放せよと告げた言葉だ。だがその内容はヘルムートも充分知っているのだから、いま、あえて知りたがる理由はない。ならば他に云い残した言葉ということになる。

ヘルムートの要求は、なにを目的としているのか、わからないだけに困惑を招く。

だが繰り返し読んでいるうちに、脳裏に閃いた言葉があった。珍妙な言動が多いアリョーシャであっても、特に珍妙だと感じた言葉だ。ペンを取り上げ、さらさらと書く。

——不穏であればまだ見込みがある。平穏であれば、抜本的な改革が必要となる。

これはどういふときにつぶやいた言葉だっただろうか。記憶を追いかけて、ああ、と思い出した。生前の王子アレクセイが、故国に戻る、と、アーヴィングたちに意思表示した夜のつぶやきだ。紋章を見つめながら、珍しく思いつめていたから思い出していた。

（紋章？）

唐突に、アレクセイは気づいた。

捕えた女魔道士は、ルークス王家に連なる者を護ろうとする精霊の意思が、紋章に宿っていると云っていた。だがその意思とやらは、正当な王位継承者である王子アレクセイが危機に陥っても発動することはなかった。それどころか、王子アレクセイは紋章を護れ、と繰り返し告げていた。アレクセイは眉をひそめ、もう一度ペンを取り上げて書いた。

——紋章を護れ。

(さて、これはなにを示している?)

アレクセイは首にかけている紋章を取り出した。

ギルドの長が、キーラが、魔道的には何も感じないと断言した紋章だ。ならばなにもないのだろう、と閃く。なにより、王子アレクセイは何者からも守られることなく亡くなったのだ。魔道士二人の意見が正しいと考えざるを得ない。だが、女魔道士は精霊が宿っているはず、と告げた。今現在、ルークス王国にいる人間は、紋章に精霊の意思が宿っていると考えているということだ。

ならば。

「チーグル」

紋章を見つめて考え続けたアレクセイは、ずっと沈黙している老人を見つめた。

静かに眼差しを向けてきたチーグルは、すでにアレクセイが問いかけようとしている内容を察しているようにも見えた。

「十年前、アリオシャを引き取って、……船に戻る前にどちらかに寄りましたか?」

アーヴィングとセルゲイは、目をまたたいてアレクセイとチーグルを見比べている。ふ、とチーグルは笑い、大きくうなずいた。

「ルークス王国とパストウスの国境に。それから魔道士ギルドに立ち寄って船に向かった」

「もしかしたら、すでにそのとき、紋章の鑑識も済ませていたのではないですか」

「その通り。何も感じない、とギルド長は応えたのう」

アレクセイが考えた通りだ。

十年前、紋章を見失った側の人間は、紋章に精霊が宿っていると考えている。だが真実はそうではない。王子アレクセイがおそらく、国を追われた後に紋章に宿っていた精霊を解放したのだ。少なくとも紫衣の魔道士が魔道的感査を行っても何も感じない状態にした。

なんのために？

すぐにアレクセイは答えを導き出した。もちろん、敵の利にならないようにするためだ。チーグル、とアレクセイは呼び掛けて、テーブルにある世界地図を差し出した。

「副団長に知らせます。アリョーシャが立ち寄った国境の詳細位置を教えてください」

あるいはルークス王国よりも先にそちらに行かなくてはならないかもしれない。そう思いながら、アレクセイは眉をひそめる。いや、青衣の魔道士は、斬り捨てたから問題ないはずだ。

それからアウイス便による協議を重ねて、アレクセイたちはこのままルークス王国に向かう方向に定めた。隣国パストゥスや国境は副団長ヘルムートが率いる部隊が探る。当初の予定通りになった理由は、女魔道士の件をかえりみて、こちらの動向を探られている可能性を考慮したためである。王子アレクセイが敵に隠し通したかっただろう事実を、敵に目をつけられた部隊が探ることで、あらわにしてはならない。

ただ、問題は捕らえている女魔道士である。

あのまま放置したらマーネの魔道士のように、口封じに殺されるのではないかと考えたから、保護下に置くことに決めた。それでも指輪による魔道が発動するのではないかと案じていたが、さいわいにもこれまでにそのような事態は発生しなかった。

このまま連れ歩くわけにもいかないから、近いうちに立ち寄る港にある魔道士ギルドに預けようと考えていたのだが――。

報告を受けて、ただちにアレクセイは部屋を飛び出した。

舌打ちしたい気持ちをこらえる。どうしてこの状況を読み切れなかった。間抜けすぎる、と罵りながら、キーラの部屋に駆けつければ、すでに数人の傭兵たちが扉を押し破ろうとしているところだった。眉を寄せる。なにか物を置いているのか。だが鍵も開けられる部屋に、大の男数人が押し入れないはずがない。

「キーラ！」

扉の前で必死になって呼びかけているのはキリルだ。その脇に見

張り役の男がへたり込んでいたものだから、アレクセイは屈みこんで様子をうかがった。

「大丈夫か？」

「ああ。ちょっと、油断した」

言葉の響きはしっかりとしたものだから、すでに問題はない。ほっと息を吐いて、男が続いて吐き出す内容に耳を傾ける。油断したと、男はもう一度繰り返した。

「まさか魔道士があんなに腕が立つとは。反則に近いぞ」

「魔道士？」

傭兵に腕が立つと云わしめる魔道士、と聞いて、あの青衣の魔道士を思い浮かべていた。セルゲイと剣でやりあっていた魔道士だ。けれどすぐに否定する。ありえない。あの男は確かに殺したはずだ。

いずれにしても、その言葉で扉が開かない理由が分かった。魔道士が潜入したのだ、ならば魔道によって扉を封じているに違いない。室内の状況に思考を飛ばして、初めてキーラに魔道封じの腕輪をした行為を悔やんだ。魔道を封じられていない彼女ならば、この事態をどうにか打開していただろうに。

（最低だな）

自分勝手にもほどがある。キーラの力を勝手に封じておいてなにを考えているのか。

それでも彼女が傷つけられる事態まで望んではいない、と、思考は力強く否定して、アレクセイを扉の前に進ませた。どん、と扉を叩き、室内に呼びかける。

「キーラ、いますか！」

返答はない。珍しく抱いた焦慮のままにもう一度呼びかけようとしたら、キリルたちがアレクセイを押しつけて扉に体当たりする。今度は、扉がたわんだ。がたがたと物が倒れる音が聞こえ、ふとあっけないほど扉が開いた。体当たりした男たちが勢い込んで室内に倒れこむ。その流れに乗じて、アレクセイは室内に入り込んだ。

——瞳、が。

室内には三人の魔道士がいた。捕えていた女魔道士に、見覚えのある魔道士、そしてキーラだ。

女魔道士に手を取られながら、キーラはこちらを振り向いた。眼差しと眼差しがかち合う。濃藍色の瞳にアレクセイが映った、と、確かに認識した次の瞬間、三人の姿は消えた。転移魔道だ、と、思考のはずれで考えながら、アレクセイは動けないでいる。

（なぜ）

どうして彼女は消えたのだろうか、と、心が、つぶやいている。どこか遠い響きに聞こえるのは、アレクセイ自身が呆然としているからだろうか。

それほど、敵の手を取るほど『灰虎』に失望した？

弱気につぶやいて、いやちがう、と力強く否定する。あの瞳は、まったく負の感情を浮かべていなかった。詫びるような、突きつけるような眼差しは、アレクセイになにを云いたかったのだろうか。

（わからないな）

ひとつ、息を吐いて、落胆した様子のキリルの肩を叩いてやった。魔道士ギルドに向かったアーヴィングが、いつのまにか扉近くに立っている。自室に閉じこもっていたチーグルもいた。その二人に身体ごと向き合って、アレクセイは口を開いた。

「女魔道士と、……キーラが敵に奪われました。ですがキーラの身に、危険はないと思われます」

「ならば取り返さなくてはならぬのう」

かわいがっている少女がさらわれたにも関わらず、たいして動じてないチーグルに苦笑が浮かんだ。

まったくこの老人は、無理難題を軽々と云ってくれる。

誰にでも事実を知る資格はあります。(1)

さしだしたティーカップを、ローザがとりあげてかたむける。

こくりと紅茶を飲み込むさまを、キーラはどきどきと緊張しながら見つめた。淹れた紅茶を飲んでもらう。これまでも経験してきたはずなのに、そのときとは比べ物にならないくらい、心臓が鼓動を打っている。できる限り丁寧に淹れたけど、と先ほどの手順を振り返っていると、ふう、とローザが息を吐いた。ぎくりと顔をあげる。

「だめね。あなたのお茶を店に出すことはできないわ」
「あー……」

半ば予想していた言葉だが、実際に云われてしまうとそれなりにショックだ。

思わずうなだれていると、ローザは立ち上がり、入れ替わりに椅子に座らされる。ローザはカウンターの上に出している道具を使って、お茶を淹れ始めた。おそろおそろキーラは指を伸ばして、淹れたお茶を飲んでみた。口に残る渋味、そしてわずかな風味。マーマネで飲んだ風味豊かな水出し紅茶を思い出す。冷温の違いはあれど、比べ物にならない。とほほ、と肩を落としたところで、ローザが淹れたばかりの紅茶を差し出してきた。眼差しでうかがって、そっと口に含んだ。ふわっと広がる豊かな香りにぱちぱちとまたいた。同じ茶葉を使っているはずだ。なのに、比べ物にならない。

「せめてこれくらいは淹れられるようになってちょうだいな」

微笑みながら云われた言葉に、「はい」と力なく応えてキーラはもう一度お茶を飲んだ。

本当に美味しい。どうしてこの違いが出てくるのだろうかと考えていると、扉がからんと開いた。あら、と目線を上げて、ローザはゆったりと微笑む。入ってきたお客を見て、キーラは困惑した。スキターリエツがにこやかに微笑みながら入ってきたのだ。

「やあ、こんにちは」

「いらっしゃい。神殿での仕事はもう終わったの？」

窓際のいつもの席に向かいながら、スキターリエツはローザと会話を交わす。軽くたしなめるようなローザに「まあまあね」と気楽な様子で応えた。「いつもの」と短く注文して、慌てて道具を片づけ始めたキーラを面白がるように見つめる。

「なに、お茶会してたの？」

ええと、と戸惑っているうちに、ローザが微笑んで応える。

「正確にはお茶のテストよ。キーラもお茶を淹れられるようになってたほうがいいでしょう？ だからまず、試してみたのだけど」

そうして言葉をあいまいに濁しながら、ローザは素早く手を動かす。パンを切って、軽く火であぶる。洗った野菜と果物を切って皿に盛りつける。作りおいたおかずをプレートにのせる。あつという間に準備を整え、「お願い」と云いながらキーラに差し出した。盆にのせて、スキターリエツの席まで運べば、子どものように顔を輝かせて手を合わせる。

「いただきます。うわあ、今日も美味しそうだ」

「……ありがとうございます」

ためらいながら言葉をかければ、気もそぞろな「いえいえ」と云う言葉が返る。さっそくがつがつと食べ始めるスキターリエツをちよつと見つめて、キーラはカウンター近くに戻った。いつも思うことだが、スキターリエツはどこの出身なのだろう。

黒髪黒瞳、黄色味を帯びた肌。年齢不詳な顔立ちは、やはりルクスでも見かけない。それだけではない。たとえば食事習慣も違う。彼は神殿で暮らしている身であるにもかかわらず、食前の祈りをささげない。手を合わせて「いただきます」と云うのだが、一般的な祈りとはやり方が違う。なのに、神殿で敬われる立場にある。不可解な存在だ。

「で、キーラはお茶をうまく淹れたの？」

もぐもぐと飲み込んでから、スキターリエツが訊ねてきた。う、と言葉につまって、逃れられない眼差しに諦めて首を振る。すると彼は人が悪いことに、にやつと笑うのだ。

「へえ？ 飲食店の経験は豊富だって豪語してたのにねえ」
「それは！ ……おっしゃる通りです」

反射的に云い訳しそうになったが、きゅ、と口をつぐんで、素直に認めた。いよいよスキターリエツは楽しそうに笑って、ローザに視線を向ける。

「ちようどいいや。食後のお茶はキーラに淹れさせてよ」

驚きに目をみはったローザに、さらに畳み掛けるように云う。

「のんきに構えていても、なかなか上達しないだろうし？ こうい

うのはどんどん練習していくしかないからねー。あ、でもまずかったら飲まないから安心して？」

それならいいだろ、と云って、一方的に話をまとめる。

仕方なさそうに微笑んだローザが、キーラを見てうなずいた。えええ、とたじろぐ心地でいると、わざわざ立ち上がったスキターリエツがカウンター内に身を乗り出して紅茶缶を取り上げた。押し付けるように渡されて、ぎこちないながらもキーラはうなずいた。

それにしてもおかしい。スキターリエツはキーラを見張りに来ているはずなのに。

誰にでも事実を知る資格はあります。(2)

「あー……、確かにダメダメだ。美味しくない」

キーラが淹れた紅茶をひと口飲んで、スキターリエツは率直にのたまった。

とどめを刺された形になって、キーラはがくりと肩を落とす。でもけなされてこそ、人は育つものだし！ 云い聞かせて、気分を盛り上げた。再び顔を上げれば、まずいと云ったくせに、スキターリエツはまだ紅茶を飲んでいる。

だったら飲まなければいいのに、と感じているうちに、ローザが動いて新たに紅茶を淹れた。キーラはじっと眺めて、ローザが紅茶を淹れる手順を覚える。先ほども同じように観察した。同じように今回も淹れたつもりだったが、なにがまずかったのだろう。考えながら、お給料をいただいたら紅茶葉を買おうと決意する。

マーネに戻るための旅費としてため込むつもりだったが、せっかくの機会なのだ。ルークスに滞在している間に、お茶の入れ方をマスターしたい。ローザが差し出したティーポットと新たなティーカップを盆にのせて、スキターリエツの前に用意する。ローザのお茶を飲んで、うん、と満足げにスキターリエツがうなずいた。

「やっぱりローザが淹れる紅茶は美味しいや。いままでに飲んだ中でも一番かな」

「あらあら、ありがとう」

眼差しだけを交わした二人は、続いてそろったしぐさでキーラを

見る。ぺこりと頭を下げて「精進します」と告げれば、やわらかな苦笑がとりまいた。スキターリエツが身を乗り出して、口を開く。

「なんだったら、アリアにお茶の淹れ方を教わるかい？ あの子、うまいんだよ」

「アリアが？」

そういえばキーラがこちらに移ってから一度も会っていない。心配しなくても元気でやっているだろうが、キーラは意外な特徴を聞いた気持になった。うん、とスキターリエツはほのぼのとした微笑みを浮かべる。

「神殿ではいつもあの子にお茶を淹れてもらってる。なぜか他の人は淹れてくれないんだ」

それは、と、思考に閃いたまま、キーラは口を開いた。

「もしかして、他の誰に云いつけても、アリアが淹れてくれるということ？」

「うん。ひどいよねー。お茶を淹れるくらい、たいした手間じゃないと思うのに」

（それはまちががなく、アリアの手が回っているのよ）

いまの段階では思い込みに近い意見を、キーラは脳内でつぶやいた。

直感だが、間違っていないと感じるのは、アリアが人のためにお茶を淹れる印象が薄いからだろう。ふうん、と思いながらスキターリエツを見つめる。男らしいという意味ならマティが勝ると思うが、スキターリエツにはすっきりとした涼やかさがある。アリアが惹かれても無理はないな、と考えていると、スキターリエツはローザに

キーラの予定を訊ねている。まずい。

「そうねえ、あさってにはお休みを上げようと思っているのよ。必要ないと云っているけれど、人間にはやっぱり、メリハリが必要で
すものね」

「あさってねえ。じゃあその日に、」

「待ってください。その日は予定があるんですっ！」

勢い込んで言葉をはさむと、スキターリエツはきょとんと目をまたたいた。

あ、と放り出した言葉を悔やんでいると、に、と、たちの悪そうな微笑を閃かせる。

「予定がある？ 誰と？」

「いえ。一人ですけど、その、せっかくだから都を見て回りた
いなって、」

「ふうん、どこあたり？ 僕はそれなりにくわしいから案内して
あげるよ」

にやにやと楽しそうな笑みを浮かべたスキターリエツは、口ごも
るキーラに親切めいた提案をする。それを聞いたローザが微笑まし
げに口をほころばせた。

まずい。

ぐっと口をつぐんでいたキーラだったが、同時に、こちらの反応
を楽しんでいるスキターリエツになんだか腹が立ってきた。脳裏に
よぎる面影に目をつむって、ぐい、とスキターリエツを真っ向から
見つめる。おや、と見返してきた彼に、突きつけるように告げた。

「図書館に。ルークスで一番大きな図書館があるんでしょ？」
(馬鹿かもしれないわ、あたし)

そもそもキーラが図書館に行こうとしたのは、もちろん観光目的ではない。

精霊について調べるためだ。魔道士ギルドにはなかった資料があるかもしれないという期待を込めて、ルークス王国を出るための手段を探そうと考えたのである。

だが、キーラを見張っている人物に、それを話してどうするといふのか。

自分でツツコミを入れながら、キーラは開き直りに近い心境でスキターリエツを見つめ続けていた。ちよつとだけ表情を変えた彼は、だが余裕を失うことはない。意外に文学少女なんだね、と、少々外れた言葉を返し、笑みを浮かべたまま、言葉を続けた。

「だったらなおさら、僕が案内しないとね。図書館は神殿の管轄だし」

だからきみの行動は無駄だよ、と牽制されている気持になって、キーラは唇を結んだ。

誰にでも事実を知る資格はあります。(3)

ルークス王国はアダマンテーウス大陸において、もっとも古い王国だ。

統一帝国時代の名残を最も多く残している国とも云われていて、あちこちに当時の遺跡が存在している。また、首都にある図書館は大陸でも有数の蔵書数を誇る。世界で初めて活版印刷を用いた本までも所蔵しており、観光だけではなく、研究に訪れる者も多い。

——十年前までは。

翌々日、キーラは迎えに来たスキターリエツと共に図書館に向かった。よく晴れた空の下、ご機嫌な様子で歩いている青年を、隣からまじまじと見つめる。

何を考えているんだろうなあ、とは、何度目に考えたことか。こうして監視対象を情報収集の場に向かわせる。そうしてもかまわないと思うほど、自分たちが作り上げた状況に自信があるのだろうか。

まあ、もっとも考えられる理由は、神殿管轄と云う事実からうかがえるように、危うい本をすでに持ち去っている可能性だ。大丈夫だと確信があるから揺らがらないのだろうか。手のひらの上で転がされている感覚は、とても悔しい。無意識に腕輪に触れて、手を放す。

(馬鹿だ、あたし)

ごつごつ、とこぶしで頭を叩けば、なにごとかとスキターリエツが振り返る。どうしたの、と問いかける眼差しに、ふと疑問に感じ

たことを口にする。

「そういえば王さまはなにをしているの？」

不思議に感じていたのだ。ルークス王国において、神殿の力が思ったより強い。そもそもいま向かっている図書館も、王立図書館だと聞いていた。なのに神殿の管轄とはどういういきさつがあったのか。金髪の青年がちらりと浮かんだ。だから気にしているわけではないのだけど。キーラの質問を耳にして、ああ、とスキターリエツは冷淡な表情で云った。

「たぶん王家所有の城でのんびり暮らしているんじゃないかなあ」
ずいぶんあいまいな返答だ。それならば政治は誰が行っているのか。

続けて訊ねれば、スキターリエツは前を見つめながら口を開く。

「いまのルークスは、議院内閣制だからね」
「ギインナイカクセイ？」

聞いたことがない言葉だ。思い切り不審の声をあげると、彼は軽く笑って振り返る。

「王さまが治めるんじゃないくて、みんなが政治の方向を決めてる、と云うこと」

「じゃあ、鎖国もみんなが選んでいるという状況と云いたいのか？」
「名目上はそういうことになるかなあ」

どこか他人事のように返して、スキターリエツは立ち止まった。前にそびえたつ建物に気づく。薄茶色の円形をした建物だった。図

書館に着いたのだ。

ずいぶん立派な建物だ、と、キーラはまず感じた。古ぼけた印象があるが、それは老朽化が進んでいる印象につながらず、積み重ねた歳月による貫録を感じさせる。壁には植物が這い、まわりに植えられた樹木と不思議に調和が取れていた。扉は解放されていて、立ち入りやすい雰囲気がある。実際、こうして眺めている間も何人かが出入りしていた。

扉から入れば、室内は明るい内装だった。天窓から光が差し込み、床には絨毯が敷いてある。入り口には案内板があり、様々な区画があることに驚いた。子供向けの本を置いた区画まである。そのあたりに意識を向ければ、楽しそうな声が聞こえてくる。本棚から離れた場所では、談笑している人もいる。穏やかな風景だ。

このような図書館、キーラは見たことがない。マーネですら、図書館には厳しく引き締まった空気が漂っている。なんだかこちらでは図書館が憩いの場所になっている。

「ここの図書館は、五年前に神殿の管轄になったんだ」

どことなく誇らしそうに、スキターリエツが説明する。受付にいる人は知り合いなのだろうか、軽くなずき合って、図書館の奥に進む。キーラはおとなしくついていった。本来の調べ物は、スキターリエツがついてきた時点であきらめている。だが、進んでいるうちに、奇妙なことに気づいた。だんだんと人が少ない区域に向かっているのだ。

やがてたどり着いた扉の前で、キーラは軽く息を呑んだ。

「なにを考えているの？」

んー、とあいまいな返事をよこして、スキターリエツは扉を開錠した。

魔道で封じられていた扉は、あっけなく開いた。気負いなく扉を開いて、スキターリエツはキーラを見つめる。淡々とした表情は、この行為に対して何かを企んでいるという様子ではない。唇を結んだまま彼を見上げて、ためらいを捨てて部屋に入る。

扉には、禁書室、というプレートがついていた。

つまり一般には貸出禁止の本を集めた場所なのだ。あるいはキーラの目的に役立つ本があるかもしれない。ただ、問題はなぜ、スキターリエツがここに導くのか、と云うことだ。

（もしかしたら本当に重要な書物は、神殿にあるのかもしれないわ）

むしろそう閃いたことで、負けん気がむくむくと育つ。なんとしても有効な情報を探り出す。意気込みを抱き直して、キーラはぐりりと天井まで続く本棚を見た。

誰にでも事実を知る資格はあります。(4)

禁書室と云っても、書物が並んでいるわけではない。むしろ報告書を束ねた形の冊子が多く並んでいた。親切に背表紙があるわけではないから、手当り次第に本を取り上げて中身を確認していく。精霊と云う単語が掲載されていたら、内容を読み込む。効率の悪い方法だが、整理されていない本棚を探るのだ。仕方ないと割り切った。

スキターリエツはその間、なにをしていたのかと云えば、部屋にある窓から外を眺めていた。こちらを見ないのはどういう意図があるのか。そもそも入室を許した時点で、監視してもしなくても同じ、と云いたいのか。だがいずれにしても、ぼんやりと窓から外を眺めて、なにを考えているのかな、と不思議には思う。

(あら?)

本棚を探っていて、キーラはふっと珍しい冊子を見つけた。

珍しく、ちゃんと書物の形になっている本だ。妙に意識に引っかかるものだから、指を伸ばして取り上げた。表紙に、ただシンプルに「召喚者名簿」と書いてある。ぱらぱらとめくると、奇妙な単語が並んでいた。ヤマサキレイ、オカダツトム、サナダマコト、……全部で五十個ほど単語は並んでいるだろうか。共に日付が書いてあって、いちばん最新の日付は十年前だった。隣に書いてある単語は、カンザキキヨウイチロウ。なにを示している単語なのだろう。少なくとも記憶を探った限り、魔道の専門用語ではない。

「ああ、見つけたんだ」

外を眺めていたはずのスキターリエツが、いつのまにか傍に寄って、ひよい、とキーラの手元を覗き込んだ。ちよつと身をすくめてしまったが、スキターリエツに問いかける。

「これはなに？ なにを意味しているの？」

「表紙に書いてあるだろう。それ以上は僕には説明しかねるな」
「召喚者名簿？」

では、並んでいる単語は、名前なのか。もう一度視線を落として、キーラは首をかしげる。これまでに呼びかけたことがない、見たことがない種類の名前だ。すべてが個人名なのだろうか。だがそれがわざわざここにある意味はなんだろう。というより。

（————『召喚』？）

召喚【しょうかん】…特定の者に、特定の場所に出向くよう命じること。

とっさに頭の中の辞書を確認していたが、この場合、その意味で合っているだろうか。

特定の者、と云うのが、この名簿に書いてある名前の人物か。では特定の場所とは？ ここに書いてある人たちは、どこに召喚されたのだろうか。

首をかしげてキーラは考え込む。精霊とは関係のない冊子なのに、妙に気にかかるのだ。だからこそ、この本がただの本ではないと感じている。

「むかしむかし」

唐突に、スキターリエツが歌うような節で語り始めた。

いぶかしく眉を寄せて眺めると、楽しそうに口端を持ち上げたスキターリエツが、キーラを眺めている。何気なく見つめ返して、ちがう、とキーラはやがて気づいた。

唇は微笑んでいるけれど、スキターリエツの眼差しは笑っていない。初めてかもしれない。彼がこのように剣呑な気配をまとうところなど、キーラは見たことがない。

「ある国が大いなる災いに襲われました。その国の王さまは一生懸命、災いを解決しようとしたのですが、それは統一帝国の時代から残っていた災いであるため、王さまにはやつつけられない災いでした」

さいわいにも、と、スキターリエツはぐると室内を見渡す。

「その国には、統一帝国の資料が多く残っていたため、災いの対処法を見つけることが出来ました。その方法とは、異世界から勇者さまを召喚する方法だったのです」

「ゆうしゃさまア？」

疑い深い響きで、キーラは繰り返した。なんという、胡散臭い単語だ。

ぶ、とスキターリエツは吹き出した。声をあげて笑い出した彼を、あっけにとられて見つめる。

スキターリエツはよく笑うけれど、彼の笑いどころはいまいちよくわからない。いま、キーラが告げた言葉のどこに、笑える要素があったのか。

「うん。……キーラは本当に、楽しい個性をしているよね」

「そう云われる理由が、さっぱりわからないわ」

むしろ不本意だ。楽しませようと言葉をつむいでいるわけではないのだから。

スキターリエツは、目を細めてキーラを見つめる。あ、と気づいた。

先ほどまでの険しい雰囲気はもうスキターリエツをとりまいていない。いつものように、ほんわりと穏やかな雰囲気を漂わせて、まったくなえ、とぼやくようにつぶやいた。

「いまのお話は、だから王さまは昔の技術を使って勇者さまを召喚しました、って続くんだけど、正直、神経を疑うよ。見たこともない異世界の勇者さまとやらを、よくもそこまで信賴して召喚したなんて。だって異世界の人間に、国のために頑張る理由はないだろ」

権力を握る人間は、他力本願でよろしくないよね、と、スキターリエツは皮肉に告げた。

誰にでも事実を知る資格はあります。(5)

「王さまなんてものは、他力本願じゃないとまわりが困るのよ」

召喚者名簿を閉じて、元の場所に戻しながらキーラは云い返した。スキターリエツは、軽く眉を上げる。マジメな視線が少し怖かったけれど、脳裏に閃いた言葉を間違っていないと感じたから、そのまま言葉を続けた。

「ものすごく不合理だけど、王さまなんて着替えひとつも自分でできないような生き物じゃないと、まわりの人間は仕事を失うし。政治だって、そう。なにかも自分で解決できる王さまだったら、宰相や將軍の出番がなくなるわ。他力本願でいいのよ」

「じゃあ、異世界から勇者を召喚することも、やっていいのかい？」

面白がるような声音だったが、ひやりと背筋が冷えた。

だがその感覚が確信を抱かせる。スキターリエツは召喚された人間なのだ。先ほどの話は、おそらくこのルークス王国における事実なのだろう。異世界から人間を召喚する。よくわからない仕組みだが、統一帝国の技術を考えたら、ありえない話ではない。

キーラは沈黙した。

スキターリエツが召喚者であると確信できた。だが、そんな彼に媚びて「いいえ、正しくないわ。召喚者にとってあんまりな理由よ」とは云いたくない。一方的な話だと感じるからだ。王には国を守る義務がある。それしか方法がないと見極めたのなら、罪を背負う覚悟で義務を遂行しようとするものではないだろうか。

だが、スキターリエツが云う言葉ももつともなのだ。住み慣れた場所から引き離され、意に沿わぬ依頼を押し付けられたキーラだから、少なくとも「ばかやろー」くらいは云いたくなる気持ちがある。

ふう、と息を吐いた。

それでもいま、キーラが意に沿わぬ依頼、――素性を騙されて受けさせられた依頼だ！――を遂行しようとする理由は、共に過ごしていたときに感じとったものがあるからだ。

傭兵団『灰虎』には、あの金髪の青年にはそうせざるを得ない理由があった。

どんな理由だったのか、それは知らない。ただ、監禁されている間の扱いを覚えている。こちらをできるだけ気遣った対応だった。だから時間をおいて冷静になってしまえば、頑なに拒絶しようという気力が萎える。あとで高額報酬を求めることを前提にして、力を貸してやろうかと云う気にもなるのだ。

「良いか悪いか、と云う考えでぶつけ合っていたら、いつまでたっても結論は出ないと思うわ。だってそれぞれ立場がちがうんだもの。だから、どちらも良い、と云う考えで、状況をすり合わせていくしかないんじゃないかしら」

どこからどこまでも完璧な、望み通りの状況など得られないものだ。

だからどんな状況でも存在する齟齬を、望みに近づくための、妥

協の場として考えることはできないだろうか。完璧な願望成就などあり得ない。最初からちいさな不満を組み入れて、おおまかに願望を叶えてもいいのではないだろうか。

むしろそのほうが、ゆっくり進んでいける楽しみがある。そう思える余地がある。

「楽観的だね。起きてしまったことはすべて良いことだと云いかねないなキーラは」

しばらく沈黙したスキターリエツは、やがて笑いを含んだ声で告げた。

（そこまで能天気じゃないわよ）

そろそろと次の冊子に手を伸ばして、ぱらぱらとめくる。精霊と云う単語は見つからない。諦めて冊子を閉じて、またしまう。単調な作業を繰り返しながら、ぽつりと云った。

「起きてしまったことは、くつがえせない、とは思っているわ」

キーラの傍から離れ、窓際に向かおうとしたスキターリエツが振り返る。

起きてしまったことはすべて良いこと。そう思えたらどんなに素晴らしいだろう。

キーラとて、苦みを帯びた感情しか抱けない、事実と云うものはある。

「不可能なの。起きてしまったこと、変わってしまったことは、決してくつがえすことはできない。まわりを変えることはできない。

でも自分を変えることはできる。どんな事実でも受け入れて、それでも望みを叶えるために進めるように、——あきらめない自分になることはできるでしょ」

「——召喚された勇者さまは、なににもできない普通の人でした」

再び語り始めたスキターリエツは、窓の外を眺めていた。

もう、キーラを見つめてはいない。でもスキターリエツの意識は自分に向いている、と感じたから、キーラは冊子に下ろしていた視線を、彼の背中に向けた。少年のような青年のような、ほっそりとした背中では、どうしたことか、ぽつんと寄る辺ない姿に映る。

「だからこそ彼らは、努力したのです。おかげで災いは退けられました。そうして勇者さまは、この世界から消えたのです」

（消えた？）

いぶかしさにキーラは眉を寄せた。でも。振り向かないスキターリエツを眺めて心の中でつぶやく。でもあなたはここにいないじゃない。消えてなんていない。キーラがそう考えていると、スキターリエツは振り返って、にっこり笑った。

「さ、そろそろ調べ物はおしまいにして、神殿に行こう。アリアが待ってるよ」

誰にでも事実を知る資格はあります。(6)

「おかえりなさいませ、スキターリエツさま」

神殿に足を踏み入れたら、さほど進まないうちに声をかけられた。聞き覚えのある、けれど馴染みのない声に目を向ければ、初めて会ったときのように身なりを整えたアリアが頭を下げていた。ゆっくりと顔をあげるアリアを見て、ちよつと残念に感じる。アリアは隙なく化粧をしていた。素顔もかわいいのに、とつぶやいていると、ギリリと睨まれる。

う、とたじろいで口をつぐんだキーラの隣で、にこやかにスキターリエツが応えた。

「ただいま、アリア。予定を空けてくれと云ったのは僕なのに、待たせてごめんね」

「まあ、いやですわ。お気になさらず。多少の遅れなど気にするようなわたくしではありません」

背筋をぴんと伸ばして、アリアはあでやかに微笑む。化粧をして、身なりを整え、艶めいた言葉づかいで話す。そうしていると、とてもではないがキーラより年下の少女には見えない。むしろスキターリエツと同年代に見える。そう考えて、ああ、と納得した。

かわいいところ、あるじゃないか。

二人は会話しながら、神殿を進む。いまさら帰るわけにもいかなから、おとなしくキーラは二人にくつついていった。だがずっと沈黙しているのに、なぜだかお邪魔虫の気分である。時折、アリア

の視線が強く、キーラを見据えるからだろうか。二人きりでいたいのに！ と雄弁に語る眼差しに申し訳ない気持ちになった。おかしい。キーラが望んでここに来たわけではないのに。

やがて二人は、一室の扉を開いた。心地よく整えられた部屋だ。窓は解放され、陽除けの布が揺れている。中庭に面しているから緑の芝生に、陽の光が照らしだされている。風がやわらかに吹き込む。くんと漂うのは、どこに咲いている花の匂いだろうか。

そんな部屋の中央にソファセットが置いてある。紺色のソファに、白いレースがかけてある。濃い茶色のテーブルの脇には、茶器が整えられていた。まずスキターリエツがソファに腰かけて、アリアはテーブルについた。二人の視線に促されて、キーラもスキターリエツの向かいに腰かけた。話はすでに通じているようで、ちらりとアリアがキーラを見る。

「それで、スキターリエツさま、こちらの方にお茶の淹れ方をお教えすればよろしいのですね？」

「その通りだけど、どうしてそんな呼び方をするんだい？ キーラとは親しいんだろう？」

不思議そうにスキターリエツが問いかければ、アリアはつんと顎をそびやかした。

「そんなはず、ありませんわ。マティがなんと申し上げたのか存じませんが、わたくしはこんな方とは、ちつとも、まったく、これっぽっちも親しくありませんから」

（なんて正直）

以前は確かに、ちらりと交流できた感触があったのだけど、と思

いつつ、スキターリエツを眺めた。たぶん彼が毎日キーラを訪れていたから、交流した過去は無きものとされているに違いない。まあ、親しいと云われても、キーラとて困る。アリアは友人じゃない。

「そうかなあ？ 毎日、僕にキーラのことを訊いてただろ？」

「彼女のことを訊いていたのではなく、彼女との間にあったことを訊いていたのですわっ」

白い頬を赤く染めながら、むきになったようにアリアは云う。

なんだかなあと思いながらキーラは、スキターリエツを見た。ここまであからさまな好意を向けられて、どうこたえるのかと興味がわいたのだ。にっこり、と輝かしく笑って、スキターリエツはのたまった。

「いやだなあ、照れなくてもいいよ。せっかく出来た、アリアの初めての友達じゃないか」

思わず、はあ、と息を吐いていた。

なんというか、見事だ。わざとなのか天然なのか、よくわからないけれど、アリアの気持ちをこれ以上ないほどにスルーしている。くっ、と小さくうめいたアリアはわずかに横を向いて、なにかをこらえるように肩を震わせた。その細い肩をポンポン叩いて慰めたい衝動に駆られたが、ただ、視線をそらせておいた。タブン、クツジヨクテキダロウシ。

「スキターリエツ、いるか」

不意に扉が開いて、マティが顔を出した。室内に視線を向け、キーラを見るなり驚いたように目を見開く。なんだい、とソファに腰

かけたままスキターリエツが応えれば、細めた目でキーラを見つめる。

キーラがいるから、報告できないのだ、と悟った瞬間、無性にその内容を聞きたいと感じた。いまはどんなことでも秘密っぽい情報を集めたい。だが、仕方なさそうに息をひとつ吐いて、スキターリエツは立ち上がった。扉に向かいながら、アリアに告げる。

「悪いけど、用事があるみたいだから僕はこれで。しっかりキーラに美味しいお茶の淹れ方を伝授しておいてね。じゃあ、キーラ、また明日」

そうしてスキターリエツはマティを促しながら部屋を出ていく。思わずそつと腰をあげそうになったキーラだったが、がしりと二の腕をつかまれて動きを止めた。そういえば、アリアがまだここにいたのだ。おそろおそろ視線を向ければ、仏頂面になってしまったアリアがじーっとキーラを睨んでいる。

「どこに行こうというの？」

「え、いえ、別に」

二人の会話を立ち聞きしたいと思ひまして、とはとても言い難い雰囲気である。

とりあえず腰を降ろせば、アリアは茶器の用意を進めながら、口を開いた。

「朝に起きれば、つみたての花と美味しいお茶を淹れてご挨拶にうかがうの。朝食のパンを切り分けるのはわたしの役目よ。仕事の手助けは許されていないけど、休憩をとられる度に甘いものとお茶を持っていったら、にっこりとあの微笑みでお礼を云っていただける

わ。スキターリエツさまがお出かけになられたら、その部屋を居心地良く整えて差し上げたりもしている。夕食はせめて気分が晴れるように、スキターリエツさまがお好きなものとお身体によいものをそろえるようにと料理人に云いつけて、就眠前には一緒にお茶を飲んでお休みなさいと申し上げるの」

ずらずらと語られてしまった。突然なにを語り出しているのだろう、と思って眺めていると、ぎん、とアリアは強い眼力で云い切った。

「だからっ、あんたなんかにあの方は渡さないわっ」

(……、ええと)

一瞬、気が遠くなりかかったが、とにかく誤解されていることはわかった。

女の子って、こういう生き物だったっけ。マーネにいる友人を思い出して首をかしげながら、キーラはアリアに向き直った。ぎんぎんに睨んでいる。誤解を解かなければなるまい。でも骨が折れそうだなあ、と、ぎらぎらした目つきに溜息をこぼしそうになった。

誰にでも事実を知る資格はあります。(7)

美味しいお茶を淹れるコツは、どうやらたくさんあるようだ。

まず新鮮な水を使うこと。素早くお湯を沸騰させること。ポットはふたが熱くなるまで温めること。しっかり蒸らすこと。最後の一滴まで均一の濃度で注ぐこと。

誤解を解いたアリアから教わっているうちに、キーラは魔道を習得していた頃を思い出していた。

自然界に存在する物質の特徴を覚え、同様に、大気にあふれる力を魔道に転化させる思考回路を叩きこんでいたとき。紅茶葉を紅茶に変える過程は、そのときに感じた多彩さを思い出させる。ほんの少しの条件が整わないだけで、結果は多種多様に変化する。たとえば紅茶を入れる過程だって、迎える変化のひとつとして、美味しい、と云う結果があるのだ。

「だから、まずいというのも、多彩な結果のうちのひとつにすぎないのね」

「それは云い訳のつもりなの？　これでうまくいかなかったら、あたし、見捨てるから」

幾度目かの挑戦の際に話しかければ、じっとり半目になったアリアが冷ややかに告げた。

それまでに積み上げた失敗記録が、どうにもこうにも彼女を呆れさせる結果になったらしい。今度は大丈夫、と、むしろ自分に云い聞かせるように、キーラは口に出した。

「よく云うでしょう、失敗は成功の母。だから大丈夫よ!」

この段階に至れば、キーラはさすがに、お茶淹れ失敗原因に気づいていた。

それはポットを十分に温めなかったことに尽きる。

紅茶葉は醗酵度が高い。だから高温で淹れて香りを出さなければいけない。それなのに冷たいポットを使えば、いくら沸騰したお湯を注いでもお湯の温度が下がり、十分な抽出時間を待っても香りも味も出なかった、と云う次第なのだ。

（今度はふたが持てなくなるまでポットを温めた。だからうまくいくはず――）

それでも気を抜かないで最後までティーカップに紅茶を注ぐ。たくさんお茶を飲まされうんざりした表情のエリアが、ティーカップを口元に運んだ。少し、表情が変わる。そっと紅茶を飲んで、さらに表情がやわらかく変わった。そうかと思えば、たちまち表情を引き締めて、つん、と、やわらかなとげを感じさせる口調で云う。毒気がない口調だ。

「まあ、これなら及第点なんじゃないの?」

思わず顔がほころんだ。なんともアリアらしい、合格の言葉だ。

自分のカップにも紅茶を注いで、ときどきしながら口に含む。ふわり、とようやく広がってくれた豊かな香りに、ほうつと心がとろけるような安心感を覚えた。

これならローザも認めてくれるだろう。ようやく用意されていた茶菓手に手を伸ばす余裕ができた。呆れた視線でエリアが見つめて

きたが、結局、彼女も茶菓子を食べ始める。卵色でふわふわした焼き菓子だ。素朴な甘みが、紅茶の風味とよく合う。

（紅茶はシンプルなお菓子がよく合うよねえ）

ほくほくとながみながら、それでもキーラは、向かい側に座る少女を観察していた。

自分より年下の、黄衣の魔道士。つんつんした態度をとるが、人間的な甘さが伝わってくる。アリアは、フェッルムの島での出来事からも感じ取れるように、感情的で口が軽い。情報源として利用するには、少なくともスキターリエツよりもずっと有益な存在だ。

と、頭ではさらりと検討できている。図書館ではたいした情報収集はできなかった。だからいっそう、せっかく立ち寄った神殿で情報収集を、と感じている。のだが。

「ちよっと！　せっかく淹れた紅茶なのよ？　ずるずる音立てて飲むのはやめなさいよ！」

考え事しながら飲んでいたら、びしっとお叱りの言葉が飛んできた。キーラはへによと眉を下げて謝りながら、目の前の少女を利用できない自分を悟った。

アリアは友人ではない。だから彼女の都合を考慮する必要はない。

けれど、かわいい少女だと感じているのだ。少なくとも好意を抱いている。利用したくない、と考えて、キーラはちよっと笑った。自分がおかしくなった。

（あたしに、そもそも他人を操って情報を集めるなんてできやしないのよね）

思い浮かべるのは、『灰虎』の前で感情的になって理性的に交渉できなかった自分だ。

あのときの自分を、本当に情けなく感じている。一人で考えるときには、いくらでも方法を見つけられた。可能性と同じ数だけ。想像は無限だからだ。

だが、やはり現実的ではない。キーラはいま、魔道を封じられた魔道士だ。けれどそれ以上に、未熟で臆病な小娘なのだ。魔道を封じられているからこそ、思い知らされる。交渉において冷静にふるまいきれない。他者を冷徹に利用することもできない。出来ていたのは育んだ力を振り回すことだけだ。

さらにどうしようもないと感じるのは、そんな自分自身にどこかで満足していることだ。

いいのよわたしはカフェを経営する人になるんだから、とうそぶく一部分が、自分の中に存在している。キーラはほとほと情けなく感じた。

このままではだめだ、と強く自分に云い聞かせる。いまの状況でそんな主張をするのは、大切な夢を貶めることにもなるのだから、と。

誰にでも事実を知る資格はあります。

(8)

「……なにを考えているの？」

ティーカップを両手で抱えたまま、動かないでいるといぶかしそうなアリアの声が聞こえた。反射的にキーラは口を開けた。でもなにも云えない。頭がまっしろなのだ。結果的に沈黙していると、ますますアリアは変な表情を浮かべる。今度はなにも云わない。芽生えた沈黙の気まずさに、うん、とキーラは自分で区切りをつけることにした。素早く紅茶を飲み干して、ティーカップをテーブルに置いた。ぺこりと頭を下げる。

「今日は本当にありがとうございました」

「帰るの？」

頭を下げたまま告げると、戸惑ったような声が聞こえた。ちよつと揺らぐ。でも落ち着いた動作で顔を上げて、アリアをまっすぐに見つめた。

「うん。ローザに特訓の成果を早く知らせたいから。茶器はどこに片付ければいいの？」

「後片付けならこっちでやるわよ。だからそのままにしておいて」

そう云うアリアはなんとも中途半端な表情を浮かべていた。キーラはちよつと口端で笑って、もう一度「ありがとう」と告げた。アリアは顔をしかめたが、耳が赤い。色が白いから目立ってしまうのだ。でも気づかないふりをして、キーラはソファから立ち上がる。アリアも立ち上がり、扉から出て出口へと先導してくれた。珍妙な表情を浮かべているアリアに、もう一度頭を下げてキーラは歩き出

した。向かう先はローザが待つ店ではない。

いまなお、ルークスに存在する魔道ギルドだ。

所在地はあらかじめ確かめている。今日のうちに向かう予定ではなかったけれど、いまとなっては図書館よりも先に行くべきだったか、と感じてもいる。でもスキターリエツと一緒に行かないほうがいいからこれでよかった。キーラは魔道ギルドが、スキターリエツ側に回っているのかいないのか、それを見極めるために行くのだから。

（結局、あたし一人ではなにもできないのね）

もう、キーラ個人の限界が見えている。

だから信頼できる仲間が欲しい。情報も欲しい。心当たりをなおも探って、まずは魔道ギルドが閃いた。鎖国されているルークスにおいて、世界にネットワークを広げている魔道ギルドがどのような扱いを受けているか、さっぱりわからない。でも行くだけの価値はあるだろう。

ちらりとアリアに対する想いが浮かぶ。どことなく物足りない表情でいた少女に、キーラは距離を縮める言葉を云えなかった。云ってはいけなかったと感じた。キーラはアリアの友達になれない。スキターリエツの仲間になるつもりがないからだ。そしてこのまま、飲食店の従業員でいるつもりもない。

キーラは、いずれルークス王国を出ていくつもりだからだ。

つまり最終的には、どうしてもスキターリエツたちが望まない行動に出るということだ。だからアリアと距離を縮めないほうがいい、

そう感じた。いまならまだ間に合うだろうから。そう思いながら、素直ではない少女の表情が脳裏に過ぎる。唇を固く結んだ。

また、神殿から後をつけてくる人はいないか、気にしながら歩いた。途中、にぎやかな市場の人ごみに紛れるように歩く。ちらりと振り返って、そんな人はいないと確認して足を速める。そうしてうつすらと汗がにじんでくる頃に、魔道ギルドにたどり着いた。

建物の前に立って、しばらく沈黙する。なんともまあ、と、つぶやいた。

先ほど訪れた図書館を思い出した。あの堂々たる建物とは対照的に、見事にぼろくて小ぢんまりとしている。街のはずれにあるわけではないが、さびれた印象がぬぐえない。閉じられた扉に手を触れば、きい、と音を立てて動く。思い切って開いた。すばやく身体をすべり込めば、そこはがらんとした室内だ。受付はあるけど、だれもない。

「すみませーん」

声を張り上げても応えはない。よくよく見れば、受付のカウンターの隅に埃が積もっている。ちよつと眉をしかめた。じいさまが見たら怒るだろうな、と、ギルドの長を思い浮かべて、足を進める。咎められたらそのときはそのときだ。ひとつひとつ部屋を覗き込んで、キーラはいちばん奥の部屋の前に立った。こんこん、と叩いてみる。応えはない。ためらいを覚えたが、そつと扉を開いた。のぞきこんで、ちよつと固まった。

ぼさぼさの髪とあごひげでほとんど顔の見えない男が、長椅子の上で高いびきを立てて眠っていた。

誰にでも事実を知る資格はあります。(9)

魔道士なのだ、と思う。

取り立てて珍しい恰好をしているわけではないが、乱れた襟元から緋色の肩掛けがずり落ちそうになっている。各地の魔道ギルドは少なくとも色持ちの魔道士が責任者となる。この建物で他に誰も見なかった事実を思い出せば、この男が責任者である可能性が高い。

キーラは扉を開いて、おそろおそろ男に近づいた。起こしていいものだろうか。ためらいながらそつと手を伸ばしたところ、がつ、とその手首を取られる。はっと目を見開けば、ぼさぼさの髪の間から闇色の瞳がキーラを見据えていた。いびきはいつの間にか止んでいる。薄い唇が開いて、思ったより若い声が皮肉に響いた。

「大胆な侵入者だな。それとも暗殺者か？ あいにくわしには通用せんが」

「っ、いたっ」

ぎゅと捕えられた手首に力がこもる。男はゆっくり起き上がった。その視線が捕えている手首に向かう。眉を寄せた。手首を捕えたまま、親指で幻影魔道がかかっている腕輪をなぞる。数度繰り返し、ちらりとキーラを見た。

「魔道封じの腕輪？ なぜ暗殺者がそんなものをつけている？」
「あたしは暗殺者じゃないっ。手をゆるめて！」

たまらずに大声で訴えると、男はちょっと考えてぱっと手を放した。いきなり解放されて、中腰になっていたキーラは反動で床にへ

たり込む。ざらり、とあまり掃除されていない床の感触に気づいたが、気にしていられない。ほうっと息を吐いて、手首を撫でた。じんじんと痛みが響いている感触だ。顔をしかめていると、こちらも顔をしかめた男が口を開いた。

「じゃあ、あんたは何者だ？ 魔道士がいまさら、ギルドに何の用がある？ ずかずかと遠慮もなしに上り込みやがって。……ギルドの方針には従わないんじゃないかなかったのか」

「なにを云ってるのよ？」

唇をとがらせて云い返せば、男は呆れたようにキーラを見つめた。やがて視線をそらして、ひとつ大きな息を吐いた。ぱりぱりと髪をかきながら云う。

「なんの用だ？」

謝りもしない。魔道士ギルドを訪れた判断を後悔しそうになったが、ここは我慢だとぐっとこらえた。呼吸を意識して繰り返して、ようやく鎮めた声音で問いかける。

「このギルドにはどうして他の魔道士がいないの？」

「はあ？」

「あと暗殺者ってなに？ あなた、なにをしているの？」

「いまさらなにを云ってやがる」

男は溜息混じりに告げて、だが唐突に、かっと目を見開いた。激しい勢いでキーラをかえりみた。再び腕を伸ばして、今度はキーラの二の腕をつかむ。強い力で引き寄せ、真剣になった闇色の瞳を合わせてきた。

「あんた、……まさか、外から来た魔道士か？」

キーラは少しためらった。外から、と云うのはルークスの外からと云うことだろう。キーラは自力でやってきたわけではなくて、アリアやマティに連れてこられたのだ。だが結局、直感が示すままにうなずいた。そもそも話さないでいられる事実ではない。

ぱっと男は目を細めて笑った。二の腕を放し、なんとキーラを抱きしめてくる。反射的に硬直していると、愉快そうな笑い声が聞こえた。振動が伝わる。男が笑っているのだ。

「ざまをみやがれ！ あいつらもついにツケを払う時が来た！」
(あいつら?)

不思議に思ったものの、とりあえずぐいーっと男の胸を押して距離を置いた。男はきよんとした表情で腕を解く。耳の下あたりがやけに熱い。慣れてないからだ、とよくわからない方向に云い訳しながら、キーラは気を取り直して、今度こそ男を睨んだ。

なんなのだ、いったい。

「あなた、なんなの？ このギルドの現状はどういう次第？」

すると男は姿勢を正して、襟元を整え緋色の肩掛けをかけ直した。丁寧なしぐさで頭を下げて、おだやかな口調で言葉をつむぐ。

「これは失礼した。わしは魔道士ギルドルークス支社を預かるレフと云う。精霊たちの結界を超えていらした偉大なる魔道士どの、わしはあなたを心より歓迎しよう」

誰にでも事実を知る資格はあります。(10)

「精霊たちの結界を超えてやってきたわけではないわ」

即座にキーラは切り返した。男の表情がたちまち困惑にゆがむ。問いかける眼差しにためらって、だがうそをつくわけにはいかないから、正直に事実を告げる。

「わたしは神殿にいる魔道士の転移魔道でルークス王国に来たのよ」

するとレフの眼差しが、失望を通り越して陰をはらんだ。険しい表情で口を開こうとする男の前に両手を上げて、キーラは自分の言葉を押した。

「まって。最後まで聞いてちょうだい。あたしはマーネで暮らしていたの。でもギルドの長の要請で、傭兵集団『灰虎』に雇われてルークス王国に向かっていったのよ」

「『灰虎』、――アレクセイ王子の要請か」

この言葉に、キーラは目を丸くした。なぜこの男は、『灰虎』の名前を出して、王子アレクセイを結びつけられるのだろう。疑問は一瞬、すぐに仮定が閃いて言葉を継いだ。

「もしかして、あなたは王さまと近い存在だったの？」

「わしじゃない。前任者が親しかった。……長い話になりそうだな、茶でも淹れよう」

完全に警戒を解いた様子で、レフは立ち上がる。少し離れたところにあるチェストに向かって、かちゃかちゃとお茶の準備を始めた。

キーラは困惑したが、余計な手出しはまずいと感じ、目の前のテーブルの上をまとめた。乱雑に積み上げられた本を端に寄せる。うっすらと積もっていた埃が宙に舞う。布巾の場所を訊ねれば、レフは手元の布巾を差し出した。困惑がますます強くなったが、その布巾でテーブルを拭いたところで茶の準備ができたようだ。盆にのせて、湯気の立つティーカップをテーブルに並べる。

レフはためらいなくティーカップに口をつけ、キーラは身構えながら口をつけた。埃が舞う部屋で無造作に淹れられたお茶である。ひと口飲んで、ちよつと硬直した。色はついているけれど、風味が薄い。ローザやアリアが淹れる紅茶とは雲泥の差だ。でもせっかく出してもらったのだし、とそのまま飲み込んだ。向かいでレフがにやりと笑う。

「気の強い娘さんだな。まずければ飲まなくてもいいぞ」

「まずいというほどじゃない、わ」

少し前まで自分が淹れていた紅茶の味を思い出しながらキーラは応えた。そう、あれよりマシだと誤魔化そう。少なくとも渋くはないし、白湯を飲んでると思えばいいのだから。

なにより一応は与えられたもてなしの茶である。飲まないのはどうにも気がひけた。

レフはにやりと笑ったままお茶を飲み、少し和らいだ眼差しで会話を戻した。

「わしが知っていることはそんなに多くはない。十年前、王に、前任者がアレクセイ王子を信頼できる者に預けるよう進言したこと。その結果、『灰虎』が選出され、アレクセイ王子が預けられたこ

と。前任者は王からの密命を受けてそのまま姿を消したことから
だ」

（前任者が姿を消した？）

新たに得た情報に眉を寄せる。どういう意味があるのか、と考え
かけてキーラは首を振る。いまはもっと知らなければならぬ、基
本的な疑問がある。

「まず確認させてくれる？ あなたは神殿にいる魔道士の仲間なの」
「これまでのやり取りから察したと思ったが、……いいや、ちがう。
わしはあいつらを敵視しているし、あいつらも現状を乱すわしがい
なくなればいいと思っている。そんな関係だ」

偽りのない響きで教えられ、キーラは肩の力を抜いた。

少々あつけないが、とにかくスキターリエツ側ではない魔道士に
会えた。それだけで気が抜けそうになり、はっと我に返って慌てて
気を引き締める。これからが本番だ。

キーラはティーカップをテーブルに置き、居住まいを整えてレフ
を見つめた。

「教えてくれるかしら。いま、この国はどういう状況なのか。なぜ
この国は鎖国しているのか。……あたしの目に、この国は平和で豊
かだと映る。でもあなたはこの国の現状を望ましいと思っていない
のね？」

「思えるはずもない。隣人を犠牲にして、なにが平和だ、なにが豊
かだ？」

苦々しい響きでレフは云い切り、キーラが積み上げた本の山から

一冊の本を取り出し、そのままキーラに差し出してきた。受け取ったキーラは本のタイトルを読み上げる。

「『森に住まう、わたしたちの友』、――これは、」

「いわゆる『精霊』について書かれた本だ。この国は『精霊』から譲られた国だからな」

キーラは目を丸くして、レフを見た。アダマンテーウス大陸でもっとも古い王国がルークス王国だ。それが精霊から譲られた国とは聞いたこともない。困惑に目をまたたいていると、レフはゆっくり話し始めた。

古い古い、ルークスに伝わる物語を。

誰にでも事実を知る資格はあります。(11)

かつて、統一帝国があった時代、ルークスはうっそうとした森に占められていた。

その土地に住みついたのが、現在、『精霊』と呼ばれている種族である。強く聡く麗しい黄金きんの女帝の治世下で、ヒトとは異なる、だが穏やかな生活を営んでいた。

けれどその生活は、永続を望まれた女帝の治世が終わると同時に、終わりを告げる。

女帝のもっとも忠実な臣下であった彼らは、なぜか女帝の後継者に従うことはせず、ルークス王国を建国し、開拓民の少年を王として迎えたのである。

そうして彼らは、王となった少年に、永遠の友誼を約束して、森に去った。

レフが語る内容を最後まで聞いて、キーラはティーカップに唇をつけた。

ひと口だけ飲んで、「それで」と口を開いた。知らない知識を手して感心してはいるが、それだけである。ためらいを覚えながら、レフにさらなる質問を重ねた。

「先ほどあなたは『隣人を犠牲にして』と云ってたけど、その隣人って誰？」

「だから『精霊』たちだ。この国には統一帝国の施設が多く残っている。ほとんどの人間は施設の詳細を知らないが、『精霊』たちは知っている。かつて魔道士ギルドにいた魔道士たち、いまは神殿にいる魔道士たちは王を幽閉し、『精霊』たちを利用して、統一帝国時代の施設をよみがえらせ、国をいまのかたちに変えた」

「どうして魔道士たちは神殿に移ったの？」

「きっかけは、十年前に現れたカンザキキョウイチロウと云う人物だ」

キーラははつきり眉を寄せた。カンザキキョウイチロウ、覚えがある。今日に訪れた図書館で見た『召喚者名簿』にあった名前だ。いちばん新しい日付と共に書かれていた。

そしておそらく、スキターリエツの本当の名前なのだろう。

——キョウ、と呼んでくれてもいいよ。

朗らかに云い切ったスキターリエツ。笑顔まで思い出しながら、レフの話を聞く。

「どの出身なのか、わしはまったくしらん。だが王を後見人とし、神殿で暮らしていた人物だ。彼は他の魔道士たちが知らない知識や技術を身につけていたから、魔道士たちへの接触も認められていた」
(え?)

違和感を覚えた。レフはスキターリエツの故郷を知らない。さきほどスキターリエツと共に訪れた図書館から得た知識から、彼が異世界から訪れた人間だとわかるのに、と考えた。禁書だから読む機会に恵まれていなかったのか、と思考を発展させて、気づいた。王が後見人、神殿で暮らしている。

(どうということ?)

神殿はわかる。スキターリエツがいま、滞在している場所だ。滞在を許されるような過去があったのだろう、おそらく友好的な過去

に違いないと感じるから問題ない。

だが、王が後見人とはどういうことだ。

スキターリエツは王族にとっての脅威ではなかったのか。敵ではなかったのか。敵ではないというなら、十年前に王子アレクセイが預けられた理由はなんだ。

ちよつと考えて、自分の頭をポンポン叩く。なんというか、情報過多の感覚がある。考えがまとまらない。こめかみを押さえながら、さらに話の続きを促す。

「そのカンザキキョウイチロウは、魔道士たちに何をしたの？」

「知識の伝授だ。やつの知識を手に入れ、共に言葉を交わすうちに、次第に魔道士たちはギルドの基本方針が間違っているのではないかと考えるようになった。だからギルドから距離を置いて、神殿に、カンザキキョウイチロウのもとに向かうようになった」

ふうん、とつぶやいた。好奇心旺盛と云う性質は、多かれ少なかれ、魔道士と云う存在に備わっているものだ。カンザキキョウイチロウは異世界の人間だろうから、知識も技術も並の人間より珍しいだろう。

だから納得できる理由ではあるが、魔道士たちがスキターリエツのもとに向かうようになった、その流れはいささか不自然だ。レフ一人だけが残っている、と云うのもおかしい。なぜ他の魔道士は神殿に移ったのか、なぜレフはギルドに残っていられるのか。そう考えているキーラの疑惑に気づかないまま、レフはさらに話を続ける。

「だから前任者は、王に進言した。カンザキキョウイチロウを追放

するか、王子アレクセイを留学の目的で他国に預けるか、と云う提案をしたんだ」

ぴくりとキーラは眉をひそめた。

誰にでも事実を知る資格はあります。(12)

ずいぶん飛躍した提案だな、と感じた。それから、少々身勝手だ、とも。

前任者は魔道士ギルドに属する人間だ。いま、レフが知らないように、おそらく前任者もスキターリエツの故郷が異世界だとは知らなかっただろう。だから提案したのかもしれないが、勝手に召喚されたスキターリエツにしてみたらたまったものじゃないなどごく自然に考えて、はっと我に返った。キーラはスキターリエツの間ではない。なのになぜスキターリエツ視点で物事をとらえているのか。ひそかにうろたえ、指先で唇をおおった。

レフがいぶかしんだように、語る口を閉じる。変な眼差しで見つめるものだから、キーラはコホンと空咳をした。ますますレフの目が細くなる。

「あんた、なにを考えている？」

レフはしばらく沈黙した後、やや低くなった声音で問いかけてきた。

警戒されている。レフの変化に気づいたが、キーラは沈黙した。なにをどういえばいいのか、わからない。するとレフは息をひとつ吐いて、ごろりとソファに寝転がった。瞳を閉じながら、淡々とした口調で告げる。

「あんたはどうやら、わしの仲間になる人ではないらしい」

ぱっさりとキーラを切り捨てる言葉だった。キーラは息を吞んだ。

「少なくとも、あんたはわしを信用しとらん。悪いが、さっさと帰ってくれんか。わしはもう、これ以上口を開くつもりはない」

「あたしは、」

「うるさい。帰れ」

端的に云い捨てられ、キーラは口をつぐんだ。しばらくそのままでいたが、レフがはっきりとキーラを拒絶していることは理解できたから、そのまま立ち上がる。見えないことはわかっていたが、ペこりと頭を下げて、「ご迷惑をおかけしてごめんなさい」と告げて、魔道士ギルドから出ていく。

まだ陽は明るい。まっすぐに帰る気持ちになれなくて、目についた公園に入る。賑わいを避けて、公園の隅、芝生に腰を落とした。膝を抱えて、両腕に額をつける。

（なにやってるんだろ）

ちよっと疲れた気持ちでつぶやいた。ふーっと息を吐いて、後ろ向きに倒れた。つんつんした芝が、キーラの身体を受け止める。まっすぐに視線を上げれば、あざやかな青空が見える。ゆっくりと白い雲が流れる。耳に聞こえてくるのは、楽しそうな賑わい。少しずつ気持ちちがほぐれてきて、唇がほころんだ。なのに、奇妙に視界がぶれて、すうっと雫がこめかみに流れる。止まることなく、次々と雫がこめかみを伝って芝に落ちていく。

（帰りたいなあ）

きゅ、と唇を結んだ。こうしてひとりになれば、いまの自分の姿が見える。半端な人間だ。キーラが嫌いだと感じる種類の人間だ。

他でもない自分がそうなったことに衝撃を覚える。少なくともマーネで暮らしていたころは、自分を好きだと感じていたのに。なにげなく考えると、ますます視界がぼやけてくる。たまらず目を閉じて、雫をあふれさせたままにする。優美な美貌を持つ、金髪の青年の姿が、脳裏に浮かんだ。ひきつりそうな唇を動かして、ばか、と声もなく動かした。

（あなたのせいよ）

彼がキーラの前に現れなかったら、あのままマーネで働いていられた。紫衣の魔道士ではなく、ただ、飲食店の店員でいられた。好ましいと思える自分でいられたのだ。こんなに煮え切らない自分になってしまったのは、全部、あの青年のせい、と心の中で続けて、キーラは唇をゆがめた。望ましくない現状を人のせいに行っている。ますます自分を情けなく感じる。

———そもそも、振り返ってみたら。

夢に向かって生きていたのなら、いくらギルドの長を巻き込まれても、依頼を引き受けなかったらよかったのだ。依頼を引き受けて『灰虎』の仲間になると決めたのなら、なにがあってもアリアの手を取るべきではなかったのだ。スキターリエツの仲間にならないと決めたのなら、彼の事情になど斟酌するべきではなかったのだ。

キーラはいままで、ことごとく選択を間違えている。だから行き詰まってしまうのだ。つまりは自業自得、と自分に云い聞かせるようにつぶやくと、ふっと雫が止まった。

（だから、しかたないじゃない）

いつの間にか閉じていたまぶたを、ゆっくりと開ける。変わらずあざやかな空が、もくもくした白い雲が視界に入って、ほんわかと唇がほころんだ。気持ちがよくなる気候が、素直にうれしい。しばらく寝転がって、気持ちいい空気を胸いっぱい吸い込んだ。ふ、と息を吐き出して、涙の跡をぬぐう。勢いつけて起き上がって、ぎくりと動きを止めた。

いつのまにか、公園は様相を変えていた。にぎわっていた人の姿は完全に消えている。覚えのある気配が漂っている。結界だ。なんのために、とつぶやきかけて、キーラは失笑した。目的なんてひとつしかない。

誰にでも事実を知る資格はあります。(13)

無意識のうちに指が動き、手首にはまったままの腕輪をなぞった。どくどくと鼓動が激しく脈打っている。震える唇を開いて、静かに呼吸を繰り返した。

大気に満ちている力が見えない。どこから魔道が飛んでくるかもわからない状況が、キーラの精神をひるませる。こわい。だが、ここにはキーラ一人しかないのだ。ただ怯えているだけではだめだ、と、あたりをぐるりと見渡した。人の姿はない。でも必ず誰かがいるはずだ。唇をぺろりとなめて、口を開く。

「どこのどなたか知らないけれど、用があるなら姿くらいは見せてくれないかしら。それとも魔道を封じられたとはいえ、紫衣の魔道士が怖くて仕方ないの？」

「―――僕に、あなたごときを怖がる必要なんてありませんよ、まったくね」

高く澄んだ声が響いた。声の方向をたどると、白い簡素な服をまとった少年が木陰から現れた。まっすぐな黒髪を肩で切りそろえた少年だ。きれいな闇色の瞳を敵意にきらめかせてキーラを睨んでいる。なんだか覚えがある、と感じて、やがて気づいた。アリアと口喧嘩を繰り広げていた少年だ。水色の肩掛けをしていた姿を覚えていた。

(青衣の魔道士)

さりげなくあたりを見回した。ここは公園だ。すぐに噴水を目にできて、舌打ちした。青衣の魔道士は、水属性の魔道得意

とする。この状況なら、少年は攻撃方法に困ることはない。ふ、と震えるように息を吐いた。ますます怯んでいる気持を自覚した。

「そう。それであたしに何の用かしら？ さっさと帰りたいから、早めに用件を済ませてほしいのだけど」

「たいした厚顔ですね。寄り道なんていまさらでしょう。魔道士ギルドに寄り、公園に寄る余裕もある。なら、少しくらい僕に付き合ってくれてもいいんじゃないですか？」

「あたしはあなたを知らない。だからあなたの事情に合わせなくちゃいけない理由はない」

「僕ですよ、敬愛すべき紫衣の魔道士どの。これから葬ろうという相手に、合わせなくちゃいけない理由は僕にはありません」

そう云うなり、少年は呪文を唱え始める。さあさあとあふれていった噴水が、ぴたりと止まった。キーラは素早く樹木に向かう。ざん、と、衝撃が太い樹木にぶつかり、斜めに切られた幹がずつとずれて地面に転がる。水を刃に変えて、ぶつけてきたのだ。斬られた断面を見て、キーラは次の樹木の背後に移る。心臓が激しく音を立てている。たかが水と侮ってはいけない。水は使い方次第では、このように、なによりも凶悪な武器になるのだ。

(でも、)

次の呪文が聞こえる。ぶわん、と大きな水の塊が飛んできたものだから、再び次の樹木に隠れた。ぱしゃ、と、水がはじける。地面にしたたり落ち、大地に染みていく。その上を走りぬけようとして、響いた呪文に足を止めた。水を粘着液に変える呪文に、慌てて向きを変える。足を固定され、集中攻撃されてはたまらない。

ざっと樹木から飛び出て、先ほどよりも近づいた少年に向かって

走り出した。短く呪文が響く。間に合わない。途中で気づいたキラは斜めに飛んで、少年への攻撃をあきらめた。鋭く形を変えた水刃が、つととキラの髪を一筋、ぶつ切りにする。ついでに、ち、と頬に痛みが走った。ぬるりと垂れる生温かい感触に、ごくりと喉を動かせた。芝に膝をついて、石畳の上の少年を見る。

「この行為は、アリアもスキターリエツも承知なのかしら？」

新たに呪文を唱えようとした少年は、ピクリと眉を反応させて詠唱を取りやめた。

「だからなんだと云うんです。云っておきますが、アリアどのやスキターリエツさまの名前を出したら攻撃をやめると考えているなら大間違いですよ」

「そんなことは考えていない。でも、あたしを始末した後、どう云い抜けるつもりなのか興味があるだけよ」

（しゃべらせろ）

緊張に乾いた唇をぺろりと濡らしながら、キラは少年に言葉を仕掛ける。少なくとも少年がしゃべっている間は、呪文が唱えられることはなく、攻撃が飛んでくることもない。その間に頭をめぐらせ、事態の打開策を考えるしかない。

「うぬばれが強いですね。あなたごとき、始末したからと云ってお叱りを受けるはずがありません。ましてやスキターリエツさまの油断を誘い、アリアどのの優しさにつけこむような人です。いまは理解されなくても、いずれは褒めていただけます」

「自分に云い聞かせているの、その言葉？ 勝手に暴走する部下を持って、スキターリエツも気の毒なことね」

（そうだ）

じくじくと頬に響く傷を知覚して、キーラはひとつの策を閃いた。良策ではない。やぶれかぶれと云ってもいい。だがいまはこれしか思い当たらない。ぐっと手を握った。ゆっくりと腰を上げる。見極める。云い聞かせながら、少年を見つめる。

怒りの表情を浮かべた少年は、はっきり聞き取れない罵声をつぶやいて、次の呪文を唱え始めた。適当に走り出す。水の刃が追いついてきた。くると方向転換して、向かってくる水の刃を見つめる。見極める。動かそうとした片手が、ぶるりと震える。体が勝手に、予測におびえている。それでもキーラは身体の反応を抑え込んだ。視界の隅で、少年の表情がはっと変わる。邪魔されないうちに、とつぶやいて、キーラは水の刃の前に、魔道封じの腕輪をはめられた手首を差し出した。

誰にでも事実を知る資格はあります。

(14)

ざく、という衝撃が、身体に響く。肉よりも先に骨にひびく衝撃だ。少し遅れて、圧倒的な激痛が手首から伝わった。

(……う、あつ)

声にもならない悲鳴を上げて、キーラは腕輪をはめていた手首を押さえた。どくどくと血があふれ流れる。同時に、なじんだ硬質が、指の合間からすり抜けて落ちた。かつん、と云うかすかな音が耳に響き、そうしてキーラは懐かしい視界を取り戻した。

痛みに支配された意識は、わざわざ命じなくても、大気中の力を手首に集めた。しゅるしゅると音を立てそうな勢いで、血管が修復されていく。血が止まる。呪文が聞こえた。力の流れを明確に感じ取った。攻撃は間に合わない。だが防御は間に合う。キーラは手首に集まる力を、そのまま強化の材料にして、手首を掲げた。ぼし、と、水刃が霧散する。手首に残っていた血と水が混ざり合って、地面にしたり落ちる。痛みが思いきり響いてるが、キーラは呼吸を繰り返すことで堪え、少年を見据えた。

「おかげで魔道封じの腕輪が外れたわ。ありがとう」

皮肉を混ぜた声音で告げると、呆然としていた少年は、ぎりっとこめかみを動かした。

「ずうずうしいひとですね。僕の攻撃を利用するなんて」

「うん。ずうずうしいからさらに云わせてもらおうわ。結果、解いてくれない?」

つまり、攻撃をあきらめてほしい、と云う意味だ。少年は悔しげにキーラを睨む。キーラは力を集めないまま、少年を見つめた。状況に反してずいぶん無防備だが、少年が呪文を唱える間に、攻撃できる自信がある。キーラは詠唱を必要としない。傷口をふさいだ行為から少年もその事実を察したのだろう。だが結界を解くわけにはいかない、と思いつめた様子で考えているのが伝わってくる。

このまま硬直状態に陥るかと思われた。だが、唐突に変化は訪れる。ふわ、と、空気が、結界が、するすると解けていく。キーラは眉を寄せ、少年ははっと顔色を変えた。

「スキターリエツさま……！」

「手間をかけさせてくれるなあ」

のほほんと呑気な声が先に聞こえた。続いて、さまざまな音が耳に伝わってくる。だが、少し前のにぎわいは聞こえない。視線をめぐらせれば、結界に閉じ込められる前にいた人々の姿がない。代わりにいたのは、スキターリエツとマティ、数人の兵士たちだった。マティは苦々しい表情を浮かべていたが、つい、と顎を動かした。兵士が動き、少年を取り囲む。顔をこわばらせた少年は、スキターリエツとマティを見た。マティが口を開くより前に、スキターリエツはのんびりとした口調を崩さないままに言葉を続けた。

「街中で戦うことは禁止。僕らはそう決めたよね？　これを破ったら罰を与えるよって。だからきみはちよつと反省しておいで」

「まってください、僕はっ」

「云い訳は聞かない。つれてって」

少年をかえりみないままに、無造作にスキターリエツは云い放つ

た。マティが非難するようにスキターリエツを見たが、結局無言のまま、少年たちと共にこの場を去った。その間、スキターリエツはずっとキーラを見つめていた。キーラはその眼差しを受け止めていたが、思い切って口を開いた。

「あたしも戦ったんだけど、あたしを捕まえていいの？」

するとスキターリエツはふっと笑って、さくさくと芝を踏んで近寄ってきた。警戒などさせない、ごく自然な動作でキーラの手をつかみ、まじまじと検分する。

「ずいぶん過激な方法で、腕輪を壊したねえ」

しみじみとした口調だった。奇妙な居心地の悪さを覚える。手を振り払って距離を置くべきだとわかっているのだが、これまでとまったく変わらない態度に困惑させられる。だが沈黙が苦痛になってきて、キーラはつつい口を開いていた。

「あたしにまた、魔道封じの腕輪をつけるの？」

スキターリエツは面白がるように、ちらりと微笑を閃かせる。

「そうしてほしいのかな？」

「……いいえ。いまのあたしはそんなことを望まないわ」

「ふうん。なら、つけないよ。女の子がいやがること、僕はしたくないからね」

さらっと云われた内容に、キーラは眉を寄せる。本気で云っているのだろうか。キーラはスキターリエツの仲間ではない。むしろ敵対する側の人間だ。そんなキーラをこれまで好きにさせていたのは、

魔道封じの腕輪をしていたからではないのか。

「じゃあ、あたしをどうするの」

途方に暮れて問いかければ、スキターリエツは微笑んだまま、あつさりと答えた。

「もちろんローザのもとに送り届けるんだよ。アリアの特訓のおかげで、美味しいお茶、淹れられるようになったんだろう？ その成果を見せなくちゃダメじゃないか」

さ、おいで。スキターリエツはそう云って、キーラの手首をやわらかく拘束したまま歩き出そうとする。だが、すぐに足を止めた。キーラが唇を結んだまま、歩き出そうとしなかったからだ。不思議そうに首をかしげたスキターリエツを、キーラはまっすぐ睨んだ。

誰にでも事実を知る資格はあります。(15)

「こわい顔をしているね」

不思議そうに首をかしげたスキターリエツは、キーラを見るとそう云って笑った。のほほんとした、ちょっと気が抜ける笑顔だ。でもこれほど、腹が立つ笑顔はない。そう感じながら、深い呼吸を繰り返す。わずかに気が鎮まった頃に、ようやく口を開いた。

「一人でも帰れるわ。だから手を放して」

「そうだろうね」

至って軽い口調で応えて、でもスキターリエツはキーラの手を離さない。振り払おうとしたが、手のひらにぎゅっと力がこもって振り払えなくなった。ますます腹立ちを覚えて、スキターリエツをまっすぐに睨む。今度は我慢しないことにした。

「あなた、あたしをこのままにしておいてもいいと思ってるの？」

ひよい、と眉をあげて、スキターリエツはあっけらかんと答えた。

「思ってるよ。なぜなら、きみにはなににもできないからね」

想像通りの言葉だ。キーラは唇を結んだが、スキターリエツは頓着しない。

「きみは確かに最高位の魔道士なんだろう。先ほどの戦いぶりを見ても、きみを力任せでねじ伏せるのは厄介そうだなあと感じるよ。それでも僕はきみを脅威と感ぜないし、敵だとも思わない。なぜな

らきみは、飲食店で働くことを喜びとする、普通の女の子だからね」

ずっと毎日、無意味にきみを見ていたわけじゃないよ、と、笑う。

「きみが例えば、魔道士ギルドのレフくんと手を組もうとしたとする。でもそれだって僕に云わせれば脅威じゃない。カイは、——
——ああ、いま、連れて行かせた少年のことだけど——きみがそうしようとしていると思ったからこそ、攻撃したんだろうと思うけど、馬鹿なことを考えたなあと感じるよ。なぜならいまのきみを、あのレフくんが受け入れるはずがないからね。そうなんだろう？」

見透かされている。ぐるぐると身体中をまわっている悔しさが口を閉じさせようとしたが、ぎりぎりのところで、キーラの意地が正直に白状させた。

「……そうよ。あんたはわしの仲間じゃないって、拒絶されたわ」

「だと思った。きみは普通の女の子だ。もちろんそれが悪いはずがない。でも何かを破壊しようとする人間には、足手まといにしかないだろう。戦いの技術が優れていることは関係ない。相手の事情も考慮せずに破壊しようとする人間にとって、きみのような存在は氣力を奪い去る存在でしかない。精神的な足手まといなんだよ」

きっぱりと云い放って、ふ、とスキターリエツは笑った。拘束したままの手を外して、キーラの頬に触れる。キーラはまだスキターリエツを睨んでいた。でも腹立たしさによるものというより、そうするしかいまは思いつかない、というあいまいな凝視だった。

「だからきみは、このままでもいい」

少女に、と云うより、駄々をこねている幼子に云い聞かせる口調

で告げる。

「ローザのもとで、彼女の手伝いをしていればいい。あの店に来る客は、いまさらきみが紫衣の魔道士だからって気にしたりはしない。もちろん、ローザも。ローザはきみのことが気に入っているし、もしかしたらきみに店を任せようと思えるかもしれない。きみは美味しいお茶とお菓子を出す店をやりたいんだって云ってたじゃないか。このままでもいいなら、その夢が叶う確率は高まる。そのどこが、いけないというんだい？」

（たしかに、そうよ）

スキターリエツの言葉は、静かにキーラの頭に染みこんでいった。

キーラが望むのは、美味しい紅茶とお菓子を出す店で訪れる客をもてなすことだ。たとえば日常で疲れた人が、ぽっかり癒せる場所を提供できたらいい。たわいもないことを楽しく談笑できる場所を提供できたらいい。それが望み。ここでならそれが叶う。忘れられない過去を思い出すこともなく、ましてや望んでもいない紫衣の魔道士であり続ける必要もない。

（————でも、）

ここでなら叶うだろう夢には、圧倒的に、足りないものが存在するのだ。

誰にでも事実を知る資格はあります。(16)

頬に触れている手に、ためらいながら触れる。ん？ と云いたげに、目の前の顔が微笑をにじませる。少しの間、まじまじと見返して、ぐい、と、手をつかんで顔から放した。

「乙女の顔を勝手に触るのは問題行為だと思うのよ」

無然と云えば、スキターリエツはまたたいて、ちらりと苦笑した。軽くにらめば、「ごめんごめん」と謝る。溜息について謝罪を受け入れ、キーラはちよつとうつむいた。思考が頭の中で散らばっている。いろんなことがいつきに押し寄せてきた感触だ。ばらばらに混乱したまま、でも、ただひとつ、いまのキーラにははっきりとわかる不満があった。

「……ここで夢を叶えても、じいさまに見てもらうことができないわ」

口に出してみても改めて、小さな不満だなあ、と感じる。夢が叶うのだ、無視してもいいじゃないか、という考えが閃いた。でもこの不満はけっこう自己主張が激しくて、いやだ、とキーラに感じさせるのだ。ただ、他人が提案する形で夢を叶えたいわけじゃない、と。

子供じみた主張だと思うから、なかなか顔を上げることができない。でも落ちてきた沈黙に耐え切れなくなって、えいや、と思い切る。スキターリエツはキーラを見下ろしていた。表情をくらませた顔だった。なにを考えているんだろう、ちらりと思った。でもなにも云わないままだから、沈黙に便乗して言葉を重ねる。

「じいさまだけじゃなくて、他にも。夢を吹聴してきた友達や、反対してきやがったひとたち、応援してくれたひとたちに報告することもできない。それがあたしはいやだわ」

云いながら、ちよつと滑稽だな、と感じてもいる。

なぜなら、いま、口にしたひとびとは、キーラの夢に期待しているわけではないからだ。キーラの夢を見届けたいなんて、かけらほども思っていないだろう。それどころか、夢を諦めて紫衣の魔道士として生きること期待しているひともある。キーラの夢は、キーラ一人が勝手に抱いたものだ。叶えようが挫折しようが、皆には関係ない。

でもキーラの夢を気にしなくても、キーラ自身を気にかけてくれるひとたちなのだ。

ルークスで夢を叶える、と云うことは、そういうひとたちとのつながりを一方的に断ち切ることだ。なぜならこの国は鎖国しているのだ。他の国々との国交も断絶し、情報も閉鎖している国だから、ここに落ち着いたらキーラ自身の情報を伝えることがなくなる。

（というより、依頼を放棄してとんずらした事実が、最新のあたし情報になるのよね）

ふつと閃いた事実、口元がこわばった。だめだわ、そりゃ。思い浮かべたひとたちが怒り、呆れ、失望する表情までまざまざと想像してしまった。じくつと胸が縮まった気がする。思わず胸を押さえ、動悸を鎮めようとしていると、スキターリエツがつぶやいた。

「鎖国がネックか。それじゃ、しかたないね」

キーラはなぜか、ぎくりとして顔をあげた。スキターリエツは微笑んでいる。でもいつもの笑みとは違うと感じて、こくりと喉を動かした。警戒し始めた意識に従って、大気の力がキーラのもとに集まり始める。スキターリエツは目を細めて、力の流れを見つめた。スキターリエツはなにもしようとしてない。力を集めることすらしない。彼に気圧されながら、キーラは誰にも訊けなかった質問を口にする。

「どうしてルークスは鎖国している、ということにしているの。他の国々と、本当はまだ、交流しているんでしょう」

ローザの店は、さまざまな紅茶を取り扱っている。ルークス産ではない茶葉すらだ。他の店にもそういう不思議がある。だからまだ、他の国と交流はあるのだとキーラは気づいていた。でも誰もがその点では口をつぐむ。平和で豊かなルークスで、おいに違和感を覚えているところだ。うん、とスキターリエツは笑った。

「でもそれに関しては、なにも云うことはないんだ」

ごめんね、と、にこやかに続けて、スキターリエツはようやく動いた。キーラが集めた力を、指ひとつ鳴らして奪う。え、と呆気にとられた。いままでに見たことがない現象だ。続いて、視界がぶれる。公園ではないところに転移させられたのだ、と、遅れて気づいた。

「まあ、きみの希望はよくわかったよ。だからルークスの外に放り出してあげる」

さよなら、とスキターリエツはあっけらかんと告げて、あっさり

と姿を消した。

ぽつんと一人取り残されたキーラはしばらく呆然としていたが、やがて我に返った。あたりを見渡す。森の中だ。ただし人によって開かれた気配はなく、うっそうと薄暗い。すうっと息を吸い込む。

「だったらせめて、もう少しまともなところに放り出さないよーっ」

力いっぱい叫んだが、ただ無為に声が響くばかりだ。キーラががくりと肩を落として地面に座り込んだ。

そういえば有益な資格でした。(1)

(浮上。そう、浮上するのよキラ・エーリン。がっくり脱力していても、事態は変わらない。それどころか、こんなに深い森では時間が経てば経つほど、か弱いわが身が危険にさらされてしまうのは明らか。頼りになりそうな人材が自分以外に存在しない以上、なんとか立ち上がって水場を探すか、木に登って現状把握しなくちゃ。そう、だから浮上。がんばれあたし。さくつと浮上して歩き出すっ)

「って、出来るかーっ！」

ずらずらと脳内に並べた言葉に、キラは雄叫びをあげていた。結構な大声だったから、雄叫びがわずかに響いて消えた。改めて感じる。この場所には誰もいない。頼りにならないまでも、いま感じている心細さを分け合う人間はいないのだ。

ぶる、と唇が震えたが、きゅ、と結んで震えを抑え込んだ。すでに夕暮れだ。気温は下がる途中だから寒さを覚えたのだが、それだけではないことを自覚していた。深まりつつある夜闇が怖いのだ。

「とりあえず」

この場には誰もいない。だから必要はないが、キラはあえて声に出した。

「現場把握するしかないわね。考えましょう、キラ・エーリン」

ゆっくりと地面から立ち上がり、パンパンと服を払いながら、まわりを見回す。木、木、樹。さきほどまで見ていた樹木に似ている

が、あきらかに別物だとわかった。手入れされていない豪快な枝ぶりはどう考えても人の手が加えられていない。さらに、別れ際に云われたスキターリエツの言葉を照合したら、おおまかに見当がつく。毎夜、ローザの家で地図を眺めていたおかげだ。

「ルークスは三方を海に囲まれているんだから、ここは南、パストウスとの国境ね」

それもおそらく、ルークスの国土ではない。スキターリエツがこちらを混乱させるために嘘を告げたとは考えない。そのような雰囲気ではなかった、と云うよりも、スキターリエツに嘘をつく必要はないだろう。まったく脅威ではない普通の女を、彼女が望むままに放り出したに過ぎないのだ。

思考をさらに進めると、スキターリエツに云われた言葉が、脳裏によみがえる。状況が状況だけに、途切れ途切れしか覚えていない。それでも言葉の断片はあざやかにキーラの意識を照らす。

——精神的な足手まといなんだよ。

云われたときに感じた、燃えあがるような悔しさは、いまはない。そうなんだろうな、という静かな受容があるだけだ。しんと鎮まった意識がゆるゆるとキーラの内側に広がっている。落ち着いていく心地を認識しながら、空を見あげる。もう陽が沈んだから、水場の確認は難しい。現状の把握もしかりだ。

だからもう今夜は動かないでいようと決めて、キーラは力を集めて光を灯した。再び地面に座り込み、あたりを照らすよう光を調節して固定する。服は汚れてしまうが、仕方ない。喉が渴きすぎで痛い。唇も乾いている。魔道ギルドでまずい紅茶を飲んだきりだと気

づくと、きゅう、とお腹が鳴った。獣の襲撃があればな、となにげなく考えた。そうしたら返り討ちにして、焼き肉にするのに。

あ、でも、と問題点がさらさらと閃いた。

（獣ってたいてい毛皮があるわよね。それを切り取らないとごちそうにはありつけないんじゃないかしら。しまった、ルークスはとても平和だから靴にも服にも刃物を仕込んでないわ。食いつぶぐれるじゃないの。刃物の代わりに風を使うとか？ あるいは死体のまま燃やし毛皮を焼き落として肉を取り出すとか。ううん、でも毛皮が残って口の中でごわごわしそう。それに毛皮を燃やすなんて、この寒空ではもったいない気もするし。——って、肉食の獣はまずいというわね。じゃあ人間を襲いそうな獣もまずいのかしら。最悪でも空腹に勝る調味料はないともいうわよね……）

空腹に脳内を支配されて考えていたが、はた、と唐突に、キーラは我に返った。

「じゃなくてっ、他に考えなくちゃいけないことがあるでしょうあたし!!」

食べ物に偏りそんな思考を、慌てて方向転換する。そう、いま考えなければならぬことと云えば、この森を出た後にどうするか、と云うことだ。

そういえば有益な資格でした。(2)

「パストウスには魔道士ギルドがある」

落ちていた木の枝を拾って、積もっていた落ち葉を退ける。声に出してつぶやいた内容を、地面にカリカリと書いた。本当は帳面に書きたいが、ないものは仕方ない。

さきほどまで震えていたキーラだったが、頭上からふりそそぐ光のおかげで落ち着いてきている。同時に、冷気を妨げる結界も張ったから震えも収まった。時折、闇の向こうに獣らしき気配がよぎるが、いまのところ、近づいてくる気配はない。

「魔道士ギルドに行けば、マーネに帰れる」

カリカリ。続いて閃いた言葉をつづった。魔道士ギルドにはお金を借り出せるシステムがあるし、転移魔道を取得している魔道士もいるかもしれないからだ。

「ただ、問題はあたしの情報が魔道士ギルドに伝わる、と云うこと」

状況から可能性は低いと考えているが、『灰虎』がもし、魔道士ギルドにキーラが行方不明になった事実を報告していたら、ただちに『灰虎』に情報が伝わるだろう。同時に、依頼された仕事を放棄している事実が、ギルド長にも伝わる。そんな状態でマーネに戻ろうものなら……、——————に引退してほしくなければ————、アウイス便経由で送られた言葉を思い出して、口元をひきつらせた。だめだ、だめだめ。マーネに戻れない。

（とすると、『灰虎』と合流するのが望ましい、か）

かつ、と、木の枝を止める。とんとん、と地面を叩いて、溜息をひとつ落とした。

あれからルークスで穏やかな日々を過ごしたおかげなのか、拘束されていた間に抱いていた感情はすでにあいまいだ。負の感情もこみあげてこない代わりに、正の感情も浮かんでこない。なかなか興味深い経験をしたなー、と、他人事のように捉えている自分に気づく。危ない。なにせ『灰虎』にしてみたら、キーラは最重要機密を知った存在なのだ。危機感を持って探しているだろうから、当の本人がこんなに呑気でいいわけがない。

いや、思考が少々、わき道にそれた。

「合流するのが望ましい。とはいえ、再び、魔道を封じられる可能性もあるわけだし」

いくらキーラが用心したとしても、身体的には普通の人間にすぎない。前回のように、意識を失っている間に、魔道を封じられる可能性はある。あるいは、拘束される可能性がある。そういう可能性を減らすべく、『灰虎』から最低限の保証あるいは信頼をもぎ取る必要があるが、さてどうしたらいいだろうか。

「いちばん簡単な方法は、味方になることよねえ。でも一国の王子を騙ろうとしている集団の味方になっていいものかしら。いえ、よくないわよね。だってばれたらあたしだけじゃなくて、魔道士ギルドにも迷惑がかかるもの。つか、じいさまってばどうしてまんまと騙されちゃったのかしら。——って、」

つらつらと声に出して、唐突に閃いた。魔道ギルドの長は、本当に騙されているのか？

（待って。待ってよ）

さーっと血が引く心地だ。キーラは魔道ギルドの長をよく知っている。赤子であったキーラを引き取り、育ててくれた存在だからだ。だからつくづく思い知らされている、魔道ギルドの長は間違いなく海千山千の狸爺だと。

そんな狸爺が、たかだか傭兵上がりの若造に、まんまと騙されるだろうか。

続いて思い出した事実がある。『灰虎』の象徴的存在、チーグルと魔道ギルドの長は同郷の昔馴染みだ。その関係を考慮するなら、むしろ魔道ギルドの長は『灰虎』の協力者となっていると考えるほうが自然ではないだろうか。

（まさかね。まさかと信じたいけどっ）

でもやりかねない。考え込まなくても、するっと言葉が出てしまっって、キーラは頭を抱えた。必要とみなした以上、魔道士ギルドの狸爺はどんなことでもやるのだ。身内だからこそ知っているあれやこれやを思い出して、キーラは頭を振った。

（方針変更。パストゥスに行つて、魔道士ギルドにて情報を集める）

少し前に考えていた方針とはまるで逆の方針となってしまうたが、しかたない。そもそも文無しの状態なのだ。どうしてもどこかに保護を求めなければならぬ。候補はいくつかあるが、キーラは魔道

士である以上、もっともしがらみが少ないのはギルドなのだから。

（ただ、その前に）

ちらりと結界の外に視線を向けた。黄金色に輝く双眼がある。他の動物とは違い、まっすぐに結界越しにキーラを見据えている。キーラを獲物とみなしているあかしだ。

にやりと口端で笑んで、木の枝を放り出した。相手はまだ夜闇の領域にいるが、頭上に固定した光のおかげで、ぼんやりと姿が見える。なかなか立派な体格をした、虎だ。^{チーグル}雌だろうか、雄だろうか。雌なら望ましいのだけど、と考えているうちに、ぐるるう、と低く威嚇が聞こえてきた。同調するように、キーラのお腹もくるくると音を立てるものだから、ちよつとだけ困った。ここで炎の魔道をぶつければ一発で決着がつく。

（いくら食べたくても——、いやいや、ここは我慢するべきところ）

だってあたし、人間だし！　と気合を入れたところで、闇の向こうから獣が飛び出した。

そういえば有益な資格でした。(3)

冷気を遮断する結界は、物理的衝撃にも対応できる。だから野生動物の素早さが人間よりはるかに優れていても、怯える必要はない。

そう云い聞かせていたが、さすがに勢いのまま虎に押し倒されたときは心臓が大きく脈打った。鋭い牙が結界のすぐ傍らで暴れる。身体全体をおおう結界越しに、鋭い爪がキーラの身体を抑え込んでいる。ごくりと喉を動かした。慎重に、慎重に。云い聞かせても、どくどくと心臓が怯えている。呼吸を繰り返して、心を鎮め、相手の虎を観察した。雌だ。

(我ながら、えぐい方法だと自覚しているけれど)

両手を伸ばして、虎の頭に触れようとした。相手は、ぐるるう、と頭を振る。がつがつ、と爪が動く。怯えた指がさまよって、ぐつとひげをつかんだ。びくりと虎が反応する。

「猛々しく気高い、北の森の女王よ」

芽生えた隙をついて、いつもは使用しない言葉に力を込めて呼びかけた。^{ヴォールズ}言葉は世界の理に働きかける。^{ヴォールズ}人間並みの知能を持たぬ獣でも、世界を構成する一要素である以上、^{ヴォールズ}言葉の影響から逃れることはできない。

はたして、虎は低く唸りながらも、先ほどまでとは違う、こちらをうかがう様子で落ち着きなく、黄金色の瞳を反応させている。

「どうか慈悲を与えたまえ。我は、か弱き仔。貴女の庇護すべき存

在。ただひたすらに、貴女の守護を必要とする者である！」

（お願い！）

ひげを放して、とんがった鼻先に直に触れた。ごつごつした毛触りに、怯えを誘発される。だが動かない存在に、無理矢理、警戒を解いた。結界を解いた。大きくたくましい首筋に思いきり抱き着いた。目の前の存在は、キーラを守護する存在。自分は目の前の存在から護られるべき、か弱き獣。なによりも強く、自分自身にも云い聞かせた。

変化はしばらくの時間をおいて現れた。やわらかく。そっと腕の中の生き物が動いた。ぶわりと獣の匂いが漂い、べたりと耳が濡れる。なめられたのだ。おそろおそろ腕を解けば、さきほどまでとまるで様子を違えた虎が、いる。くるるう、とやわらかく鳴いて、再びべろりとなめてくる。どうやら、成功したらしい。

（よ、かった……）

いま、キーラが用いた魔道は、野生動物を手なずける魔道である。魔道士を人間としてではなく、同族として錯覚させる魔道なのだ。この雌虎は、キーラを我が子と認識している。子を護ろうとする母親ほど、頼もしい存在はいない。絶対的な味方だ。

魔道士ギルドに行つて、情報を集める。そのように予定を決めたものの、まわりの思惑がさっぱりわからない以上、絶対に信頼できる護り手が欲しかったのだ。ただそれだけの理由で、野生動物を傀儡にするのはいささか自分勝手である。ただ、キーラを狩りの標的にしたのは野生動物のほうだからあきらめてほしい、と主張したい。

（とりあえず子持ちなのかどうか、確認しておこう）

大きな頭をしっかり両手に捕らえて、言葉で語りかければ、雌虎の意思が伝わる。
ヴォールズ

おまえの他に子供はいない。きっぱりと断言して、雌虎は尾を揺らした。少し気が楽になった。ほうつと息をついて、キーラは背後の樹木に寄りかかる。緊張がほどけて、ゆらゆらと溶けだしそうな気持ちだ。

と、ぺろりと雌虎になめられた。まぶたを開ければ、すぐ近くに黄金色の瞳がある。手を上げて虎の頭をなでると、やわらかく眼差しをゆるめる。かと思えば、雌虎はすぐ近くに横になり、もたれかかるようにと促してきた。慎重に確認する。雌虎にかかった術に揺らぎはない。だからキーラは素直にそのまま、雌虎にもたれかかった。むわっと毛皮の匂いが襲いかかってきたが、いまはおとなしく夜が明ける瞬間を待つことにした。

そういえば有益な資格でした。(4)

知らぬ間に、うとうとと眠りこんでいたらしい。頬をなめられた感触に慌ててまぶたを開いた。すぐ間近に虎がいる。反射的に悲鳴を上げそうになったが、再び、ペロンとなめられて緊張がほじけた。昨日のやり取りも思い出して、肩から力を抜いた。すでにあたりは明るい。夜が明けて、結構な時間が過ぎているようだ。

と、地面に座り込んでいるキーラの前に、野兎の死体が置かれている事実気づいた。

思わず顔を上げると、雌虎は低く唸る。首をかしげて動かないでいると、ぐわっと野兎に噛みついて、ぽんとキーラの膝の上に置いた。どうやら食べると云っているらしい。折よく、お腹がくるると鳴いた。空腹を思い出し、キーラはがばりと雌虎に抱き着く。

「ありがとうっ」

ぐるるう、とすぐに上がった、不満げな唸り声を直訳するならば、いいから食べる、というところだろうか。

野生動物を傀儡にした、思わぬ副作用に感謝しながら、さっそく力を集めて野兎を調理する。風の刃で野兎をさばき、炎で丸焼きにしたのだ。加減がうまくいなくて服が血みどろになってしまったが、とりあえず腹は満ちた。

ひと息ついていると、雌虎は立ち上がってゆったりと歩き出す。見守っていると、立ち止まって振り返る。ついてこいと云っているのだろうか。首をかしげながら後についていけば、澄んだ泉にたどり着いた。目を丸くする。喉も乾いていたし、血で汚れた身体と服

も洗いたかったからちよいどいい。キーラは勢い込んで水を飲んだ後、服を脱いで泉に飛び込んだ。ちよつと冷たかったが、ごしごしと手のひらで身体をこする。一度沈み込んで、髪をかきあげた。

とはいえ、この段階に至れば、首をかしげてしまふのである。

なにに対しかと云えば、他でもない、傀儡にした雌虎に対してである。雌虎にかけた魔道は、キーラを我が子と錯覚させる術のはずだが、受けている扱いはどう見ても、野生動物の仔に対する扱いではない。人間の生活を知っている存在ならではの扱いである。

（動物を手なずける以外に、なにか効果があったのかしら）

たとえば、魔道士側の知識を分け与えるとか。

雌虎は泉のほとりでのんびりと毛づくろいしている。いかにもネコ科動物らしいしぐさだが、深く考え続ければ、灰色の不安がむくむくこみあげてくる。だがすでに魔道を行使し終えた状態なのである。いまさらどうしようもないと開き直って、身体を水洗いし終えたキーラは服をじゃぶじゃぶ水洗いした。まだ血は凝固していないため、血は速やかに流れた。ぎゅ、ぎゅつと絞り、ぶるつと震えた。泉の冷たさが、いまになって体の芯まで凍えさせてきたのだ。

とりあえず泉から上がって、たき火を用意しよう。

そう決めて、ほとりへと歩き出そうとしたとき、ゆったりと構えていた雌虎がぴんと反応した。キーラの背後に向かって、低く唸る。はっとキーラは緊張を取り戻し、服を放り出しながら背後を振り向いた。さほど大きくない泉の向こう、木立の間に、なにかの気配がする。しゅるんと右手に力を集めた。明確な形を与えないまま、何

者が潜んでいるらしき、木陰へとぶつける。

「うわっ」

(……うわ?)

力の塊を受けて、ばしんと樹が揺れた。ぱらぱらと木の葉が舞い落ちる中、ひとりの若者が木陰から転げ出ている。足をもつれさせて、どしんと地面に尻もちついた。間違えようがない、人間だ。人間の若者だった。キーラは反射的に緊張を解いて、裸である自分を出した。若者はゆっくりと立ち上がろうとしている。

その様子を黙って見守って、キーラはもう一度、集めた力に風の形を与えて若者にぶつけた。具現化した力は若者を巻き込んで、今度は他の樹木にぶつかる。ちいさく悲鳴が聞こえたか。そのままずるずると地面に倒れ込んだ若者を見届けてから、キーラはゆったりと泉から上がった。歩み寄ってきた雌虎の頭に、ポンと手をのせた。

「人の気配がないからって、油断し過ぎてたわ。素っ裸にならずに、服だけを洗えばよかったのよね」

ぐる、と、まるで呆れているかのように、雌虎は唸った。

そういえば有益な資格でした。(5)

まずは乾かした服を着て、あたりの様子をうかがった。雌虎も反応していないから、キーラが感じるままに、だれもいないという結論で間違っていないだろう。

次に、倒れ伏した若者に近づく。キーラにしてみたらありがたい存在だが、不審人物だという認識は揺らいでない。なぜならここは国境近くにある、深い森である。深い森に立ち入っているにもかかわらず、若者の服装はいたって軽装であり、また単独行動らしい事実も胡散臭い。

(あと考えすぎかもしれないけど、ここってスキターリエツによって移動させられた場所の近くなのよね)

だからこそ、若者に対してやや過剰な警戒心が働く。彼との出会いはスキターリエツが企んだものではないか。そんな疑いがある。だが、いまは若者を検分するべきだろう。

眉根を寄せて意識を失っている若者は、キーラと同年代だろうか。先に身体全体を検分して、骨折やねんざがないかどうかを確認した。問題ない。次いで容貌を眺める。あざやかに赤い髪は前髪がやや長く、シンプルな髪飾りでまとめられている。服の生地は珍しくないもので、仕立ても凝ったところはない。手を見る。多少の傷はあるが、きれいな手だ。

そこまで情報を摘み取ったところで、ちいさなうめき声が聞こえた。

慎重な動きで、若者から距離を置く。片手には力を集めて、様子をうかがった。

「う、……ん」

二、三度の瞬きのあとで、若者は瞳を開いた。温かな印象を与える茶褐色の瞳は、ぼうっと森の木々を見上げていたが、頭を振りながら起きたころにようやくキーラに気づいて真ん丸に見開いた。にっこりとキーラは微笑みを浮かべる。

「こんにちは。気分はいかが？」

若者は応えない。みるみるうちに、耳まで赤く染めてキーラから顔をそむける。

わかりやすい反応から悟った事実には、キーラは唇を噛みしめた。こいつ、すっかりわたしの裸、見ていやがった。集めていた力を衝動的にぶつけなくなったが堪えて、控えていた雌虎に眼差しで語りかける。

ぐる、と雌虎が存在を主張し、若者は慌てて視線を動かした。威嚇している雌虎をしっかりと認めて、今度は口元をひきつらせて青ざめる。

「教えてもらいたいことがあるんだけど、いいかしら？」

「お、落ち着いている場合じゃないだろうっ。こ、この虎、どうにかしないと！」

「大丈夫よ、あたしの大切なお母さまだもの。それより、あなたは何者なの。そして、どこから来たの？」

お母さまア？ と素っ頓狂な悲鳴が上がったが、この際、無視である。若者の動揺にかまわず、率直な疑問を問いかけた。

ある程度の予測はできている。若者の服装から判断するに、近くに居住場所があるのだ。ギルドはなくとも、情報は手に入るかもしれない。そう考えていたキーラだったが、若者の応えに驚くことになる。

「おかしなことを云うんだな。虎から人間が生まれるなんてそんな話、精霊であるぼくだって聞いたことはないよ」

どこか子供っぽい仕草で腕を組み、若者は憤然と云ってのけたからだ。

（精霊？）

耳を疑って、まじまじと若者を見つめる。

精霊とは、人間とは異なる進化を遂げた種族のことだ。だが目の前の若者はどう見ても人間にしか見えない。思わず沈黙して、ふう、とため息をついた。手を振って力を散らせる。その力の動きにも、若者は反応しない。力の動きが視えて、無視している反応ではない。そもそも視えていないのだ。キーラは首を振る。

「ほらを吹くのもその位にしておくのね。あなたが精霊であるわけないでしょう」

呆れを隠さないで告げれば、若者はぐっと唇を結んでキーラを睨んできた。

そういえば有益な資格でした。(6)

キーラはこれまで精霊と云う種族を見た経験はない。

書物に記されている記載を覚えているだけだ。人間とは異なる進化を遂げた種族、人間よりもっと自然に近い、不思議を行使する存在、と云う描写を覚えているだけ。だから断言するべきではなかったのだが。

「なにを根拠に、そんなことを云うんだ」

キーラを睨んだまま、若者は云う。虚勢に似た気配を感じ取ったキーラは、若者が精霊ではなく人間だという推測に確信を抱いた。同時に、若者自身も自覚している事実にも。

(この状況で、自分を精霊だと名乗る利点ってなにかしら)

若者の質問に答えないうまま、ひっそりと考える。すぐに首を振った。わからない。わからないが、厄介事の匂いがぷんぷん漂っている。

若者から距離を置いたほうがよかったのではないか、といまになってキーラは考えた。

見るからに軽装な若者が、このまま森で過ごすはずがない。そもそも食料も持っていないのだ。何かしらの用件を済ませ、空腹になれば、居住場所に戻るだろう。その動きを陰からこっそり、後をつければよかったのだ。

(かといって、いまから別れて後をつける、と云うのも不自然よね

え)

「おい、聞いているのか？　なにを根拠に、ぼくが精霊ではないと断言するんだ」

なにしろこのように、若者はキーラが考えている間にも、しつこく質問を繰り返しているのだ。自分が納得する答えを得られるまで、やめそうにない雰囲気濃厚だ。いろいろな仮想を諦めて、キーラはこめかみに指を当てながら口を開いた。

「あなた、わたしの攻撃で気絶したじゃない。精霊ならありえないことよ？」

「攻撃だって？　あれはただ、突風が吹いて吹き飛ばされたただけだ。人間であるきみは関係ないじゃないか」

(んなわけあるか)

さらにぐりぐりとこめかみをもみほぐす。人間一人を吹き飛ばす突風なんて、不自然極まりない自然現象だろう。なぜ魔道によるものだと気づかない、と、もはやキーラは精神的な疲れしか感じない。

「……あのね、あたしは魔道士だから突風を作り出すことくらい、出来るんだってば」

「マドウシ？」

いかにも不思議そうに繰り返されて、キーラは若者を見返す。

とぼけているのか、と一瞬考えたが、目の前の表情を見て、違うと確信する。とぼけているのではない、本気で疑問を抱き、問いかけている表情だ。悟ったキーラは今度こそ困惑して、眉根を寄せる。目の前の若者は、魔道士と云う存在を知らないのだ。

(魔道士って、メジャーな職業、よね？)

おそろおそろ、自らの知識に確認する。魔道士、――世界に存在する力を可視し、行使することができる存在は、はるか古の統一帝国時代から存在している。存在は途絶えることなく、いまの時代まで続いている職業だ。いかなる辺境でも知らない民はいない。

まじまじとキーラは若者を見つめていたが、それは若者も同じだった。

胡散臭そうにキーラを見つめて観察していたが、やがてふんと鼻息荒く、云つてのけた。

「きみに突風を作り出すことができるだって？ 信じられないな、それはぼくたち精霊の技だ」

「そりゃ精霊にもできるでしょうよ。同様に、あたしたち魔道士だってできるの」

「なら、やってみせろ。ぼくが確認してやる」

偉そうに、と反発したキーラだったが、面倒くさい現状を打開するにはそれが早い。

片手を掲げて、力を集める。先ほどと同じように、風の形を与えて若者に投げる。若者に力はぶつかる。だが今度は格段に威力を弱めたため若者が倒れることはなく、力は若者の髪を乱しながらやわらかく散って、消えた。見返したら、若者は呆然としている。

「……風だ」

「そういう形を与えたからね」

「間違いない風だ」

「……今回はあなたを痛めつけないように力を弱めたけどね」

「なぜだ、なぜ人間であるきみに技を行使できる！」

「……。……だから」

それが魔道士なんだってば、と云うよりも前に、若者はぽんと手を打った。

「そうか。きみはぼくと同様、精霊と人間との間に生まれた混血なんだな？」

「はあ？」

とんでもないことを云われた。

呆氣にとられている間に、そうかそうか、と若者は盛んにうなずいている。どうしたらいいものか、ついに悩みながら眺めていると、顔を輝かせた若者がキーラの手首をつかんだ。さきほどまでの表情は消えうせ、あからさまな好意が整った顔に浮かんでいる。

「ならばきみには権利がある。案内しよう、ぼくらが住まう、精霊の里へと！」

（はい！？）

キーラは思わず硬直し、同時に、若者の脳内構造がきわめて心配になった。

精霊の里とは秘境であるはずだ。人間を寄せ付けない場所に、案内していいのかと突っ込みを入れたくなかったが、動き出した若者に引きずられてなにも云い出せなかった。

そういえば有益な資格でした。(7)

(ちょっと都合の良すぎる展開ね)

心の内でつぶやくキーラには、もちろん成り行きを警戒する気持ちがある。

若者が導く先に罠が待ち受けている。そういう種類の警戒はしていない。若者の言動は的外れな印象があるが、少なくとも嘘を云われている感触はない。表裏がないのだ。

だからキーラが警戒している対象は、自分をこの地に転移させたスキターリエツだ。

スキターリエツは、本当に適当な場所へとキーラを転移させたのだろうか。とぼけた印象が強い、胡散臭い人物だ。なおかつ一国の重要な地位に収まっている人物である。そんな人物が、ただ無為に魔封じから解放された最高位魔道士を放置するだろうか。

まさか、とすぐに思考が否定して、キーラは眉を寄せる。

いや、放置の可能性はあるのだ。キーラはスキターリエツに普通の女だと分析されている。戦いにおいては役に立たない、むしろ足手まといにしかない存在だと。いくら能力があろうと、状況を変える存在ではない。そう判断されているのなら、適当な場所へと転移させた可能性は高まる。だが、スキターリエツはそう考える人間だろうか。

(わからない、わ……)

スキターリエツとはいくつか話をした。彼にまつわる情報もいくつか入手した。

だが、スキターリエツ自身がなにを考え、なにを望んでいるのか、キーラは知らないままだ。いまさら気づいた事実、情けない気持ちになる。まったくなにをしていたのか、と、自分自身を叱咤したい。でも無駄な後悔だ、過去は取り戻せない。

落ち込みそうな気持ちを素早く切り替え、逆に、推測できないかと試みる。

まずスキターリエツは異世界より召喚された存在だ。その事実だけを見るならば、彼の望みは元の世界に帰還することではないかと閃く。いま、キーラがマーネに戻ることを希望しているように、スキターリエツも異世界に戻ることを望んでいるのではないか。

だが、この十年間における、スキターリエツの行為を思い出すと疑問が残る。

自分を召喚した王国を鎖国し、魔道士たちと共にさまざまな改革を進める。それがスキターリエツの、十年で進めた行為だ。これが故郷に戻りたいと望む人間の行動だろうか。

——ちがう、と感じる。

改革とはすべからず時間がかかるものだ。また、確実な結果を約束されていない。不確定要素の高い、また、時間がかかる事柄を実行するには、相応の覚悟が必要だろう。

すなわち、改革対象にどこまでも付き合う覚悟だ。少なくとも、いずれルークス王国から離れようとする人間には

抱えられない代物である。

「どうした？」

先を進んでいた若者が、不思議そうに振り返って、足を止めたキーラに問いかけてきた。

「訊いてもいいかしら。ここはルークス王国？　それともパストウス？」

「なにをいまさら」

「いいから応えて！」

呆れた様子を隠さない若者を遮って、キーラは鋭く問いただした。一瞬、不愉快そうに眉をひそめて、だが隠すことではないと考えたのだろう、口を開いて応える。

「きみはおかしなことを云っている。ここはルークス王国だ。ぼくら精霊が拓き、人間の王に預けた国。他の場所であるはずもないだろう」

（しまった）

キーラは息を呑み、立ち尽くした。間違えていたのだ、取り返しがつかないほど。

このとき、脳裏をよぎった顔は、アリアだ。

『灰虎』からアレクセイの紋章を奪おうとした彼女はなにをした？　関係のない魔道士をわざと弱らせ、漂流船に乗せた。アレクセイたちが自分の船に招きよせる事態を期待して。

あれは本当に、アリアが考えた作戦だろうか。ちがう、と断言で

きる。アリアは企みに向いた性格をしていない。だが、スキターリエツが考えた策を忠実に実行する性格だ。

だから、――――。

「精霊の里はここから近いっ？」

「そうだな、遠くはないぞ。ここから、」

「云わないで。ここを離れるわよ。それからあなたも里に帰るのを諦めてちょうだい」

「なんだと？」

つかまれていた手首を動かして、逆に、若者の腕をつかんで走り出す。慌てたような声がして、若者が引きずられる。ずっと沈黙していた雌虎が低く唸って、まだためらっている若者を脅しつける。あきらめたのか、若者はキーラに従って走り出した。

（ここを離れなくちゃいけない）

走り出しながら、キーラは確信していた。

（スキターリエツがあたしをここに転送したのは、たぶん、精霊の里を突き止めるためだ）

そういえば有益な資格でした。(8)

ぜいぜい、と荒く息をつく音が聞こえる。

適当に聞き流しながら、集めた力をうすく広げていく。地面から半円状の幕を張り巡らせるイメージだ。若者と雌虎、キーラの三者を包んだところで力を留める。

これで簡易結界の出来上がりだ。ヴォールズ言葉を使用していないから、空間を切り取るほどの効果はない。ただ、魔道による干渉は徹底的に除外するよう、強くイメージした。ようやくひと息ついて、地面に座り込んだままの若者を見下ろす。

「まだばてているの？　ほんの少し走っただけなのに」

「ほんの少し？」

がば、と、若者が顔を上げる。息を少しも乱していないキーラを見て、どうやら言葉につまったらしい。ぷいと顔をそむけて、立た片ひざに片腕を置いた。しばらく休ませろ、とぶっきらぼうに云うものだから、キーラはもう一度結界を確認することにした。そうしながらむかむかとスキターリエツを思い出す。

(なにが『ルークスの外に放り出してあげる』、よ！)

スキターリエツの言動を、疑いもせずに信じ込んだキーラが馬鹿みたいではないか。

いや、彼の申し出を断った以上、信じるほうが馬鹿なのだろう。わかっている、わかっているがまさか、あの段階で嘘をつくなんて思うはずがないだろう。スキターリエツの性格から、キーラを面倒

だと感じたから放り出した。そう感じたから信じたわけだが、もつと疑うべきだったのだ。だまされている可能性をちらりとも考えないキーラは本当にまぬけだった。

（だー、もう、腹が立つ！）

とりあえずもう一度、会うことがあったらぶんなぐる。八つ当たりであろうとなかろうと、知ったことか。固く決意して、結界の確認を終えた。

「それで、ぼくをここまで引きずってきた理由はなんだ」

やがてふてくされた様子で若者が問いかけてくる。キーラも地面に座り、傍に腰を下ろした雌虎の頭を撫でた。若者は虎に怯えつつも、まっすぐにキーラを見つめてきた。

「ルークス王国にある精霊の里に住むなら、知っているはずよ。いま、この国が精霊たちを利用して、改革を進めているって」

魔道ギルドの代表レフから教えられた内容の断片を口にする。あるいは知らなければどうしようと考えたが、さいわいにも若者は表情を引き締め、警戒するようにキーラを見た。

「きみは政に携^{まじわ}わる人間か？」

「ちがうわ。少し前にルークス王国に連れてこられた人間よ。その前は、十年前にルークス王国を脱出したアレクセイ王子に雇われていたの」

「アレクセイ王子だと！？」

こちらを信用させるために、多少のうしろめたさを伴いながら、

キーラは王子の存在をちらつかせた。効果は抜群だった。若者は顔色を変えて、キーラの肩をつかんできたのだ。

「王子は無事なのか。王家の紋章はっ？」

「……無事よ。琥珀で出来た紋章なら、あれも無事だったわ。王子が持っていたもの」

キーラが答えると、若者はおおきく息を吐き出した。心の底から安心した様子に、キーラは唇を結ぶ。精霊と名乗った若者は、紋章の謎を知っているのだ。紋章の正体を訊ねて、答えは得られるだろうか。ためらっていると、ぱん、と若者は手のひらとこぶしを打ちつけた。

「では役人たちは嘘をついたのだな。紋章は我らの手にあると。だからおとなしくわれわれに従えと云ったというのに……。くそっ」

ぴくりと眉を動かす。違和感を覚えた。

「待って。ならあなたたちの里は役人に知られているということ？」

だったら、スキターリエツがキーラをここに転送した理由は精霊の里を突き止めるためだ、という推測は間違えている。とうに明らかになっている場所を、あえて探る必要はないからだ。こめかみに指を当て、考え込もうとしたキーラに、若者は首を振った。

「いや。ぼくらの里に役人は来ていない。ただ、他の里から連絡があった」

「……事実を知らせて警戒させるため？ それとも役人たちへ恭順を促すため？」

「前者だ。里長が云うには、自分たちが紋章を取り戻すから役目を

放棄するな、と通達してきたらしい」

「役目って、なんなの？」

訊ねれば若者は口ごもる。答えられないのか。ならば、と別の質問を口にする。

「なら、紋章をあなたたちが重視する理由はなに？」

「……おまえは知らないのか？ アレクセイ王子に教えられていないのか」

疑いの眼にぎくりとしたが、おくびにも出さずに、平然と答えた。

「あたしはルークス王国の人間じゃないもの。話すべきじゃないと考えたんじゃないかしら。でもこれから王子の元に帰還したときに、あたしが掴んだ事情を説明しないといけないじゃない？ なぜ精霊たちがみすみす利用されているのか。いまのままじゃ、あいまいな説明にしかないわ」

ついでにぺろりと嘘もついた。

いま、アレクセイ王子を名乗っている存在は偽物だ。だから紋章の謎などまったく知らないに違いない。だからこそ情報を入手しようと考えたのである。これから『灰虎』と合流できたとき、交渉を有利に進めるためだ。少なくとも魔封じは必要ないと判断されたい。

魔道ギルドのレフを思い出して、実はひやひやしていた。だが目の前の若者は、レフほど洞察力に優れていないようだ。それもそうだな、とあっさり納得して明かす。

「王家の紋章には、次代精霊王の意思が宿っているからだ」

あっけらかんと明かされた内容に、キーラは目を見開いた。

そういえば有益な資格でした。(9)

「精霊王ってなに？ 次代精霊王ってなんなの。そもそもルークス王国には幽閉されているとはいえ、人間の王さまがいるでしょ。それなのに、王ってどういうこと」

自失は一瞬だけだ。すぐに自分を取り戻して、つぎつぎと質問を放った。若者は目を丸くして、だがじきににやりと口端をあげる。ふふんと勝ち誇ったように笑みを浮かべ、

「きみは本当に、なにも知らないんだな。ひょっとしたらアレクセイ王子に信用されてないのではないか？」

どうやら反撃らしい言葉を口にした。キーラは（なにをいまさら）と淡泊な反応を返そうとして、慌てて唇を嚙んで見せた。アレクセイ王子の仲間だと名乗ったのだ、それらしい反応をしなければなるまい。かろうじて悔しそうに装えば、若者は満足そうにうなづく。

「そうか。アレクセイ王子が信用できぬ輩に説明するのは業腹だが、寛大なぼくがくわしく話してやろう」

「……よろしくお願いします」

まぶたをふせて慎ましく応えたが、普通に苛立った。雌虎に置いた手のひらを動かして、気分を落ち着かせる。べろんと応えるように、あるいは、なだめるように雌虎がなめてきた。我慢我慢、と云い聞かせていると、若者は軽く咳払いをして口を開いた。

「もちろんルークス王国を治める役目は、かつて我々から国土を譲られた少年の子孫が担っている。だが彼らは、決して我々を治める

立場にあるわけではない。そもそも精霊が拓いた国なのだ。国を譲られたにすぎない存在が、拓いた民を治めるなどと、不遜だろう？」
(そう、かしら?)

キーラはこっそり疑問を抱いた。

たとえ精霊たちがルークス王国を拓いたという事実があったとしても、指導者としての役割を他者に譲ったのなら、むしろ他の者以上に、役割を譲った存在に従わなければならないのではないだろうか。

「我らを治める存在は別にいる。それが精霊王だ。精霊王は決して特定の里に留まることをせず、ただ一人、王のために秘められた領土から我々のために森を管理している。肉体から解放された意志を、ルークス王国にある森の隅々まで広げて、木々の成長を管理しているんだ」

「えーと。それはまた、ずいぶん孤独な王さまね」

肉体から解放された意志、というくだりがよく理解できないが、聞いた限りでは王さまと云うより、庭師とか造園家、と云うイメージである。

ルークス王国にある森の隅々までって、広いだろうに大変な仕事だなあとも感じた。だれも手伝ってやらんのか、と思いつながらも感想を伝えると、若者はむっと唇を結んだ。

「ぼくらがなによりも敬愛を捧げる方なんだぞ。孤独なはずないだろう」

敬愛を捧げられようと、一人で行動する寂しさは変わらないだろうと云い返したかったが、黙っておく。精霊と人間、違う生活文化があるなら価値観も違うのかもしれない。

「ごめんなさい。それで、王さまはひとりで過ごしてらっしゃるなら、次代精霊王はどうやって生まれるの？ それにどうしてそんな存在の意思とやらが王家の紋章に宿っているの？ どうやって王家の紋章に宿らせるの。そもそも、わたしたちの常識じゃ、個人の意志を生物から切り離すなんて不可能なんだけど」

「ま、人間たちの常識ならばそうだろうな。……次代精霊王がどうやって生まれるのか、ぼくは教えられていない。最大の秘技だからな。次代精霊王の意思を肉体から解き放つ術も同様だ。ただ、次代精霊王の意思が王家の紋章に宿り、王族を守る理由は、それが精霊王となるための試練だからだと教えられている」

「……ふう、ん……」

「どうだ、よくわかったか」

いや、さっぱりわからない。

正直に云い返したくなったが、若者が胸を張っている様子を見ると、これ以上の知識は引き出せないのだと悟った。役に立たねえ、とつぶやきたくなったが、またもや我慢する。

若者の知識は神話的で、具体性がない。これでよく納得してられるな、とキーラは感じるが、まあ、そんなものかもしれないと考え直す。他国だって、大多数の国民は王族の詳細に興味を持たない。自分たちがしたがう存在として認識する程度だ。

とにかく琥珀の紋章は、精霊にとっても大切なものだ、という事実を理解しておこう。少なくとも紋章を使えば、精霊たちは従わざるを得ない程度には大切なものだ。

ただ、そうするとむくむくと疑問が芽生えてくるのだ。

まずひとつめ。いまは精霊たちが国によって利用されようとして
いるときだ。種族の大事ともいえる事態に、精霊王とやらはなにを
しているのか。ただ、木々の成長を管理しているだけなのか。先ほ
どの若者の話によれば、里長がなにかしら動いているようだが、精
霊王とやらがなにかをしている様子はない。それが奇妙だ。

続いてふたつめ。王家の紋章には次代精霊王の意思が宿る、と云
う。アリアたちも似た内容を云っていた。琥珀の紋章には王族を守
る存在の意思が宿っているはず、と云っていたのだ。あときは所
有していた人物が偽王子だから紋章に変化はなかった。しかしそれ
は所有者が偽物だからだろうか。キーラは紋章を確認している。あ
れには魔道的な要素はない。次代精霊王の意思を宿らせる方法など
知らないが、精霊たちが行う以上、力の痕跡を読み取れたはずであ
る。

繰り返そう、紋章には魔道的な要素はない。

つまり、紋章には次代精霊王の意思とやらが宿っていない、ので
はないだろうか。

（これ、どう考えればいいのかしら）

ぐちゃぐちゃにこんがらがった糸のようだ。ぐりぐりとこめかみ
を押さえて、だれかあたしの代わりに考えて、と弱音を吐きたくな
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1861v/>

国盗物語

2012年1月8日00時55分発行